
ルイズと現代の兵士達を会わせてみました

ヨーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルイズと現代の兵士達を会わせてみました

【Nコード】

N9401N

【作者名】

ヨーク

【あらすじ】

ルイズ「私の「暇な奴は見てくれよー!」「こらー!」

登場人物紹介

以下、登場人物紹介です。

ラタリ・ヒューズ（28）

性別は女性。胸はまな板だが体全体をかなり鍛えてある為、しよつちゅう男に間違われる。

特技は格闘。特に蹴りは全て高威力。まともに食らえば失神確実、運が良くて運動能力がドン底まで落ちる。胸なら肋骨数本持つて行くのは当たり前。

料理はプロ並みに上手い。

どついう訳だが、高所から飛び降りても平然と着地、そのまま普通に歩き出す。

役割は狙撃手。だが前線にも出る。

愛銃はM240、M4カスタム、M1911A1。狙撃銃はM1ガ

ーランドだろうが、バーレットだろうがOK。

視力がかなり良いので、アイアンサイトのみ。

右腰の後ろに大ぶりの銃、両腰にナイフをつける。

容姿は、鮮やかな赤毛のショートヘアに鋭いエメラルドグリーン
の瞳。パツと見た感じは赤毛の美男。

身長は170cm。

一人称は「俺」。

暗殺組織「ウィリアム」の暗殺者。

ジョン・デイニス（38）

性別は男。

元SASのNチーム隊長。

現在は「ウィリアム」の訓練施設の教官を勤めている。
Nチーム+ラタリを率いていて、メンバーからはとても信頼されている。

書類仕事は苦手だが、オールラウンドに何事もこなす万能な人。
そこそこ穏便に済みますが、時と場合によっては荒っぽい手段も辞さない。

お茶目な所もあり、ノリツッコミもしたりする。

顎髭を生やしている。

プライスの後輩。

愛銃はM203アンダーバレルグレネードランチャーとスコープ、サプレッサー（減音器）をつけたSOPMODカスタムのM4とグロック。

ジョン・マクスウェル（30）

性別は男。

元SASのNチーム副官。

階級は大尉。副官だが大尉。

髭は生やしていない。

上司と部下の間できつい板挟みと思いきや、かなりまともな人間関係でした。

時折軽口を叩くが、実力があるから出来る。

賭け事には天性の才能があり、ちょこちょこ稼いではみんなに奢ったり貯金する。

鼻を骨折した割には女性にモテる。

愛銃はG36C、サブにショットガンとMP5を装備している。

ジョン・プライス（40）

性別は男。

元SAS、TF141所属。

階級は大尉。

こめかみから鼻の下へ続く髭が特徴的。

冷静だが時々先陣切って突入する事もある。

部下にしてみたら頼りにはなるけど、突っ込んでいかないで欲しい。

素手でもかなり強い。

部隊でのあだ名は「ブラックフィスト黒い拳」

デイニスの先輩。40歳にしては身のこなしが機敏。

プリピヤチに潜入した事があり、「プリピヤチのに比べたら、そこらの野犬なんか子猫」だとか。

ジョン・ソープ・マクタヴィッシュ（30？）

性別は男。

元SAS、TF141所属。

階級は大尉。

誰もが一瞬ギョツとするソフトモヒカンの頼りになる大尉。結構筋肉質。

スコットランド出身なので独特の訛りがあるが、みんな気にしない。

身長は…180？

元はプライスの部下。

プライスが5年間も行方不明になっていた間に軍曹から大尉に昇進。部下の面倒見がいい人。犬が嫌い。

ゴースト（??）

性別は男。

本名はサイモン・ライリーだが、ほとんど知られていない。

階級は中尉。

常に頭蓋骨がプリントされたバラクラバを身に着けているので、素

顔は不明。目が青い事しかわからない。
マクタヴィツシユの副官。
誰かボケると律儀にツッコむ。

ローチ(???)

性別は男。

本名はゲイリー・サンダーソン。

元TF141所属。

階級は軍曹。

肝心なところでコケるが、しっかりやる時はやる。

召喚された兵士達の中では一番若いので、いつの間にか末っ子扱い。
性格は一番穏やか。

童顔のせいで女子に間違われるのが悩み。だが可愛いのは事実。
ボケ担当。

Nチームメンバー

マイク 支援火器のミニミ担当。

根っからの軍人に見えるが、案外頭脳派。
癖の強い黒髪に茶色の瞳。

ジョージ そこそこ裕福な家の出だが、愛国心と名前を変えた反抗
で軍隊に入った。しかも肌にあっている。ポジションは対戦車兵。

AT-4を担いでいるのがものすごく似合っている。
赤茶色の髪に緑の瞳。

レオ 無線担当。左腕にライオンが吠えているタトゥーが入っている。
子供の話になると「顔がだらしなく緩んで話が長い長い」とは

チームメイト談。

クルーカットの黒髪に青い瞳。

デビット 母親が陸軍の軍曹で、父親が一般人というちょっと珍しい人。軍隊生活も要領よく立ち回っている。

ヘンリーと組んでしょっちゅうイタズラを仕掛ける。2人の逃げ足の早さは折り紙付き。

アッシュブロンドの髪と青混じりの緑の瞳。

ウィル、ヘンリーは兄弟で、他に妹が2人いる。ウィルは180cmの長身だが物静かで、人のいい面を見つけるのが特技。スローイングのコントロールが抜群で狙ったところに必ず。

ヘンリーは身長は160cmだが、口から先に生まれたと言われる程口が立つ。

両方ともポジションはポイントマン。

茶色の髪に榛色の瞳。

ヘンリーの瞳の色が若干薄い。

Day1〜出逢い〜

イラクの丘陵地を進む、1台のストライカー装甲車。
砲塔の下のガンナー席で俺が大欠伸した。

俺の名前はジョン・マクスウエル。

仲間からはマックとかマックスって呼ばれてる。

「あゝ！やっとな帰れる！」

「マックス、交代する。少し寝ろ」

俺に呆れ混じりの声をかけたのは鮮やかな赤毛の同僚だ。名前はラ
タリ。俺達はラットって呼んでる。

「んじゃ頼む……」

そう言っただけで席を譲ると、俺は空いた席に座って仮眠をとりはじめた。

それから数時間後

「ジョージ、燃料はまだ大丈夫か？」

助手席のヘンリーが地図とGPS相手に睨み合いながら聞く。

「おう、やっとな半分になつたところだ」

「……何だありや？おい、止まれ！」

ガンナー席からの急な指示に、ジョージはブレーキペダルを床にキ
スさせる勢いで踏みつけ、ハンドルを右に切った。

当然、俺達もシェイクされたが、内部で警戒態勢をとった。

そして、目の前には

「何だこりゃ？」

停止したストライカーの窓から銀色の鏡を眺める。

「鏡か？」

「発光する鏡なんて聞いた事ないぞ」

「……おい、車動かしてないよな？」

ウィルが訝しげな顔で地面を見ると、既に10cmは動いていた。
「ヤバイヤバイヤバイ！全速離脱！」「それが…できりゃ…苦勞し
ねえよ！」

慌てて離脱を促すが、ものすごい力でじりじりと鏡に引きずられて
いる装甲車。

そして抵抗虚しく、俺達の乗った装甲車は消えた。

「…痛え。全員、生きてるか？」

ガンナー席のラットからの問いに、全員呻きながら答えた。

そして、ガンナー席からの声に顔を見合わせた。

「今時のテロリストってティーンエイジャーまで使うのか？」

「…何だこりゃ？何かの冗談か？」

目の前にはそう眩きたくなる、摩訶不思議な光景が広がっていた。
青空に草原、そして石造りの建物。

白のシャツに黒のズボンかスカート、マントと揃いの服を着た2、
30人の少年少女。多少ばらつきはあるが全員ティーンエイジャー
のようだ。

一番近くにいるのは、ストロベリーブロンドの長い髪の女の子だ。
今はあんぐり口を開けて、間抜け面を晒しているが、差し引いても
美少女だ。

「…交渉は誰が行くんだ？」

「一番口が立つ奴で」

ヘンリーが提案に畜生、と小声で呟くと後部へ向かう。手にM24
0、背中にM14EBRを持ったラットが既にいて、先に降りた。
だが続いて降りたヘンリーが何かに目を留めるとそちらに近寄って
いった。

装甲車の近くに人が何人か折り重なって倒れている。

「おい、大丈夫か？」

意識を確認する為に呼びかけると、一番下で下敷きにされている人が頭を傾げた。

「おい、俺の声が聞こえるか？」

再び問いかけると頷いたので、ラタリと手伝いに出たジョージが上の2人 砂漠地帯の迷彩服を着ている を脇へどかした。

どかして初めてわかったが、倒れていた彼ら 全員男だった は全員怪我をしていた。

メデイキットで手当てをしてから、痛みに顔を顰めてはいるが意識を取り戻した彼らの一人を見て

突然デイニスが叫んだ。

「プライス大尉?! Bチームのプライス大尉ですよね!？」

呼ばれた方は完全に鳩が豆鉄砲を食らった顔になっていたが頷いた。

「俺です! Nチームのデイニスです!」

「…デイニス? デイニスか!」

「お久しぶりです! 一体どこにいたんですか? 連隊のあなたの机は、いつ戻ってきてもいいようになってますよ」

「お前こそどこにいたんだ?」

「俺は訓練施設の教官やってます。先輩もどうですか?」

周囲からの視線という圧力に耐えかねて、ついに俺が問いかけた。

「…あの、デイニス、お知り合いですか?」

「ああ、マツクは知らなかったか。あの『^{ブラックフィスト}黒の拳』のプライス大尉だ。かのBチームの指揮官で俺の先輩さ」

言われた名前に連隊でまことしやかに話されていたあだ名が思い浮かんだ。

「え!? プライス大尉って、『素手で人の頭かち割った』とか『プリピヤチの凶暴な野犬の群れに素手で勝った』って噂の!？」

「俺は化け物か!？」

…すっかり言ってしまった。

「全く誰だ? そんな前置詞つけた奴は」

ブライス大尉：非常に言い辛いですが、「そんな前置詞考えた奴は連隊の全員です。」

そんな言葉は飲み込み、曖昧な笑顔を向ける。

「ちよつと！いい加減にしなさいよね?!」

その場に響いた声に、全員で振り向き

先ほどの女の子が、肩幅に足を開き、両手を腰に当て、ふくれっ面でこちらを睨んでいる。

…完全に忘れていた。

俺がヘンリーとラットを見やると、2人とも同じ反応をした。

つまり、視線を逸らした。

「…申し訳ない。思わぬ再会に舞い上がってしまった。それで、どのようなご用件でしょうか？」

最初に口火を切ったのはラットだった。いつもと全く違う仕事口調に俺達の驚きの視線が集まるが、ラットは横目で俺達を睨み視線を元に戻す。

「あんた達誰？」

「私はラタリ・ヒューズです。彼らは私の仕事仲間とその友人です」

「おーいルイズ！妙な格好の平民なんか呼ぶなよ！」

「やっぱり『ゼロ』だな！」

「うるさい！ミスタ・コルベール！やり直しさせて下さい！」

少し離れた所に固まっている他の子達に怒鳴り、引率らしい眼鏡をかけた少々髪の毛の寂しい男性に『やり直し』の許可を迫った。

「残念だがミス・ヴァリエール、サモン・サーヴァントのやり直しは認められない」

そう言われて、目の前の女の子はガツクリ肩を落とした。

「…あの、何がどうしてこうなったのか、判る人いますか？」

恐る恐る右手を上げて質問したのは、装甲車の近くで潰れていた4人のうち、ゴーグルをかけた若い男だ。この集団の中では一番若い。

「…あいにくだが俺にもよくわからん。だが、俺達は非常に性質の悪い厄介事に巻き込まれたらしいのは確実だ」

そこまで言っつてふと、背後に嫌な感覚を覚えた。

振り向くと、先ほどの女の子が上目遣いでこっちを睨んでいる。

…何故か若干顔も赤い。

「感謝しなさいよね。貴族にこんな事されるなんて…」

そう言うと右手に握った短い棒を振り上げ、何かを唱え始めた。

(この状況はマズい！非常にマズい！)

13人全員が同じ事を考え慌てる中、動いた人がいた。

「…この者を我が使い魔となせ」

締めくくりらしい言葉に合わせて目の前の女の子が目を開くと

「何で僕なんですかー！」

「諦めて生贄いけにえになれ。骨は拾ってやる。安心しろ」

「安心できませんー！マクタヴィッシュ大尉ー！ゴーストー！助けて下さいー！」

…ラットに襟首を掴まれて、後ろの集団に助けを求めながら地面に跪いている若い男だった。

呼ばれた片方は怪我を忘れて体を動かして、痛みに体を丸めている。もう片方は、駆け寄ろうとした

が

そして女の子が両頬を固定して

キスをした。

「…コントラクト・サーヴァント、終わりました」

「サモン・サーヴァントと違って、コントラクト・サーヴァントは1回で終わりましたね」

「相手が平民だから出来たんだろー！高位幻獣だったら出来ないよなー！」

その一言に生徒達は大笑いしたが、次の瞬間には笑いが凍りついた。

突然、俺達が悲鳴を上げた。

「痛え!？」

「何だこりゃ?!」

あちこちから困惑と痛みを訴える声上がる。

「五月蠅いわね。使い魔のルーンが刻まれているだけよ。我慢しなさい」

「ふざけんな!んなもん無断で人の体に刻むな!それにこっちは怪我人がいる!下手したら死ぬ可能性だってあるんだぞ!」

一言ずつ区切りながらギリギリと眉毛を吊り上げたデビットは、普段が温厚なだけに恐ろしい。

若干距離をとると、近くで地面に四つん這いになっていたラタリを助け起こす。

だが顔色が青白いを通り越して、紙のように白く指先まで恐ろしく冷たい。

「…ラット。大丈夫か?」

「…両手足が、な。もう大丈夫だ」

だが念のために、フラスクからウイスキーを少し飲ませておいた。

「ほう、これは珍しいルーンだ。だが記録しようにも人数が多くてはな」

「なら、数回に分けるか同じ文字の奴を纏めればいいんじゃないか?それはこっちでやっておくし、時間が出来たら見せに行く」

「それは有り難い。…では皆さん、教室に戻りましょう」

コルベールがそう言うと、生徒達は次々に空中に浮かんだ。

「……………は?!……………」

13人の中で最初に立ち直って手っ取り早く、荒っぽい方法で確認したのはプライス大尉、デニス、俺、ラタリだった。

全員が拳銃を抜いて1マガジンを空にするまで撃ちまくった。

驚く生徒達をよそに、撃ち終わった俺達は顔を見合わせた。

「間違いない。タネも仕掛けもない、本物だ」

プライス大尉の口から伝えられた言葉は、俺達の中にあつた懸念を完全に形にしていた。

一瞬で部屋に充満した重苦しい雰囲気をどうにかしようとしてローチさつき生け贄にされた奴 が口を開いた。

「でも来る事が出来たなら、帰る方法もある筈ですよね？」

「無理ね。帰す方法なんて私知らないもん」

僅かに残つた希望を口に出したが、ベッドに腰かけているルイズに一蹴された。

ルイズとは俺達を呼び出した女の子だ。フルネームは長いので諦めた。

「それじゃ、何も知らないで僕達をこっちに連れてきたのか?!」

「知らないわよ!」

「その辺りで終わりにしとけ。とりあえず、俺達の目の前の問題を片づけよう」

マクタヴィツシュ大尉がプローンマットに横たわつた状態でそう言った。傷口は処置して、抗生剤も飲んだが安心は出来ない。

「隣は空き部屋のようだ。そこを貸りよう。部屋割りは…」
「ローチが後を引き継いで仕切っていくと、こんな感じになった。」

ルイズの部屋

ゴースト

ローチ

ラット

ヘンリー

レオ

ジョージ

空き部屋

プライス大尉

マクタヴィツシュ大尉

デイニス

マクスウェル

マイク

ウィル

デビット

部屋割りが決まったので俺達は空き部屋に移動した。

Side: ルイズの部屋

「…大変な事になりましたね」

僕の呟きにルイズ以外の全員が頷いた。

「使い魔の仕事の説明は明日にするわ。おやすみ」

そう言うところルイズは寝間着に着替えてベッドに潜り込んだ。

さすがに目の前で着替えられるとか本気で焦った。僕達が慌てて背中を向け、表情の読み取りにくいラタリが着替えの手伝いをしていった。

そのうちに皆眠りについたが、僕は眠れなかった。寝返りをうって少し迷ってから思い切って声をかけた。

「…ラタリ？起きてますか？」

「どうした？寝ないとキツイぞ」

窓際で外を警戒しているラタリが、姿勢はそのまま答えてくれた。

「…月が2つとか、魔法とか言ってる、タネとか仕掛けのあるマジックとかドッキリTVですよな？」

「そりゃ、俺も本気でそう思いたいし、そうだと思っていた。今は、『なるようにしかならん』と思っている。…本当に寝ろ」

「了解です」

最後に少し機嫌が悪く聞こえる声で寝るように促されて、目を閉じた。

S i d e : デイニス

「先輩、一体何があつたんですか？さつき『指名手配』って言つてましたが」

そう言つと、葉巻をふかしていた先輩の動きが一瞬止まった。

「……俺達はテロリストと結託した男に、裏切られたんだ。殺される寸前で俺とソープは奴を殺した。その後すぐこつちに召喚された訳さ」

『ソープ』という聞き慣れない名前に首を傾げていると、先輩が肩越しに親指でマクタヴィツシュ大尉を指した。

「……バークマン大佐を覚えてますか？あの人に化けた奴が、俺達のチームを『虐殺集団』とでっち上げたんです。……どっちにしても裏切られた事に変わりないですね」

「……大佐まで使われたなんて、信じたくなかつたぞ。で、化けた奴はどうした？」

「死にましたよ。俺達が手を下した訳じゃありませんが」

「じゃあ、誰がやったんだ？」

「ラットです。ほら、赤毛の短髪でM14担いだのがいたでしょう？あいつです。大佐になりすました奴の頭をドラグノフで至近距離から1発と、パイブロウにAT-4を1発撃つて火葬に」
それを聞いた先輩が嫌な物を見たように顔を顰めた。

「……えげつねえやり方」

「まあ、職業柄仕方ないみたいですよ。暗殺者ですから」

「……何？今『暗殺者』って」

「言いましたよ？」

「寝首を搔かれるなんて死んでもごめんだ！」

「大丈夫ですよ先輩。俺が保証します。あいつは仲間にしたら最強です」

ものすごい不信感に満ち溢れた目で睨まれてもなあ。

「……仕方ない。今回はお前を信じよう。そうとなつたら、小難しい

考えは明日だ。全員就寝！」

Day2 人の話はしっかり聞こう

side: マクスウエル

「…やっぱり現実か」

起きてマットを片づけながら呟くと、ジョージがいつもの習慣で片拳腕立て伏せをしていた。

その背中に乗せられているのは

「何でマクタヴィツシュ大尉を負荷にしてるんだお前！上官不敬だつて言われるぞ！」

「大丈夫だマツク。マクタヴィツシュ大尉はぐっすり寝てるから」

「へー、よく寝て…つて違ーう！寝てるつて言っただつてやって大丈夫かどうかはお前だつて分かるだろ?!」

「ノリツツコミか、やるな。デイニス、出来る副官がいて良かったな」

ニヤニヤ笑っているプライス大尉に、デイニスが近づいた。

「先輩、よければ交換しませんか？俺はマクタヴィツシュ大尉の能力が、先輩はマツクの能力が知りたい。どうでしょう?」

プライス大尉が少し考えてから一言。

「…よし、のつた！」

「本人無視して話を進めるなー！」

「…お前達は朝っぱらから何を大騒ぎしてたんだ？」

廊下に出ると、ルイズの部屋で寝ていたラットが水の入った桶を2つ下げて戻ってきたところだった。

「…実は」

事情を説明すると、これまた微妙な顔をされた。

「頼りにされてるつていう事なら納得できそうだが…微妙だな」

朝っぱらから軽くへこんだ俺を慰めながらルイズの部屋の扉を開ける。

「こっちは今から起こして、顔洗わせて、着替えの手伝いだ。俺はナニー（英語で乳母の事）か」

「何か手伝えるか？」

そう言つと、「じゃあ」と前置きされてから内容が告げられた。

「…どういう思考回路してるんだ？」

部屋の外で俺が首を捻って待っていると、ルイズの部屋の並びのドアの1つが開いて、燃えるように色鮮やかな赤毛の女の子が出て来た。

「あら？あなた、見ない顔ね」

「そりゃ昨日来たばかりだからな。俺はジョン・マクスウエルだ。君は？」

「あなたが昨日の平民ね？…私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーよ」

「よろしく、ミス・ツエルプストー。俺の事はマックと呼んでくれ。似た名前の人がいるもんでね」

「あら、キュルケでいいわよ」

そう言つと、ルイズの部屋の扉が開いて、ルイズとラット、ローチが出て来た。

「おはよう、お嬢様」

俺がそう言つと頷いたが、キュルケを見ると顔を顰めながら挨拶した。

「おはようキュルケ」

「おはようルイズ。あなたの使い魔ってその人達？」

「そうよ」

そんなに苦々しい顔つきになる程、俺達はひどいのか？とラットに目で問いかけると少し首を傾げてから肩を竦めた。

「アツハツハツハ！本当に平民を呼び出すなんて、流石ゼロのルイズね。あたしは一発で召喚できたわ。やっぱり使い魔ってというのはこういうのでしょ。フレイム、おいでー」

そう言われて姿を現したのは赤色のトカゲだが、虎並みにデカイ。

「うわ！何、本物？」

「ローチ、下がれ！」

ラットが腰のマチェットを逆手で構えながら、ローチの襟首を掴んで下がらせ前に立つ。

「ラット、落ち着いてください！…よしよし、ごめんな。君みたいな生き物見た事なかったから驚いちゃって」

ローチが優しく話しながらゆっくりとグローブを外した右手を伸ばして、手のひらを上に向けて差し出す。

犬によく使う手だ。匂いを嗅がせて覚えさせるんだが、フレイムは俺達の考えの斜め上の反応をした。

つまり、自分からすり寄った。そりやもうベツタリ、顎の下をこすりつけて。…マタタビに猫みたいな反応だ。

「使い魔ってこんなに人懐っこいの？」

しつこく催促されて顎の下を搔いてやっているローチが首を傾げる。

「…え？あんだどんな手使ったのよ？！」

呆然としていたキュルケが復活すると凄じ勢いで詰め寄った。

「…って言われても。好きそうな物なんて知らないし、持ってな…どわ！」

いつの間にか足元にすり寄られて喉を鳴らしている。…いかん。本当にデカイ猫にしか見えん。

「ほら、ご主人様のところに行こう？」

ローチがそう言うと、未練タラタラな様子でしばらくかかってキュルケのところに戻った。

「ええと…じゃあ、朝食に行かないと」

そう言うと足早にキュルケは立ち去り、フレイムも何回も振り向きながら行って行った。

「…やった！見た？キュルケのあの顔！やるじゃない！」
「????？」

最初の時とうって変わった笑顔でローチを誉めるルイズだが、誉められた本人は食堂までずっと首を捻っていた。

「ここが『アルヴィーズの食堂』よ」
敷地内で一番高い塔の中の広い部屋に連れて来られ、そう説明された。

部屋と食卓には豪華な装飾が施され、果物が盛ってある。

「あの人形…動いたりしませんよね？時間が来たら、とかでローチが冗談のつもりで壁際の人形を指差す。

「動くわよ？というか踊るわ」

「僕、絶対夜は近づきませんからね！」

それを聞いて、素早くラットの背中に隠れるローチ。銃撃戦は大丈夫なのに怪奇現象は嫌いらしい。

ルイズが歩いて行き、空いている席の前で止まった。自然な流れで椅子が引かれ、優雅に腰を下ろす。

「あんた慣れてるわね。どこかの貴族で雇われていたの？」

振り返ってラットを見るルイズ。確かに手慣れた感じだ。

「いや、ない。ワインはどちらを？」

「じゃあ赤を…ってほら！」

「ああっいうっかり。白も少し注ぎましようか？」

「そうね、もらうわ…ってちよつと！」

……ダメだ。本気で限界だ。俺達は口を押さえたまま、出入り口を指差して急いで出た。

「…ブツ！アーツハハハハハ！」

来た時の道を辿って外に出ると、一気に笑いがこみ上げてきた。2人して地面を叩いて笑い転げて、最終的には笑い過ぎて息も絶え絶えな状態で転がっていた。

「ヒイ…く…苦し…」

「…ハア…死にそう…」

ようやく復活したので食堂に戻ろうとしたが、道を間違えたのか見えてこない。周囲を見回しながら歩いていて、角から出て来た誰かとぶつかった。

「キャツ!？」

女の子の声でしたので咄嗟に受け止めた。

「すまない。こちらの不注意だった。怪我はないか？」

「は、はい。大丈夫です」

相手はメイド服を着て、黒髪をカチューシャで留めた女の子だ。顔に雀斑のある、愛嬌のある親しみやすそうな子だ。

「そうだ。食堂がどこにあるか知らないかな？」

「食堂ですね。ではこちらへどうぞ」

そう言われて後ろをついていく。

「あの…もしかしてミス・ヴァリエールの使い魔ですか？」

「ヴァリエールって名前に聞き覚えはないが…ルイズの事か？」

「ええ、そうです。召喚儀式で平民を呼び出したって」

「身分は確かに平民だな。だけど元軍人だ」

そう言つと、女の子はきよんとした。

「え?…軍人さんだけど平民？」

「…混乱してるなら考えるのを止めた方がいい」

「はあ…あ、ここです!」

「助かったよ。ええと…?」

「ごめんなさい!私はシエスタといいます」

「俺はジョン・マクスウェル。マックと呼んでくれ」

「僕はゲイリー・サンダーソン。ローチと呼んで」

「マックさんにローチさんですね。よろしく願います」

そう言つとシエスタは小走りにどこかへ去って行った。

「あ、ルイズとラットだ。おーい!」

「あんた達どこ行ってたのよ!？」

「ごめんなさい」
言われてすぐに謝ったローチに毒気が抜けたのか、ルイズはそれ以上言わなかった。

教室の扉を開けると生徒達の視線が集中して、押し殺した笑い声がそこかしこで上がった。

ローチが一言言おうと踏み出したが、ラットに制止されて不満げな顔つきになる。

「落ち着け。俺達が出ても解決する事じゃない」

「じゃあこのまま傍観者になれって事ですか？」

「機会があれば潰せる。それまで耐えろ」

諭されて渋々引き下げるローチを連れて、ルイズの近くの壁によりかかる。

そしてすぐに教師が入ってきた。見た目は完璧に

「魔女だな」

「ですね」

「皆さん、無事に使い魔召喚が終わったようですね。私、『赤土』のシュヴルーズも嬉しく思います」

優しそうな中年の女性教師が教室を見回して、俺達に目を留めた。

「あら？ミス・ヴァリエールは変わった使い魔を召喚したようですね」

「ルイズ！召喚できないからってそこらの平民を連れて来るなよ！」
怒りに震えて言い返そうとしたルイズの肩にラットの手がのった。

「落ち着け。深呼吸しろ。それにこういうのは、先に手を出したり相手の口車に乗ったら負けだ。それと…俺達の主を侮辱するな」

最後の言葉は教室に響き渡り、教室が静まり返った。

「…ミス・ヴァリエール。主思いのいい使い魔を持ちましたね。で

は授業を始めます」

そして1学年からのおさらいと『錬金』の説明、実演があった。杖が下ろされると机の上にあった石は金色の光を放っていた。

「ゴゴゴールドですか、ミセス・シユヴルーズ？」

それまで爪の手入れをしていたキュルケが身を乗り出した。目がぎらついているので若干怖い。

「いいえミス・ツエルプストー。これは真鍮です。ゴールドを錬金できるのは『スクウエア』で私は…『トライアングル』なので」

「真鍮」と聞いてキュルケは興味をなくしたように座り直した。

「俺達も人の事は言えんが」

「金には気をつける」

「それと、ちゃんと授業受けなさい」

俺達が呟いた言葉、特に最後のローチの言葉にルイズは吹き出しそうになっていた。

「ではミス・ヴァリエール、実際にやってみて下さい」

そう言われて何故かルイズはもじもじした。

「先生、危険です。止めた方がいいです」

授業へ興味をなくしていたキュルケが真剣な顔で発言した。

「何故ですか？彼女は優秀な成績を修めていると聞きましたが」

「危険だからです」

「危険って言ったって、味方のはずの海軍が味方まで殺しかけるくらい砲撃しまくる監獄から逃げるとか、大量の傭兵が押し寄せる隠れ家から迫撃砲の雨の隙間を走って逃げるんじゃないんだから」

ローチが肩をすくめて言った一言に俺達が固まった。

「…かなり非道だな」

「非道通り越して味方まで殺す気満々だろ」

そう言つとラットはローチの肩を掴み、エメラルドグリーンの瞳に独特の光を浮かべて続けた。

「どこの野郎だ？そいつの名前は？」

「それは…」

「その指揮官に脅迫されているのか？」

尚も追求するラットの一言に何かが噛み合い、俺の口から言葉が出た。

「おい、もしかして、先輩とマクタヴィツシュ大尉が…？」

「…」

ローチは俺の問いかけに一瞬目を伏せたが、しっかり頷いた。

「そうか…ラット、お前さんが最強の狙撃手だとしても適う相手じゃない。何せ相手は死んだ人間だ」

「…チツ」

「やらせて下さい」

「ルイズ！お願い、止めて！」

「キュルケ、どうしたの？」

「あなた達も早く隠れた方がいいわよ！」

そうローチに言うときュルケはさっさと机の下に潜った。よく見たらほとんど全員隠れている。

「…はあ？」「…」

訳がわからない俺達が顔を見合わせていると

「錬金」

その言葉を呟いた途端に何か感じたのか、ラットが全身をバネにして教卓へ跳んだ。

そして爆発。

「何だこれ？」

俺が咳き込む脇で耳が一時的な難聴になったローチが煙を透かして生存者を探そうとしている。

「ルイズ？ラット！」

爆発のせいで生徒達の使い魔が大混乱を起こしていたが、ローチが

右手を突き出して大声を出した。

「全員、戻れ！」

生徒達がローチに何か言おうとしたが、それまで言う事を聞かなかった。使い魔が大人しく自分の元に帰ってきたのでびっくりしていた。

教卓の辺りを見ると、ルイズ、シュヴルーズ、ラットの姿がない。

爆心地という事を思い出し、自分の頭が一瞬で弾き出した答えに納得がいかず、俺は教卓へ走った。

ものの数秒で到着し、生きている可能性を探して呼びかけた。

「ラット！ルイズ！」

「 Bloody hell（イギリス英語。日本語でいうと「クソッ！」的な意味）。死ぬかと思ったぞ」

そう言いながら、ラットが教室の前の扉の陰からルイズとシュヴルーズを連れて現れた。2人とも無傷のようだ。

「ラット！良かった！無事だったんだね！」

そう言いながらハグするローチ。ラットも肩を軽く2、3回叩いてから体を離れた。

授業が終わって帰る道でラットにどうやったのか聞くと、「爆発に巻き込まれる前に2人を掴んで扉の陰に隠れた」と単純だが効果のある方法をとっていた。

部屋に帰ってラットが脳震盪を起こしていないかチェックしていると、プライス大尉がそういえば、と前置きをしてから話した。

「コルベールはどこだ？」

言われて思い出したが、確かに「そのうちルーンを見せる」と言った。

「行きますか？」

「行くぞ。暇で本当に死にそうだったから助かった」

「暇つぶし扱い?!」

マクタヴィツシュ大尉はゆっくりなら歩けるので、先に行つてコルベールを見つける人についていく人に分かれて、食堂で合流する事にした。

勿論、先行はラットだ。久々に脚力を開放できると笑っていたが、かなり心配だ。

数分後、食堂の入り口に着くと見た目は無傷なコルベールがラットと笑いながら何かを話していた。

「今回は無傷か。助かった」

「冗談。今回『も』、だ」

デイニスに言われてラットが返したが、確かにデイニスが言いたくなる気持ちも分かる。

一緒に仕事をしていて知っているが、冗談抜きでそこそこ厚い扉を飛び蹴りでぶち破るくらいはやってのけるほどの破壊力抜群な脚力の持ち主がいると時々地獄を見る。

「では場所を移しましょう。こちらへ」

言われてついでに行くと、敷地内の一角に小屋があつた。

「元はあの火の塔に研究室があつたんですが、研究に熱中しすぎて悪臭騒ぎまで起こしてしまつて。今はここで研究しています」

かつて研究室のあつた塔を指差すと苦笑しながら扉を開けて俺達を招き入れた。

数分後、俺達とコルベールは互いの自己紹介を終えて、ルーンを見ていた。

「…なるほど。全員の左手に同じルーン、右手や体に別のルーンが刻まれているんですね」

そこでラットが口を開いた。

「足に刻まれるなんて事はあるのか?」

「足…ですか？」

ラットが靴と靴下を脱ぐと、足の甲にルーンが刻まれていた。

「ふむ、これまた珍しいルーンですな」

「読み方が間違っていたら訂正して欲しいんだが、これの読み方は

『スレイプニル』か？」

「む？…ちよつと失礼」

ラットの発言に少し考えこんだコルベールが、杖を向けて振った本棚からすっ飛んできて手に収まった本には、ルーン文字が書かれていた。

「ふむ…あなたの読み方で間違いないようだ。そのルーンは『スレイプニル』です」

「そして右手のは『ソア』（北欧神話の雷神トールの英語読み）か？」

もう一つ言われて本をめくり、頷いた。

「僕の右手は何ですか？」

ローチの右手の読み方はわからなかったが、とりあえず何か効果のあるルーンらしい。

コルベールが杖を振って本をしまつとラットをまじまじと観察した。

「しかしルーンが読めるとはすごい。あなたは貴族の出身ですかな？」

「こんな態度の悪い貴族がいるか？俺達は平民だよ。ルーンは知り合いが没頭していつきあわされたから、いくらかは分かる程度だ」

「ほう！お知り合いがルーンの研究者ですか！できれば詳しく話を

…」

「俺の知っている範囲ならいくらかは…というか一旦落ち着いてくれ」

落ち着かせてしばらくするとローチが質問をした。

「昨日みんな浮いて飛んでましたけど、あれってみんな出来るんですか？その、メイジなら」

「ん？そつだよ。あれは『レビテーシヨン』と『フライ』だ」
その答えにローチは少し考えてから質問を続けた。

「じゃあ、メイジが魔法を使わないで浮いたり飛んだりするには？」

「それは『風石』を使う必要があるな。といつても、ほとんどは『フネ』を飛ばす為に使われている物だ」

「風石？…船つて、あの船ですか？」

「君達が想像している船がどんな物か知らないが…船は船だろう？」
困惑しているコルベールに全員がどう説明したものか、と頭を抱えた。

「…書く物を貸してくれ」

マクタヴィツシュ大尉が頭痛を堪えるような顔で呟いた。

数分後、マクタヴィツシュ大尉が書き上げた船の絵は4枚。

1・帆船

2・フェリー

3・飛行船

4・空母（かなり兵装に手こずった）

コルベールの言った「船」は1枚目だが、2枚目を見た時目を剥いた。

「ななな何ですかこれは！？」

「何つてフェリーだ。俺達の世界では『船』つて言えばそれだな」

…あまりのシヨックにコルベールは固まっている。

コルベールがやっと復活してから、あとの2枚の説明もしてすっかり冷めた紅茶を飲んだ。

最悪な不味さだが、気付け程度にはなる。

「なるほど。あなた達の世界では魔法の代わりに『科学』が発展している訳ですね！素晴らしい！」

「目エ爛々と輝かせて舞い上がっているとこ悪いが、俺達にとっては魔法の世界の方が信じられん。いきなり火炎放射つて…あんなもんどつやつて防げつて言うんだよ……」

小屋の外でコルベールの『ファイヤーボール』を見て、デイニスが半分死んだ目になって眩いている。

その言葉に、周囲にうず高く積み上げられた本や実験機材を見回していたコルベール以外の全員が頷いた。

「君達の左手のルーンは見た事があるんだが…はて、どこで見たんだか」

首を傾げているコルベールが本棚に向けて杖を振ると、ボロボロの本がすっ飛んで来た。

「ななな何ですと！？『ガンダールヴ』！？」

ページをめくっていたが何かの単語を叫ぶと、斜め後ろから本を覗き込んでいたローチの両手を掴んで挿し絵と照らし合わせる。

「『左手』に『右手』まで！こうしてはいられません！」

本をひっ掴むと、短距離走の現役選手真っ青の速さでどこかへ走って行った。

「…戸締まりとかどーすんのさ？」

ローチの呟きが聞こえた訳ではないだろうが、先程と同じくらいの速さで戻ってきた。

コルベールが息を整えてから、戸締まりをして学院長室へ再びすっ飛んでいった。

「これからどうします？」

有意義だったが、どこか疲れた。

「正直、何か予想しようにも材料がなさすぎる。第一に、こっちの文字が読めないのが大きすぎるネックだ」

確かに、マイクの言う通りだ。耳から入る情報が全てではない。耳から入る情報と文字とで違っている事もあるからだ。

口々にため息をつきながら見ると、中庭が何やら騒がしい。

大柄なウィル、マクタヴィッシュ大尉に人垣を掻き分けてもらうと、

中心にいたのはひたすら謝っているシエスタと金髪の少年だった。フリル付きのシャツを着て、薔薇の造花を口にくわえて気取っているが、両頬にある平手打ちの痕で台無しだった。…多分、最初から間違えているような気がする。要約するところだ。

・金髪の少年「ギーシュ」のポケットから香水のビンが落ちた。

・シエスタがビンを拾い上げて落とした事を知らせた。

・ギーシュは最初は無視し、もう一度呼びかけられると「自分の物ではない」とつつぱねた。

・ビンを見たギーシュの友人達が「モンモランシー」の物だと異口同音に証言。

・二股かけていた女の子2人からそれぞれ平手打ちのプレゼント。

「…で、現在に至る訳か」

俺達全員が完全に呆れた顔でギーシュを見ている。

「二股つておめえ…見た目はモヤシな癖して、爛れてんなア」

「香水を拾って知らせた人に対してその態度はないだろう。しかもほとんど見ず知らず同然の人に『口裏を合わせる』だと？アホらしい」

言葉にすっかり意図されている屈辱に体を震わせて、ギーシュは俺達を見回した。

「…言わせておけば好き勝手！身分も弁えない彼らには礼儀を」

「それは二股がバレて両方から平手打ち食らったお前が言えるセリフじゃないだろう」

気持ち良く俺達全員の意見を代弁したラットの一言がとどめになった。

「…覚悟はいいかね平民？」

そう言いながら薔薇の造花を掲げてこう言った。

『諸君！決闘だ！』

Day 2・5 勇気と無謀を履き違えるな

「逃げずによく来たな！その心がけは誉めてやろう！」

（誰が行くんだ？）

顔を見合わせる中、

「俺が行ってもいいですか？」

そう言っただ足を踏み出したのはゴーストだ。

みんなからM4の弾を貰い、ポーチに詰めて落ちない事を確認してから人垣の中に開いた空間に足を踏み出した。

「一人だと？この僕を、『青銅のギーシュ』を侮辱しているのか！」

「それより前に、条件決めておかないといけないんじゃないか？」

「ハッ！互いが『参った』と言うまでだ！」

「大尉：こいつ、本当の馬鹿ですよ」

さり気なく相手を煽っているが向こうが気づいていない。

「そして君の相手は『ワルキューレ』がしよう！」

そして造花を振ると、花びらが落ちた地面から足、膝、腰とビデオの逆再生を見ているように金属製の人形が作られていく。

「行けえ！」

ギーシュのかけ声を合図にワルキューレが突進する。

同時にM4からほとんどフルオートに近い勢いで弾丸と薬莖が吐き出され、表面に食い込み、弾かれて火花を散らす。

瞬間に1マガジン 29発 を撃ち尽くすと、横っ飛びに回避した脇をワルキューレが通り過ぎた。

ゴーストは起き上がりながら相手から目を逸らさずにマガジンを交換する。しかし振り向いたワルキューレの顔や体には幾つもの弾痕があり、穴だらけのスリースーツそっくりの様子に俺達は吹き出した。

全弾が人間の即死エリアに入っていた事も関係あるが。

向こうにしてみたら堪ったものじゃないだろう。

見た事もない「何か」に、自分の作品が瞬く間に穴だらけになった。2回目の突進もギリギリまで引きつけてからかわし、後ろから至近距離で頭をフルオートでぶっ叩く。

無残に潰れた頭部を踏みつけて起き上がれないようにしてから、マガジンを換えつつゴーストがデイニスに怒鳴った。

「デイニス大尉！あんた達AP弾（1）使ってんのか？！」

「んな訳あるか！普通のFMJ（2）だ！どうした！？」

「何でこんなにボンボン簡単に穴開くんだよ！FMJはそんなに開かないぞ！」

「無駄話とは余裕だな！行け！」

ギーシュが造花を振ると7体もの人形が現れた。

逆転した状況に言葉を失っていると、

「ゴースト！交代だ！」

そう言いながらラットがゴーストのボディーマーを掴んで俺達のいる後ろへ投げた。

「選手交代か！いいだろう！せいぜい足掻け！」

ラットがM240を構えると、小刻みにバースト射撃をしながら満遍なく7体に弾を浴びせる。

生身なら数秒でスプラッターになっていたところだが、金属製の人形は瞬く間に表面に弾痕を穿たれ、削られる。1カートリッジも弾を浴びせるとグシャグシャになっていた。

「な、何だそれは！？」

自慢の人形がくず鉄に変えられて、ギーシュは恐怖に立ちすくんでいる。目の前にいるのは俺達とは違う地獄を過ごし、同じ苦痛も分け合った歴戦の「暗殺者」だ。

普段とは違う、死の匂いを引き寄せる気迫が全身から溢れている。

「…来るな！来るなあ！」

半狂乱になって造花を振ると、目の前に人形が1体立ち塞がった。

「邪魔だ」

低い声が響き、人形の首が宙を舞った。

そしてギーシュはラットの張り手で意識を失った。
…ものすごい音したからな、死ななきやいいが。

「いよっしゃー！勝った！」

「ゴースト、ラットよくやった！」

「ナイス張り手！ありゃトラウマ間違いなしだな！」

俺達が大騒ぎをしていると、人垣を掻き分けて教師達が現れた。

「これは一体何事ですか！」

「全員撤退ー！」

ヘンリーの大声に教師達が怯んだ隙にはばらばらな方向に逃げ出した。

数十分後。

血眼で探している教師達を尻目に、俺達は学院長室の入り口に立っていた。

案内してくれたのは、緑色の長い髪で眼鏡をかけた美人だ。

プライス大尉が扉をノックして開けると、白い髭を長く伸ばし重厚な机の向こう側に座っている老爺とコルベールがいた。どうやらコルベールは何かに熱弁をふるっていたようで、目が若干血走って眼鏡がずり落ちている。

「コルベール君、君は退室してくれんか？」

「俺達は別に構わない。むしろ分かり易く説明してくれる彼がいてくれると有り難い」

コルベールは学院長の言葉にがっかりしたが、俺達に「残ってくれ」と言われて嬉しそうな、複雑な顔をしていた。

「それでこのルーンの意味は何だ？」

意外な事に口火を切ったのは普段は寡黙なラットだった。手袋から手を引き抜き、左手の甲に刻まれているルーンを見せる。

「それは俺も聞きたいな。こいつがどういう代物なのか」

ラットに同調してゴーストも左手を見せる。

「さっきの決闘騒ぎで銃を握ったら、奇妙な事に銃の詳細がわかった。勿論日頃から使っているから当たり前なんだが、どうも妙なんだ。相手のどこに何発撃てばいいとか、俺達の基本的な知識も、どう動けば回避にも攻撃にいいかも知らせてくる。更には、威力が異常に跳ね上がっている。これの説明をしてくれ」

「オールド・オスマン」

コルベールに呼びかけられ僅かに考えてから、口を開いた。

「わかった、話そう。最初に、君達は無闇に他言しないと信頼して打ち明ける事を分かってくれ。」

君達全員の左手のルーンは『ガンダールヴ』、非常に稀な物だ。能力は『あらゆる武器を使いこなす』事だ」

「なるほど、だから体の状態まで出たのか」

「どういう事ですか？」

ゴーストの言葉に、いつもより眼光が鋭くなったコルベールが尋ねた。

「俺達は『兵士』だ。つまり『戦争用の武器』さ。体が動けるなら銃を撃ち、ナイフを振り、爆弾でぶっ飛ばし、相手を殺す」

「なら、その力を何に使うかね？」

オールド・オスマンの鋭い視線にも動じず、ゴーストは振り返って全員を見回してから言った。

「ルイズを『守る』ために使う」

言葉の意味を読み取ると、2人の視線から鋭さが消えた。

「…その言葉を聞いて安心した。君達が帰りたいと思うか、残るか
はワシにはわからん。だがどちらであれ、協力しよう」

数分後

「疲れた」

「肩凝った」

「気疲れした」

「こいつらが名高いSASレジメントかよ…今の状況見たら間違いないく嘘だと
言いそうだ」

適当な広場でぐったりしている俺達の傍で、呆れ顔のラットが立っ
ている。

「ラットは疲れなかったの？」

ローチが椅子に腰掛けて問いかけた。

「あんな、俺の仕事を考えてみる。『あいつが生まれた日に、祝福
を受けている最中に酷い苦痛を与えて殺したい』って言うむちゃく
ちやな依頼で3日徹夜で待機してパーティー中に狙撃とか、大混雑
の中で通勤中の特定の人物のみ気づかれないように、とかやってる
んだ。人と会って話した位ではそんなに疲れない」

えげつない仕事に場の空気が重苦しくなったが、ラットがその場の
全員が昼も食べていない事を思い出した。

「ほら急げ。俺がコック長に話は通しておいたんだ。賄いくらいは
ある筈さ」

厨房に足を踏み入れると、シエスタが駆け寄ってきて恰幅のいい中
年の男と引き合わせてくれた。

男は最初は訝しげな顔つきだったが気づいた途端に、よく響く声で
挨拶してきた。

「おお、『我らの雷』か！よく来たな！」

「シエスタ、『我らの雷』って何だ？」

俺が聞くと、シエスタは若干頬を赤らめながら「あなた達の事です」
と答えた。

「…僕達動いてませんよ？」

ローチの素朴な質問にラタリとゴースト以外は頷いた。

「いやいや、お前さん達は仲間何かあったらすぐ飛び出せるよう
にしていたって聞け。それに貴族に物怖じしないで面と向かって
説教したそうだしな」

厨房の隅のテーブルに座って待っていると、暖かいシチューと焼き
たてのパンが出てきた。

「美味しい！」

「美味しい！」

「さっき聞きそびれたんだけど、『我らの雷』ってどういう意味？
1杯目を食べ終わったローチが2杯目をよそってもらいながら尋ね
た。

「何って、お前さん達が持っている『それ』が、凄い音と光を発し
て相手の貴族をボコボコにしたんだろ？」

その一言に俺達は顔を見合わせ、銃を見下ろした。

「…これが『雷』？」

あの後、いくら真実を言おうとしても謙遜だと解釈されている。
…
どうしろと？

その晩

「おい、明日のローテーション組むぞー」

ヘンリーが召集をかけると、全員が思い思いにしていた事を中断し
て集まった。

「明日は護衛が」

「Leo」 「Yap」

「Mactavish」 「Rogee」

「Price」 「Hum…」

「ルーン解読が」

「Rat」 「Right」

「David」 「Ya」

「Daynis」 「Understood」

何故英語かと言うと、軍でよく作戦前にやる「フリーフィンゲ状況説明」
みたいにしたかったからです。趣味ですサーセン。

(1) AP弾 アーマ・ピアッシング弾。ボディーアーマーを着
ている相手にも効く。

(2) FMJ弾 フルメタルジャケット弾。一般的な銃弾。

Day3 お前達の魔法は非常識だと思う (前書き)

お互いに見えるかもしれないですけどね。 b y ローチ

Day3 お前達の魔法は非常識だと思つて

side:ルイズの部屋

ジョン・ソープ・マクタヴィッシュ大尉

翌朝。

「ルイズー、起きろ。もう朝だぞー」

ベットで眠っているルイズの肩を軽く揺するが、「ノー…クックベ
リーパイ…」

とか言つてまだ眠っている。

「…プライス大尉、こんなのどうしろと?」

肩を揺さぶっていたレオが、目を閉じて腕を組み窓際に寄りかかる
プライスに問いかけた。

問いかげに目を開くとプライスは窓際からベッドサイドへ近づいた。

「簡単だ」

そう言つと息を吸い込み

『起きろおお!!!』

「ヒヤアアア!?! ななな何事?!」

突然部屋中に響いた男の声に、ルイズは目を見開いて飛び起きた。

「…俺、心臓が止まるかと思った」

大声に飛び上がつて胸を押さえているレオと、その脇で平然として
いる俺。

「まあ俺は慣れてるけどな…プライス、これ、普通はビビりますよ
?」

やんわりと苦情を言うが、当の本人も分かっているらしく、「3回は
別の方法で起こして、最後の切り札に使っている」そうだ。

朝の身支度をしながらルイズはプライスを睨んだ。ちなみに迫力は
ない。

「全く…主人を殺す気？」

睨まれているプライスは百戦錬磨の叩き上げ軍人なので、睨まれようがどこ吹く風と受け流している。

「遅刻するよりはいいだろう？」

「うぬう…っ、次からはもう少し普通に起こしてよね」

「ルイズ、レモン水だ。目が覚める」

正論に詰まったルイズは、俺が差し出したレモン水を飲み干して鏡台の前の椅子に座った。

ヘアブラシを手に取るとこちらを振り向いて、「髪を梳いてくれる、ジョン？」と言ったが俺とプライスは顔を見合わせ、「どっち？」と聞き返した。俺のファーストネームはプライスやデイニス、マックスと同じ「ジョン」なので、実家で呼ばれている「ジョニー」で呼んでもらう事にした。

俺がルイズの髪を梳いていると、レオがぼつりと呟いた。

「俺んちの娘も髪を梳いてると笑ってたな。エレメンタリーのバスに乗る前に俺やかみさんに『行ってきます』って手を振って、帰ってくるって『ただいま』って飛びついてくるんだ。俺が帰ってくると途端に甘えん坊になつてな」

鏡越しにルイズが俯いたが、その後が続いた親バカ全開な話にこっそり笑っていた。

ルイズが授業を受けている間、俺達はコルベールやシュヴルーズに協力してもらって学院の外に土嚢を積み上げ、盛り土をかなり高くして「硬化」やら「固定化」という呪文をかけてもらい、射撃場を作った。

建物はなくても日差しは強くないし、銃の細部に入り込んでイライラさせられる砂はないので構わない。

「弾の補給ですが、今のままだとなくなる事を覚悟しておいた方がいいです」

「デビット、何でお前の右手が光っているんだ？」

「ハハハんなまさか『召喚』なんて言ったら弾薬が届く訳」

ドササササササ！

「…じゃあ、今、俺達の目の前にある弾薬の山はどう説明するんだ？」

…どついう理屈なんだか、歩く弾薬庫と化したデビットだった。

能力を試す為に古今東西の新旧取り混ぜた相当量の銃や弾薬を引っぱり出して見たが、問題なく出せた。

まあ、冗談半分で「アパッチ・ロングボウ」を頼んだら本当に引っぱり出してきたのには焦ったが。本気で出すなよ。

射撃訓練が終わった後、中庭でくつろいでいるとラタリが「重要な話がある」と切り出した。

「とりあえず、射撃レンジは確保出来た訳だが、金が必要だ。という訳で手っ取り早く稼ぐぞ。」

手段は、1・賭け試合。2・カジノ。3・スリ狩り」

手段に絶句している俺達を代表して、プライスがこめかみと髭をひくつかせながら発言した。

「おい…どれ一つとしてマトモな手段がないのはどういう事だ？」

「言っただろ？『手っ取り早く』って。俺は後々金蔓になりそうな仕事の宣伝も兼ねて首都に行く」

そして翌朝帰ってきた時には、大量の金貨ではちきれそうな革財布を2つ持っていた。

当然、仰天したルイズに入手経路を根掘り葉掘り聞かれたが、賭け試合とカジノでボロ儲けしてきたそうだ。

机にぶちまけて数えてみると10000エキューを上回った時点でルイズが気絶した。

幕間（前書き）

登場人物の途中経過です。
飛ばしてもOK。

現在、どんな状態かなどを表示します。

幕間

ルイズ

本作のメインヒロイン。ストロベリーブロンドの長い髪に鳶色の瞳の美少女。

13人も現代の兵士を召喚してパニックしていると思いきや、結構毎日を楽しんでいる。

大分歳の離れた妹、または娘扱いされている。

全員の左手に「ガンダールヴ」が刻まれていたり、ルーン的能力が扱い方によっては恐るべき事態になる事をまだ知らない。

ラタリ・ヒューズ

著者の別小説の主人公。

性別は女。だが外見は鍛え上げられた体の細身の男。

職業は暗殺者。

鮮やかな赤毛と鋭いエメラルドグリーン of 瞳。

敵すら説得したり金品や暴力で味方に引き込んでしまう。

情報収集能力は異様に高く、王家の裏話から店頭の野菜1つの値段まで常時収集している。

ルーンは右手に「トール」、左手に「ガンダールヴ」、両足に「スレイプニル」が刻まれている。

一人称は「俺」。

ルーンの効果

トール：投げられる物なら百発百中。小石から砲弾までは実証済み。物によっては「ずっと俺のターン！」も出来る。

名前の由来は北欧神話の雷神、トール。ちなみに雷撃は出せない。

スレイプニル：脚力を超強化。発動して足場を踏むと大分深くヒビやヘコみが入り、爆発的な瞬発力と驚異的な移動速度になる。
兵器転用すると、右手で物を投げる。スレイプニル発動して蹴る、などにより城壁等の硬度のかなり高い対象が崩壊してもおかしくない火力になる。

名前の由来は北欧神話の最高神オーディンの愛馬スレイプニル。足が8本とかお前は蛸か、とツツコミを入れたいと思うのは著者だけではない筈。

ジョン・プライス

性別は男。

元SAS、TF141所属。階級は大尉。

歴戦の猛者。40歳を越しているが身体能力は高い。

こめかみから鼻の下まで続いている髭が特徴的。

ほとんどいつもブリーニートハットを被っている。

イギリス人。

参謀兼隊長。13人の中では最高齢なので自動的にリーダー扱い。

SAS内での二つ名は「ブラックフィスト黒い拳」。

素手でもむちやくちや強い。

ルーンは左手と額に刻まれている。

喫煙者。

ルーンの効果

ミョズニトニルン：アイテムの能力や使用方法などを解析する。危

機能的状況をいきなり逆転させる事もあるので敵だと恐ろしい。ルー
ンの解析も出来る。

ジョン・ソープ・マクタヴィッシュ

性別は男。

元SAS、TF141所属のスコットランド人。

身長はウィルと並ぶ180cm。

ファーストネームが英語圏ではむちゃくちゃ多い「ジョン」なので、
混乱を避ける為実家で呼ばれている「ジョニー」となった。あと、
SAS時代から呼ばれている「ソープ」はあまり好きではないらしい。

誰もが一瞬ギョツとするソフトモヒカンの筋骨逞しいタフガイ。左
目近くに傷がある。

目の色はラピスラズリに近いブルー。

スコットランド訛りがある。

部下の面倒見がいい。

犬が大嫌い。多分、襲われる前に殺す位に。

ルーンは左手のみ。

喫煙者。

ジョン・デニス

性別は男。

元SASのNチーム隊長。

現在は「ウィリアム」の訓練施設の教官を勤めている。

仕事で移動中、チームの乗ったストライカー装甲車ごと召喚された。
Nチーム+ラタリを率いていて、メンバーからはとても信頼されて
いる。

書類仕事は苦手だが、オールラウンドに何事もこなす人。
そこそこ穏便に済みますが、時と場合によっては荒っぽい手段も辞さない。

お茶目な所もあり、ノリツツコミもしたりする。
顎髭を生やしている。

プライスの後輩。

ルーンは左手のみ。

何故か左目は相手の魔力の流れや属性が見える。

ジョン・マクスウエル

性別は男。

元SASのNチーム副官。

階級は大尉。副官だが大尉。

上司と部下の間できつい板挟みと思いきや、かなりまともな人間関係でした。

時折軽口を叩くが、実力があるから出来る。

賭け事には天性の才能があり、ちょこちょこ稼いではみんなに奢ったり貯金する。昔、若い頃にベガスのカジノで挑発されて「賭け金青天井（つまり無制限）」で全種類、水面下で行われた店のレート操作も無効にして店を潰した事がある。

鼻を骨折した割には女性にモテる。

愛銃はG36C、サブにショットガンとMP5を装備している。

ルーンは左手のみ。

ゴースト（??）

性別は男。

本名はサイモン・ライリーだが、ほとんど知られていない。

階級は中尉。

常に頭蓋骨がプリントされたバラクラバを身に着けているので、素顔は不明。目が青い事しかわからない。

マクタヴィツシユの副官。

誰かボケると律儀にツッコむ。

性格は冷静。めったに慌てない。

ルーンは左手のみ。

ローチ(???)

性別は男。

本名はゲイリー・サンダーソン。

元TF141所属。

階級は軍曹。

肝心なところでコケるが、しっかりやる時はやる。

召喚された兵士達の中では一番若いので、いつの間にか未っ子扱いされている。

性格は一番穏やか。

童顔のせいで女子に間違われるのが悩み。だが可愛いのは事実。全く意図していないがボケ担当。

ルーンは左手と右手。

ルーン的能力

ウィングダールヴ：別名「神の右手」。どんな生き物も従順に、能力は最大限に発揮されるようになる。例えばドラゴンなら飛行速度UP、攻撃能力UPなどとなる。

Nチームメンバー

マイク 支援火器のミニミ担当。

根っからの軍人に見えるが、案外頭脳派。
癖の強い黒髪に茶色の瞳。

ジョージ　そこそ裕福な家の出だが、愛国心と名前を変えた反抗
で軍隊に入った。しかも肌にあっている。ポジションは対戦車兵。
AT-4を担いでいるのがものすごく似合っている。
赤茶色の髪に緑の瞳。

レオ　無線担当。左腕にライオンが吠えているタトゥーが入っている。
子供の話になると「顔がだらしなく緩んで話が長い長い」とは
チームメイト談。
クルーカットの黒髪に青い瞳。

デビット　母親が陸軍の軍曹で、父親が一般人というちょっと珍しい人。
軍隊生活も要領よく立ち回っている。
ヘンリーと組んでしょっちゅうイタズラを仕掛ける。2人の逃げ足の
早さは折り紙付き。
アッシュブロンドの髪と青混じりの緑の瞳。

ウィル、ヘンリーは兄弟で、他に妹が2人いる。ウィルは180cm
の長身だが物静かで、人のいい面を見つけるのが特技。スロウイ
ングのコントロールが抜群で狙ったところに必ず。
ヘンリーは身長は160cmだが、口から先に生まれたと言われる
程口が立つ。

両方ともポジションはポイントマン。
茶色の髪に榛色の瞳。
ヘンリーの瞳の色が若干薄い。

ルーンは全員左手。

デビットのみ右手に特殊なルーンが刻まれている。

読みは英語読みで「Armor y」、つまりは兵器廠。

M9からプレデターまで出せる上に、スペックと外見さえわかれば
どんな物でもOKという超チート能力。

Day 4 新たな仲間

side: ジョン・プライス

「おはよう！いい天気ね！」

ウキウキしているルイズと対照的に、俺達の動きは遅かった。

「朝っぱらからえらくテンション高いな」

夜間の見張りを終えて帰ってきたところで捕まったラタリがどんよりした顔で朝食をつついている。

その2つ先の椅子に座っているローチはテーブルに突っ伏して寝ている。

「相当楽しみだったみたいだからな」

「ジョニー 俺としては未だにソープと呼んじまうが、「ジョニー」の方がいいと言われれば仕方ない がコーヒーを口に運ぶが…お前、それ4杯目だぞ？」

「誰が行くのか決めてあるのか？ 決まっていなければ早く決めるぞ」

「馬で4時間かかるとかこのド田舎だよ！」

「失礼ね！れつきとした王都よ！」

レオが両手で頭を抱えながら吠え、ルイズも負けじと吠えた。

「2人とも落ち着け。移動手段に限られているなら、別の手段も考えればいい」

マックスが間に入り、宥めると両方とも落ち着いたようので移動手段を考え始めたが、2人に背中を見せたマックスがデビットに合図をしていた。

学院の外に出ると、ブラックホークを召喚して王都を目指した。ルイズははしゃいでヘリの外の風景を見ていた。マックスがタンデム

タイプパラシュートを背負って、万が一、ルイズと一緒に機外に落ちても対応出来るようにしておいた。

そして地上は「スレイプニル」の能力を使ったラタリが併走している。敵味方識別用ストロボは起動してあるので位置は把握しているが、正直あいつの能力はとんでもない代物だ。

4時間かかるところを1時間半で到着して、城下町を散策する。

地形を把握しているラタリが屋根の上から目的地までの道筋や危険の有無などを無線で知らせてくれて、4人ずつの班に別れて自由行動にした。

そして人を掻き分けながら進んでいると、ルイズは俺達と歩幅が合わないで遅れそうになっていたが、ジョージに肩車されて最初は地上約2mの高さに悲鳴を上げていたが、30秒も経つと鼻歌を歌う位に楽しんでいた。

後でジョージが理由を言っていたが、「俺の一番下の従妹いとこがあんな感じに歩きが遅いからいつもやっていた」だそうだ。

その数分後、ラタリから「後方からそっちに走っていく男がいる。ひかれないように逃げるよ」と通信が入った。言われた通りになっていると、頭上を1頭のグリフォンが屋根ギリギリの高度でパスしていき、その後ろを軽装鎧を着た数人の女性が追いかけて行った。

「…危なかったわ」

「ありやかなり危険だったな。それに鎧を着た女も殺気立っていたな」

「何かあったんですかね？」

「プライス、ラタリだ。さっきの奴はどうもスリだったみたいだ。

殺人や強盗でも手配されている。…待て！奴はそっちに戻っていく

！時間がない！…ええい、至近距離だ、離れてろ！」
デンジャークローズ

そう通信が入るとエイブラムスの主砲を撃ったような爆発音が聞こえ

人混みの中を走る男の目の前にフード付ローブを翻した人が着地した。両手両足をつけて着地した石畳は深くへこみ、多数のヒビも入った。

「ヒイイツ!? な、テメ「逃げんなドサンピン!」

悲鳴を上げた直後に顎を下から強烈に殴られて高々と舞うと石畳に背中から着地して動かなくなった。

「…やだ。死んじゃったの?」

「アッパー程度で死んでたら、ボクサーがどんだけ死んでんだよ」
ルイズの呟きに、蹴ってうつ伏せにした男の両手足を拘束しながらラタリが答える。

「『ぼくさー』?」

「ボクサーは、『ボクシング』っていうスポーツをしている人の事だ。古風な言い方では『拳闘士』ともいうな。いろいろ決まりもあるけど、ものすごく単純に言えば、『素手でぶん殴り合う』ってこと」

「誰かこいつを衛兵に引き渡すのを手伝ってもらえませんか?」

アッパーを喰らって気絶している男を肩に担ぐと、ラタリは周囲の人垣を見回しながら問いかけた。

「そいつは我々が引き取るっ」

人垣を掻き分けて現れたのは軽装鎧を着た女性騎士だった。

「そうでしたか。どうも差し出がましかったですね」

男を別の女性騎士に渡し、その場を去ろうとしたが最初に声をかけた騎士が隊長らしく鋭い目で睨みながら言葉をかけた。

「貴様、メイジか?」

「は?俺が?冗談きついな。ただの元特殊職だ」

そう言つと踵を返してこちらへ戻ってきた。

「巻き込んですまなかった。急ごう」

「で、今回の目的は武器屋だと」

「最初がレイピア、次が式典用装飾剣か。どれもこれも銃に比べたら腕力勝負になるから俺達には無理だな」

「よく分かってるじゃねえかよ、ヒョロい兄ちゃん。とつととけえれ」

ただの古びた剣と違っていたら、いきなり喋り始めたのはびっくりした。ジヨニーが掴むと剣は少し低い声で「おでれーた。お前、使いか」とか言っていた。

ちなみに、剣は「デルフリンガー」という名前だそうだ。

武器屋の親父は間違いなく喋る剣という厄介払いが出来た事に加えて、ラタリがロングメイスを購入したので喜んでいた。

その晩

王都から戻った後、厨房で賄いを食べながらその日にあつた話を話し、全員で情報を共有していた。

「今のところ、王都で話題なのは『土くれのフーケ』という盗賊だ。それときな臭い話がアルビオンで上がっている。そのアルビオンというのは浮遊大陸らしい。位置的にイギリスに近いな」

ニヨッキとサラダを口に運びながらラタリからそんな報告が上がってきた。

「よくもまあ、そんなに情報を集めて来られるもんだ」

「仕事の仕事だけに情報は命だからな。まかり間違えば死に繋がるとなれば精度は高く、情報の収集角度は広くなる。」

『噂』によれば、『レコン・キスタ』とか言う、共和制を謳っている糞共 失礼、反対勢力が狙っているのがアルビオンだ。周辺国は動向の静観しかしてない。所詮はケツに火がつかないと動かないって事さ」

やれやれ…全く、どうして俺達はこうも《戦争》に縁があるんだろ
う？

(そういえば、俺のもう1つのルーンは何だ?)

部屋でくつろいでいる時にふとそんな事を考えて、デルFRINGガーを右手で掴んでみると、頭に情報が流れ込んできた。

(ん?)

『デルFRINGガー：初代ガンダールヴが使ったとされる剣。この武器の特性は、魔法攻撃を吸収する事、吸収した分で使い手の体を動かす事』。

(なるほど、額のルーンは物を解析するのか。使い方に慣れておいて損はないな)

「さて、どうしたものか」

窓を開けて枠に半分腰掛けて煙草を吸っていると、赤毛の色っぽい美女に声をかけられた。

「あら、おじさま、こんな所でどうなさったの?」

「少し考えたい事があってな。俺はプライスだ。よろしく、ミス・ツエルプスター」

「キュルケでいいわよ。考え事って何?」

「…昨日までいた戦場から、唐突に切り離されて グリーンゾーン
安全圏 にいると自分の頭がおかしいんじゃないかと思

う。兵士なら皆悩む事だが。どんなに頑強な兵士でも少なからず戦闘ストレス反応()を持っている。ただ、皆隠すのが上手いのです」

「『せんじょうすとれすはんのう?』何それ?」

「端的に言えば、『心の傷』だ。思い出すと冷や汗が出たり、恐怖に竦んで動けないなんて事ないか?戦争に行つて、無事に帰つてきた男が以前とは性格が違っている、または悪夢にうなされるとい話を聞いた事は?」

「嫌な事思い出すと冷や汗が出たりする事はあるけど、戦争から無事に戻ってきた人自体あまり知らないわ」

(無事に戻って来た事を隠しているか、昔のジャパンのカミカゼをやったのか…)

ブラボーシックス
「B-6として、もう10年以上は粉骨碎身して国に尽くして、働いた報酬が犯罪者扱いか」

おかしくもないのに、笑いがこみ上げる。隣に座っているキュルケの顔が引きつっているのは見なくても分かる。

「そんな…酷すぎる」

「キュルケ、残酷だがこれは俺達の生きていた世界で本当の話だ。

世の中には出てこない『裏側の世界』の……嫌な話を聞かせてすまなかった。もう寝なさい」

そう促すとキュルケはぎこちなく歩いて部屋へ戻って行った。

「…やれやれ。俺も歳かな。らしくもなく泣き言垂れて」

『プライス、感傷に浸ってるところ邪魔するけどよお、あんたは十分強いぜ。13人の中でも、今までの使い手の中でもな』

ため息をつくくと、手元から響く声に含まれたからかいに眉間に皺が寄った。

「誰が『感傷に浸ってる』って？そりゃ10年以上も兵士やってれば『強い』に区分されるさ。だが彼女のように『敏感な年頃』にある話聞かせたのは酷な事だと思わんか？」

ゆらゆらと煙草の煙と、教会で懺悔した後のような後味を吐き出している

(Cpt. Price! Someone coming six
o'clock!)

(…!!)

耳元で5年前のあの激戦の最中に亡くなった副官が叫んだ気がした。叫びと同時に、背後に人の気配を感じてガバメントを抜いて振り向きながら突きつける。

意識しない一連の動作の中でか細い悲鳴を聞いた気がした。

(…悲鳴…悲鳴?誰の?)

() 戦闘ストレス反応 別名シェル・ショック。戦争という極限状態におかれた兵士達に発症する。症状など詳しい事は [wiki](#) 参照。

Day5 アドレナリン・ハイとマネーゲーム

side:プライス

翌日、俺達は7人で夜間訓練を終えて帰ってきたところで突然、巨大なゴーレムに仰天した。

「「「「何じゃこりゃあー！！！！」「」「」」」

「…とりあえず撃て！」

持ち直した俺の指示で、機関銃とアサルトライフルが一斉に集中砲火を浴びせたが、決定打に欠けているようで動きは止まらない。何度目かの殴りつけで壁に穴が開くと人が中に走り込んで行った。

「ラタリとジョージ置いてくるんじゃなかったー！」

俺の左斜め後ろからマックスがM4のカートリッジを交換しながら怒鳴った。

その近くにいたローチが何故か射撃を止めて背中に背負っていたデルフを抜いてゴーストの肩を叩いた。しばらく何か言い合いをしていたが、結局銃撃戦に加わった。

そして散々銃弾を浴びたゴーレムは敷地の外に出ると3歩も行かないうちに崩れ落ち、人影はいつの間にかいなかった。

騒動から一夜明けて、学院長室では時代や場所に関わらずよく見られる場面が広がっていた。

「この中でまともに当直をした事がある者は？」

シユールズに責任転嫁しようとした教師達へのオスマンの問いに、誰もがグウの音も出なかった。

「『破壊の杖』がフーケに盗まれた。誰か捕まえようとする者はおらんのか？」

その問いかけには俺の手が上がった。

「オールド・オスマン、俺達が夜間訓練をしていたのは知っているな？訓練帰りの俺達が退却させるなりどうにかしていれば、盗難騒ぎも起きなかった。だから俺達が捕まえに行く。13人もいるから応援はいらん。場所に見当はついてるしな」

昨夜のうちにUAVとプレデターで周辺3マイル圏内の索敵は済ませていたので最後の発言は付け加えた。

その言葉に全員驚いていたが、1人だけ若干違う驚きを見せていた。
(あいつだ)

ラタリの瞳がギラリと光ってそう教えていた。

数分後、森入口

「なあ。俺達は『応援はいらん』と言ったはずだが？」

「だって心配で！」

「へえー、心配ねえ」

デインスが猫なで声で問いかけ、ルイズの答えに不気味に優しい声を出す一瞬黙った。

「何の為に耳ついてんだ！俺達の言った事が聞こえなかったのか！ガキの遊びじゃねえんだぞ！分かってんのか！」

今までのストレスも加わったのか、かなり大きい怒鳴り声にルイズ、キュルケが飛び上がった。

タバサはよくわからん。

「相手は学院の生徒じゃない、盗賊だ。学院のぬるま湯に浸ったガキの浅知恵で勝てる相手じゃない。帰れ」

デインスからのとどめの戦力外通告にルイズとキュルケは逆に食らいついた。

「嫌よ！盗賊相手に引き下がるなんて」

「そういう考えが邪魔なんだ。タバサ、こいつら連れて一緒に帰ってくれ」

ラタリからも鋭い指摘が飛び、タバサは指笛でドラゴンを呼んだ。
「泣こうが喚こうがお前さんを唆そうが帰れ。必要な頭を叩くなら杖をぶっ壊せ」

ものすごい過激な指示にルイズとキュルケが反論しようとしたが、ドラゴンが空へ舞い上がる方が早かった。

「ありや見るからに罠ですね。誰もいないでしょう」
双眼鏡で小屋の周囲をしたヘンリーがそう予測した。

3 m程先の茂みからサーマルサイトで周囲を見回しているマックスもこちらを向いて、「敵影なし」のシグナルを送ってきた。

「突入だ。行くぞ」

俺の号令に5人が立ち上がり、小屋へ走った。

俺が先頭を走り、勢いのままドアを蹴り開けると踏み込む。室内の埃っぽい空気で、この小屋が使われなくなってからかなり経つと判断した。

「クリア！」

「急いで探せ！」

「ありました！」

テーブルの下に置かれていた箱を取るとジョニーから切羽詰まった声で無線が入った。

『プライス！表にゴーレムがいます！すぐに逃げてください！』

直後に屋根が壊され、直接空が拝めた。

「プライス！逃げるぞ！」

ラタリが足元を抜けて小屋へ飛び込んで来て、俺達を掴むと「一瞬で」森の中に退避した。

少し離れた所にいたジョニー達が俺達を見つけると急いで駆け寄ってきた。

「プライス、生きてますか？」

「死ぬかと思つたな。中身を改めておいた方がいいかもしれん。壊

れてたりするとまた面倒だ」

「……………はあ!？」

俺達13人は箱の中身を見て顔を見合わせた。

「M72つてベトナム戦争時代ですよね?その頃の物が何でここに？」

「知らんがな。まだ現役のところもあるとか聞いた事があるけどな。そう言いながらジョージが左手で触る。

「まだ使える。最悪の場合は使っちゃまおうぜ」

「それはいいかもしれんが、ゴーレムはどうする?チマチマ攻撃して相手の精神力を枯らすって策もある。だが相手が素手でも強けりや意味がない。ここは2つに別れよう。ラタリ、ジョージの班はゴーレムに。俺達はメイジを捕まえに行くぞ」

サーマルサイトを使いながら周囲を搜索していく。

ラタリ達は相手を引き回しているようで、重低音や銃声が聞こえる。(プライス、2時方向にいます。1人のようです)

俺達はゴーレムの方向から唐突に響いた爆発音に足音を紛らわせて背後をとった。

「こんちくしょう、『破壊の杖』を使いやがって…。まあ、使い方は分かった訳だ」

黄緑色の長い髪の女がゴーレムの足元を走り回るラタリ達を睨んでブツブツ言っていたが、後頭部に銃口を合わせて宣告すると固まった。

「チエックメイト。忠告しとくぞ、動くなよ」

「…あんた達何者だい?」

「俺達は兵士だ、『土くれ』。杖を下ろせ」

ため息をついて杖を下ろしたフーケにUMPを突きつけたまま、ゴーストが前に回り

少し驚いた声で報告した。

「プライス、こいつは学院の秘書のミス・ロングビルです」

「上手い考えだな。秘書なら色々と嗅ぎ回っても学院長の為だと普通は考える」

「おまけに元貴族だ。彼女の本名はマチルダ・オブ・サウスゴータ。サウスゴータ太守令嬢だ」

目の前の藪を掻き分けて現れたラタリがそう言うと、彼女が傍目にも分かる程動揺した。

「ハッ…人違いだ」

「太守の一族で行方不明者は2人。1人は太守の令嬢、マチルダ。マチルダ嬢の特徴は黄緑色の髪の毛、土のスクエアクラスだと。そしてもう1人」

そこまで言うとロングビルは今まで以上に鋭い目でラタリを睨みつけた。そして次の言葉で、知っている事まで自覚なしにバラしてしまった。

「あの子に何かしてみろ！あんたを八つ裂きにしてやる！」
だがラタリはそこでニヤリと笑って話を続けた。

「落ち着け。それよりも、ちよつと散歩しないか？」

「……………はあ？」「……………」

何となく話が見えた俺とジョニー、デイニス、マックス、マイク、ゴースト以外の7人とマチルダが首を傾げた。

「何で捕まえないんだい？」

ロングビルが脇を歩く俺に問いかけた。実際、拘束するどころか、杖まで取り上げる気配がないので色々考えていたんだろう。

「こつちとしては、目先の恩賞よりも後々の情報網だ。『損して得とれ』って事さ」

疑問に答えたのは斜め後ろを歩くラタリだ。

「確かに情報網は魅力的だな。だが嘘の情報を掴まされるのはごめんだぞ」

「本当に、軍の役立たずの情報部に何回泣かされた事か…」

俺の言葉に斜め前を歩くジヨニーが、でかいたため息をついてがつくり肩を落とした。

俺もそうだが、よつぽど酷い目に遭ったらしい。

「その点は抜かりない。裏切れば彼女は大損害だ。金遣い荒いって事は知ってるし、役立つ情報をくれればボーナス。情報は重要であればあるだけお金になり、双方の都合になるって事。じゃ、初任給」
そう言うのと革財布を渡したが、中身を確認したロングビルが絶叫した。

「こんな大金をポンとよこす、そこの赤毛の兄さんに絶望したー！」

学院に帰り付くと俺たちはオールド・オスマンに報告しに行った。

ロングビルとは「どうしても心配でこっそりついていきました。すみません」と口裏を合わせておいた。

うっかり口が滑ったら…の話は淡々としたラタリだが、知らされた方は顔が悪くなっていった。

やめろっつーの。

「フーケは逃げたか…」

「すまん。取り逃した。だがブツは取り返した。確認してくれ」

俺が机の上に箱を下ろし、留め金を外してオスマンに中身が見えるようにした。

「うむ、確かに『破壊の杖』だ」

そしてオールド・オスマンが触ろうとした目の前で箱の蓋を閉めた。「聞きたい事がある。これはどうやって入手した？」

右腰の後ろに回した右手で安全装置を解除してあるガバメントを握っているが、正直言って魔法と撃つのはどちらが速いかわからない。緊迫した睨み合いが続くかと思っただが、オスマンが話し始めた。

「わかった。話そう。…これはワシの命の恩人の形見じゃ。30年前、ワイバーンに襲われた時にこれを使って助けてくれた人がいた。見慣れぬ格好をしてもう1本、この秘宝を持っていた。その人は手

当てる甲斐もなく亡くなってしまったが、ワシはこれを彼の形見として遺す事にしたんじや」

「これを2本…なら対戦車兵^{タンカー}か。オールド・オスマン、その命の恩人だが恐らく兵士だ。俺達の物とは違うかもしれないが服のどこかにこんな布があててなかったか？」

左腕のパッチを見せるとしげしげと眺めている。

「…いや、これではなかったような」

次の手段は単純だが一番効果があった。紙に主要国のパッチを描き見せると、1つを指差した。

国旗を見てジョージが呟く。

「アメリカか…まあ予想範囲内だな。M72ですしねーww」と、隣のローチが首を傾げて問いかける。

「ねえ、ジョージってそんなキャラだった？」

一時的に作者の身代わりさ！

「今の何？！ねえ今のは何ー！？」

「ありがとう。こんなあたしを雇ってくれて」

その言葉に振り向くと、ロングビルが頭を下げていた。

頭を下げられたラタリが面倒くさそうな顔をして手袋のはまった手で後頭部を掻く。

「よせ、そんな柄じゃない。頭を上げてくれ。それに、あんたの帰りを待っている人がいるんだろ？」

その言葉に穏やかに微笑むロングビル。

「…ああ、あたしの可愛い、可愛い妹がいる。それに身よりのないあの子達も」

「孤児院までやってんのか。そりや大変だな」

デビットの言葉にロングビルが答えようとしたが、本塔を出たところでラタリに止められた。

「どつした？」

「…すっかり忘れてた。ルイズどうしよう」
滅多に見られない事だがラタリの顔が微妙に引きつっている。
「なるようになるさ。口の立つヘンリーもいる訳だしな」

しかし数分後、俺の予想は思いつきり外れた。

「この…バカー!!!」
ルイズの金切り声と共に振り下ろされた杖から爆発音が響いた。
ルイズの部屋の窓から煙が出ているのを俺達は「中庭から」眺めていた。

「やー、安全圏から見るとやっぱり凄いな!」

「Wooahhhh!!!」

「Hoolly shiit!」

「…AC-130より凄い破壊力だな。あれで対空も出来たら文句なしだ」

破壊力のすごさにゲンナリしながら腰を下ろすと、マグに入った紅茶が全員に渡される。

異世界での初任務、とっていいのかわからんが、仕事を終えた後の紅茶は格別に旨い。

デインスが目を押さえて、眉間に皺をつくりながら自分が観察した事を報告する。

報告しながら眉間の皺はどんどん深くなっていくが言葉は止まらない。

「本当に。でも変な感じですね、彼女の魔法は。

どういう訳か俺の眼は魔力が流れが見えるんですよ。だけどルイズの場合は《何か》が違ってるんですよ。上手く表現出来ないんですが…」

言われてみれば、最初から確かに妙だった。普通なら、呪文を唱える杖を振る。ちよっと間隔が空く。発現となる訳だが、ルイズの

場合は呪文を唱える 杖を振る すぐに目の前で爆発。

「確かにいくら何でも変だよなあ。手榴弾だって4秒はかかるし、火の魔法で似たような爆発だって何かが違うしな」

ヘンリーの言葉に全員が首を傾げる中、ジョニーが口を開いた。

「もしかしたら仮説が根本的に間違っているって事は？《呪文を唱えても爆発ばかりする》から《ゼロのルイズ》。これがもし、《爆発》が《発現した結果》なら？」

「だとしたら…《使えている》？でも系統に当てはまらないって事は…」

「彼女は《虚無》…！」

思いがけない発想の転換による答えに少なからず気まずい思いを抱えたまま、俺達は部屋に戻った。

「…何かバタバタしてますね」

ミニミを分解掃除していたマイクが手を止めずに呟けば、ジョニーが顔を上げて耳を澄ませた。

「あゝ言われてみれば…何かあったか？」

「誰か手榴弾暴発させたか、火器庫をぶっ飛ばしたとか？」

M9を分解掃除しながらのローチの一言に周囲が凍りついて、ゆっくり振り向いた。

「おま…学園に普通、火器庫はないって」

「…あー、そうだ。忘れてた。てっきりこの間いた基地の事かと。大尉、覚えてます？D大隊のジョス」

ローチの言葉で思い出したらしくジョニーが苦笑しながら続けた。

「あいつか。ぶっこわれた洗濯機に手榴弾を4個もぶち込んで爆発させたり、バレットでIED処理しようとしてたな」

「バレットは諦めてくれましたけど、洗濯機に手榴弾はまだやってるかもしれないですよ」

「お前らただけフリーダムだったんだ…」

脇で話を聞いていた俺とデイニス、ラタリが頭を抱えた。

「ゴーストものせられて誰か入ってる簡易トイレに体当たりして倒してましたよ」

「ローチ！テメエは何バラしてやがる！？」

「お前も一体何してやがる！？」x11

「そういえば、ゴーストが倒したトイレってあの時ちょうど…」

〇〇少将が使ってたそうですよ」

真顔でローチが告げた言葉に11人が凍りついた。

……………

「……………え。ちょ、マジ？」 告げられた事実には思いつきり拳動不審になつて慌てるゴースト。

「よりによつてあの『怪物』相手にかよ…」

「最悪…」「俺知らねー」「同じく」「異議なし」

side：ラタリ

「その少将ってそんなに怖いのか？」

俺の声に12人、計24の瞳が無言で視線を注ぐ。

はつきり言つて不気味にも程がある。

「……………わかった。『とてつもなく』恐ろしいんだな？」

俺の言葉に全員が重々しく頷くが

クウ、キュルルル…。

突然響いた、どんなにシリアスな場面でも脱力させる音。音的には可愛いらしいが、実際は消えた後の静寂が何故だか異様に恐ろしい。そして

「…だ〜れだ〜？今すぐ白状しろ〜？今なら《Special！！ torture》1時間で勘弁してやる」

ウィルがゆらりと立ち上がって、口元を三日月に歪めている。

「おい、あいつあんなキャラだったか？それに《Special！！

! torture》って何だよ！直訳したら《特別！拷問》じゃねえか！」

「安心しろ。死人は出てない」

キツパリと告げられたその言葉に一瞬、安心しかかったところへ「廃人は出た、かな？」

.....

.....

俺を含んだ12人が持てる技術と体力、頭脳をフル回転させてその場から脱走したのは言うまでもない。

1時間後

ウィルの頭のネジが少し吹っ飛んで大騒ぎした後、ルイズに呼ばれ部屋に集まった。

「あんた達、本当に兵士なの？騒いでて聞こえたけど、子供みたいね」

「え〜？大人相手にそれ言っちゃう〜？」

口を尖らせたウィルの両こめかみをプライスが拳骨でグリグリとすりつぶした。

「あんだだけ大騒ぎしてれば丸聞こえだって事がわからんかお前は」
そう呟くと頭を抱えているウィルの胴体を掴んで後ろに投げながらブリッジで倒れる。

「ギャー！ジャーマンスープレックスとか歳を考えて親父さん！」

「だーれがクソジジイだー！」

ウィルの悲鳴混じりの一言に「ギッ！」とプライスの目がつり上がると逆海老固めを決めた。

「俺そこまで言っただねえー！！！」

「プライス……ちょっとやりすぎじゃ……」

完全に引け腰のローチが恐る恐る話しかけたが眼光鋭く睨まれて引

つ込んだ隣で、ルイズが小声でデニスに話しかけた。
（ねえ、プライスって本当は何歳なの？）
（プライス先輩？…40歳にはなってる、はず）
そう聞いたルイズが面食らった顔になった。

（・・） ルイズ

「……………え……………!!」
いきなり悲鳴を上げたルイズの近くにいた何人かがのけぞって耳を
押さえた。

「いきなり叫ぶな！」

「だってだってだってー!!」

「襟首掴んで揺らすな!酔う酔う酔う酔うー!!」

「てめえら…おせて表出るー!!」

Day 5・5 { Shall we dance? }

side: プライス

俺達とルイズが大騒ぎしていた頃、他の生徒達は舞踏会の為に身支度をしていた。

時計を見た途端に焦り始めたルイズもシエスタの手を借りて支度をしようとしていたので、代わりに会場の手伝いに5人ほど出した。残った俺達はバルコニーの片隅に集まり、談笑していた。デビットが英陸軍の礼服を出したので、有り難く着させてもらっている。

故郷にいた時に飲んでた物より高級な酒と食事で適度に酔ってきた頃にキュルケがバルコニーに出てきて、深呼吸をした。退屈そうな瞳で室内を見やり、戻る途中で視線が俺達に止まった。

何か挨拶を言いかけて軍服に首を傾げ、幾らか知っている顔と見ると微笑んだ。

「ライス、間違えたわ。すつごくかつこいい」

「お褒めに与り光栄だ」

その時、耳元で短いノイズが走ると幾らか聞き慣れた冷静な声が鼓膜を震わせた。

「L u i s e w i l l a p p e a r e s o o n . A n y o n e e s c o r t , h u h ? 」

からかうような響きの声に言い返す前に、彼女が会場に来た事を知らせる声が響いた。

扉が開くと白いドレスを着たルイズが現れた。

着飾った彼女が非常に魅力的な事に気がついた男子がダンスを次々と申し込むがやんわりと断り、バルコニーに出て来た。

「ルイズ！すごく綺麗だ！」

ローチが笑顔で言うとルイズは僅かに顔を赤くして口ごもった。

「あ、ありがと…」

「さて、レディ。誰を選ばれますか？」

しばらく迷った後、ローチの目の前に立つと手を掲げた。

手を取って室内から流れてくる音楽に合わせてステップを踏む。

最初はぎこちなかったが少し経つと慣れてきたのか、足元を気にしていたのが顔を上げて笑顔を見せる位にはなった。

「おでれーた！主人のダンスの相手をする使い魔なんて初めて見たぜ！」

「俺は40年の人生で喋る剣を初めて見たさ」

俺が微妙に皮肉を混ぜて返しながら葉巻をふかす。

何度見返しても不思議で仕方ない2つの月が空に浮かんでいた。

If物語もし別の人が召喚されていたら？（前書き）

本編は一旦ここで休み。

最初のパターンは「全世界共通で最強の生き物が召喚されたら？」
です。

If物語ももし別の人が召喚されていたら

爆発の煙が晴れてきた時、そこにいたのは。

「ここ、どこ？」

落ち着いた色の服を着た中肉中背の中年女性だった。辺りを見回して首を捻っている。

「あんた誰？」

そう問いかけると、「ギロリ」という効果音がピツタリな、品定めしているような鋭い視線が頭のとっぺんから爪先まで走り、一瞬で上下関係が定まった。

「あんた？初対面の人をそういう風に呼ぶと教わったのかしら？一体どういう教育受けたんだ？ええ？」

女性が途中から脅すように半音低い声で話しながら一歩踏み出す。ルイズは最初から目測が誤っていた事を今更ながらに悟ったが、他の生徒達は集団心理でも働いたのか、微妙にビビりながらからかった。

「なんだ！乳母でも呼び出ブベツ」

そして彼はそこで黙った。否、強制的に黙らされた。現に血の吹き出る鼻を押さえて地面で七転八倒している。

「誰が『クソババア』だ？他に言いたいヤツは出て来い。遠慮すんな、来いよ」

穏やかそうな笑顔と裏腹に、口調にはドスがこもり、右手には手のひらサイズの石が乗っている。もう片方の腕には同じサイズの石が大量に抱えられている。

簡単に言えば、160km/hという、現代のプロ野球選手並みの速度で石が投げられた。

だが、生まれてこの方、魔法は万能！という考えに浸りきった彼らには理解出来なかった。

タバサはいつの間にか、読んでいた本を閉じて杖を握り締めている。「あの石を投げた。かなり速い。只者じゃない」

そして、ハルケギニアという異世界で彼女の伝説が始まった。

アルビオンでワルド子爵の攻撃速度を上回る弾幕、ガリアの狂王ジョセフの虚無の呪文「加速」の出現先を予測、悉く腹部や顔面を撃ち抜くといった神業。

空を舞うドラゴンすら翼膜をぶち抜かれ、顎を直撃した石で脳を揺らされ、騎手が叩き落とされる。

後に彼女は「不可視の射手」と呼ばれるようになった。インビジブル・シューター

彼女は数百年後にまで伝わる、あらゆる投擲記録で脅威の命中率の保持者となった。

〈完〉

元ネタ：筆者の母。

靴下からクソ重たい百科辞典まで、掴んだ物をぶん投げて外した事はほぼなし。

ちなみに百科辞典は筆者は掠った程度だが、当たった壁が目の前へコんだ。

If物語もし別の人が召喚されていたら？（後書き）

↳反省会という名の座談会

ルイズ（以下ル）「もう酷い目に遭ったわ。まさかあんなに強いとは」

作者（以下サ）「ちよつときつすぎた？」

ル「ちよつと”どころじゃないわよ！何なのあの人！強すぎるわ！あんだ、あたしを殺す気！？」

サ「んな馬鹿な。そりゃ一般人より投擲力が高いけど、手加減はしてるよ。簡単にや死なない」

ル「嘘よ！お母さまと同じ位怖かったわよ！」

サ「：“烈風”と只の一般人を同列にするな。単純に考えて、並べるのがおかしいって考えはないのか」

ル「ん？」

サ「小首傾げたって効かんよ。お前さんの母さんも愛情の裏がブゲフツ！」

ル「でも怖かったもん！」

サ「半泣きになりながらきつい左フックかます女がどこにおるか！むしろベアナックルで勝てる！勝ってこい！畜生、いい左だー」

ル「ヤダヤダヤダー！お母さまに会うだけで緊張するし、冷や汗止まらないし、脈早くなるし、頭真っ白になって何にも言えなくなっちゃうもん！」

サ「：相当怖いんだな。安心しろ。あそこまでじゃない。代わりにものすごく口悪いけどな」

ル「全然大丈夫じゃない！」

ローチ「：僕が同じテーブルにいる意味ってあるの？そもそも紹介してもらってない」

ルサ「「あなたは目の保養なの!!」」
ロ「断言しちゃったよorz」

Day6(先見(さきよみ))

side:ゴースト

舞踏会の翌朝、俺達は毎朝の日課のランニングを終えて帰ってきた。ブライス大尉とデイニス、マックスや数人の隊員がギーシュや他の男子を鍛え直している。そして俺達は。

「ルイズー起きてー。起きてくれー」

ローチが揺すって起こそうとしているが全く起きる気配なしだ。

「…起きてくれない」

手強さにガツクリ肩を落としたローチの頭を撫でてやると、一度頷いてから俺はルイズの頭側の端に座った。突然の俺の行動に首を傾げているローチに「静かに」のサインを送ってから、おもむろに俺は耳元に顔を寄せて

ある音を出してから数秒後、今までの手強さが嘘のように飛び起きて周囲を必死に見回した。

座っていたベッドから落ちて床を笑い転げる俺と、両手で口を押さえて必死に耐えるローチを交互に見比べて首を捻り続けるルイズだった。

数分後、中庭

「あー朝から疲れたー…頼むから…笑わ…プツ…アハハハハ！無理無理無理ーっ！」

「あそこまで…効果、抜群だったのは…予想、以上！」

俺は息も絶え絶えにそこまで言ったが、また笑いが止まらなくなつてローチと一緒に笑い転げていた。

更に数分後

「もう…本気で…死ぬ。無理」

「お前達は朝っぱらから何をバカ笑いしてるんだ？」

完全に呆れ顔のマクタヴィツシユ大尉がそう言いながら地面にひっくり返っている俺達の顔を覗き込んだ。

「大尉！聞いて下さいよ！ゴーストが…ゴーストー！」

そこまで言ったがまた笑い転げるローチに「???」を頭の上に浮かべて左目の傷跡を掻いているマクタヴィツシユ大尉。俺も説明したいんだが、口を開くだけでも笑いが止まらないので喋れない。

更に数分後

「それであそこまで大笑いするって…お前達大丈夫か？」

「だってどうしようもなかったんです！！」

俺とローチがピツタリ揃って同じ事を言ったので大尉は地面に胡座をかいたまま後ろへひっくり返った。

「確かに蚊の飛んでる音で目が覚めるのはあるな。有効といえば有効な手だが…そこまで笑う事か？」

プライス大尉がM4を分解掃除しながらそう言う脇で、マックスが日誌をつけながら顔を顰めて太腿の脇をさすっていた。そういえば、付き添っていたのは今日は彼だった。

「だから今朝はご機嫌斜めだったのか。蹴りで済んだから良かったけど、こりやすげえ痣になりそうだ。風呂が楽しみ」

「デイニスはどうした？確か昼から警備だったんじゃないか？」

「警備途中ですが、コルベールの小屋にストライカー置かせてもらいに行ってます。多分、内部構造見せてくれとか迫られていますよ」

「あいつにも困ったもんだ」

プライスとマックスはやれやれと首を振るとそれぞれの仕事を再開した。

今朝の分担で警備に割り振られた俺はローチと一緒に見回りをしている、召喚された時に乗っていた砂漠迷彩塗装のストライカー装甲車があった。

少し感慨に耽っていると、後ろをついてきたローチがストライカーを見て驚きの声を上げて振り向いた。

「凄い！見てもいいですか？」

促すと顔を輝かせて近づき、背伸びをして覗いたりしている。

「興味があるのか？」と尋ねると、少しはにかんで答えた。

「小さい頃、アメリカの知り合いに基地を案内してもらったんです。そう言くと車体を右手で撫でて、目を細めながら言葉を続けた。

「その時に見せてもらった戦車とか装甲車は今でもよく覚えてます。中を見せてもらったり、戦車の車長席に座らせてもらったりして凄く嬉しくて、その夜は全然眠れなかつたんですって」

昔の思い出から戻ると少し心配そうな顔になって、「ストライカーって野晒しにして大丈夫なんですか？」と聞いてきた。

「言われてみればそうだな…どこか探してみるか」

一番近い建物はコルベールの研究室で、運良く主もいた。

「はあ…これが“そうこうしゃ”ですか。…何と言うか、変わった物ですね」

「うーん、性能もBMPよりいいと思うけどなあ。でもあれは『歩兵戦闘車』だったか」

「…“びいえむびい”？“ほへいせんとうしゃ”？」

コルベールの混乱をよそに俺達の話は迷加速していく。

「分類上はな。乗り心地は地獄だとよ。前に拘束したスペツナズ崩れをストライカーに載せた事があるんだが、『いい車だ』とか言うてたな」

「しかもまだ現役だったり、近頃だと闇市流れだったり。前に市街地でかち合つて大変でしたよ。」

下手に動いたらミンチですからね。結局、ブチ切れた大尉がゲリラのIEDで黙らせてました。」

凄かったですよー。一瞬で上下ひっくり返つて」

「マクタヴィツシユは怒らせるなよ、ローチ？…コルベール大丈夫か？おーい？」

数十分後

「つまり、あれは軍用の“装甲をつけた”車で、他にも種類がある」と？」

やっと復活したコルベールが紅茶を一息に飲み干して、大きく息を吐いた。

「すぐくおおざっぱに言えばね。一般道走るような夕水でも足まわり強化して、鉄板貼れば出来るよ。」

だいぶお金かかるけどね」

「…“たほ”？“鉄板”？“もどき”？」

「聞くのが怖いんだが…コルベール、いくら何でも大砲の弾は“ブドウ”じゃないよな？」

恐る恐る確認する俺の言葉にコルベールは首を傾げた。

「ぶどう？大砲の弾は“たま”でしょう？あの丸い“たま”」

その一言に俺とローチは頭を抱えて叫んだ。

「…いくら説明しても無理な状況に絶望したー！！」

「OK、とりあえず話を整理していこう。そもそも世界が違いすぎるし、技術は2、3世紀は遅れてる。普通に考えて21世紀の歩兵が生活していけないな。ストライカーもガソリンがなければ動かせん」

俺がため息をつくのと、情報の洪水の中からどうにか見つけたらしい欠片について聞かれた。

「がそりん」ですか？」

「ガソリンがあれば大体の車は動くから、少なくとも今の状態よりは楽ですね。ガソリンっていうのは、石油を精製して作る燃料の事。最近では石油以外の物から作られた燃料を使う物もあるけど、ガソリンがまだまだ主流かな」

「せきゆ」とは？」

「石油は大昔の木や動物の死体が微生物に分解されて出来る物。石炭も似たような物だけど、あつちは圧力と地熱が相当の歳月かかっている。技術的には石炭から石油は作れるらしいけど、方法はわからない」

「技術的には」の下りでコルベールの顔が好奇心で輝き身を乗り出してきたが、末尾を聞くと椅子に座り直した。

さっきまで喋り続けていたので、思い出したように紅茶を飲み、手土産に持参した干し棗椰子の実をかじる。

その脇でコルベールは目を閉じて眉間に皺を寄せている。

「コルベールさん？だいじょ」

「お手伝いします！」

「ギャツ！」

心配したローチが突然の復活に驚いて後ろへひっくり返った。

「がそりん」！非常に興味深い！あの“そうこうしゃ”を動かせるなんて！」

コルベールは唐突な変身に硬直している俺達を余所に、実験用機材を並べ始める。

やる気に溢れるコルベールだが、「土なくしてレンガなし」の言葉通り、ガソリンのサンプルがなくてはガソリンを作れない。

空の小ビンを近くのテーブルから取り、底から1/4の辺りまでガソリンを採取して渡した。

「ふむ、常温でこれだけにおうという事は」

「揮発性高いから扱いには気いつけるよ。引火したらあつという間に火の海だ」

俺の忠告に一気に青ざめるとビンの蓋を閉めて机に置いた。

「そそそそんなに強力なんですか!？」

「もつと大量にあれば、の話だ。それ以上の危険物って言ったら、白燐、黄燐、ニトログリセリンくらいだな。他は洗剤の組み合わせで爆発物にもなるんだが…「洗剤」の「せ」の字もないと意味ないしな」

少なからず「汚れ仕事」をした事のある俺や先輩は家庭にある物も武器にする事が出来る。

例えば「家にガスを充満させて不凍液＋洗剤を放置。すると不思議1分足らずで爆発しました」という訳だ。

実際に空き家でやってみたら家一軒が全焼というとんでもない威力だった。

「はー、そんな事もあるんですか」

短時間で今までの常識を覆す情報を聞かされてパンクするどころか吸収しようとしているコルベール。

思ったより長く居すぎたので暇を告げると、少し迷ってから聞かれた。

「近いうちにフィールドワークに行くんだが、誰か興味と暇のある人は来ないかな？」

考えてみると、彼にはかなり世話になっている。

多少なりとも礼は返さなくては、我らが祖国、大英帝国の「英国紳士」の名が廢る。

「わかった。暇な連中に声をかけてみる。色々ありがとう、コルベール」

「ちよつと浮き世離れしてるけど、いい人ですね」

コルベールの小屋を後にすると、ローチがそう呟いた。

「メイジなの…って、あれ？メイジって事は“貴族”？でも雰囲気はまるで違うしなあ」

「没落貴族か、或いは研究心の塊のどつちかだろうな」

警備を終えて台所の隅のテーブルで賄いを食べていると、ジョージが薪割りを終えて戻ってきた。

「デイニス、ローチ、お疲れさまです。マルトーさん、薪割り終わったぜ。裏口の脇に置いてあるからな」

つられて見ると確かに裏口の脇の棚に4分割した薪が大量に置かれている。

「おう、ありが…ん？そんな所に棚あったか？」

「ああ、全然使わない木っ端で作ったんだが…」

「何ていい奴なんだお前は！」

突然マルトーが叫んだのでローチが飛び上がった。俺はビビった。

「いやー、外にあると食事時に使う薪を取りに行くのが大変だったんだ。ありがとう！我らの雷よ！」

「いや、大した事ないさ。いつも世話になってるから、これ位はしない」と

「聞いたかお前ら！本当にいい奴ってのはこういう奴だ！いい奴は傲らない！」

「いい奴は傲らない！」

「シエスタ！我らの雷にアルビオンの古いのを注いでやれ」

「マルトー、すまないが今は勤務中だ。晩飯の時に頼む。悪いな」

side:ジョージ

警備に戻るデイニスとローチと食堂前で別れて中庭に出ると、ラタリが女子に護身術の授業をしていた。

「護身術なんて要らないわ。魔法で十分じゃない」

そう言った女子　ドリルかと間違えそうな縦巻き髪　がつんけんした態度で言った一言に周りの女子達も笑う。笑っていないのはルイ

ズと青い髪の女の子とキュルケだけだ。

「…なら実践あるのみだ。ミス、あなたの系統は？」

「水ですわ。『香水』のモンモランシーです」

「ミス・モンモランシー、では得意な呪文を」

そう言われて杖を振り上げ

呪文を唱えようとした脇から杖を取られ、腕を外側へ軽く捻られる。

「ああ、そりゃあ無理だ」

俺には思いつきり納得のいく行動だが、どうも「こちら」の世界では納得いかないらしい。

「…離さないよ！」

「援護射撃ありだぞ？構わん、撃て」

そうせつつかれて数人の杖が上がり、呪文が紡がれた。足元の土がぬかるみに変わったのを見て、ラタリは「速度が足らんが、目のつけどころは良し」と評した。

Day 6・5 不意打ち (Surprise)

「先生。僕達、先生の實力を見たいです」

終了の鐘が鳴った後に3人の生徒を連れだした男子がラタリにそう言った。

「…随分大人数で押しかけてきたな。申し訳ないが、とっとと帰れ」
言って向けた背中に向かって挑発的な言葉が投げかけられた。

「…やっぱり『ゼロ』の使い魔だ。主に似て根性がないな！」
その言葉にたちまちラタリと俺のこめかみに太い血管が浮かぶ。

「何をして…げ！」

「ギーシュ…人の顔見て「げ！」はないだろう」

やれやれと肩をすくめた俺と、不気味な静けさを保つラタリを脇へ引きずつていき、小声で囁いた。

「彼らはラインクラスだ！格が違う！」

「ギーシュ、俺はこつちに来る前、あれの3倍は厄介で、人数は5倍の糞つ垂れ共と18年も殺り合ってきた。この際、徹底的に『躰』てやる」

淡々と話すラタリを見て、思わず俺は「怖え…」と呟いた。

「…ジョージ、頼む、止めさせてくれ！」

ギーシュが俺に縋りついてきたが一蹴した。

「うん、無理。俺も賛成。プライス大尉、デイニス、今から中庭で面白い事が始まりますよ」

《おいおい、何やらかす気だよ、ジョージ？》

「失礼な。ラタリが生徒にふっかけられたんですよ、デイニス」

《はー、そいつら馬鹿だ》

《間違いない馬鹿だな。ラタリ、俺からも許可する。徹底的にぶちのめせ》

「了解。早く来ないと席がなくなりますよ」

《ハハ、飲み物位は出してくれよ？》

「あ、それと、俺もぶちのめすんで」

《まあ…同士討ちには気をつける》

《ゲ！ちよつと先輩！》

数分後

娯楽に飢えている生徒達の知るところとなり、分厚い輪の中央には生徒4人とラタリと俺が対峙した。

輪の一番内側には11人とルイズ、キュルケと青い髪の子が陣取った。

「止めなさい！死んじやうわよ！そもそも武器持ってないでしょ！」

「銃はないが、武器ならある」

そう言つてラタリは左腰の後ろに挿してある鉈を鞘ごと出し、両腰と右胸の投げナイフ、トドメに両前腕の内側に隠してあるブレードを見せた。

俺はグロツクとコンバットナイフを出して動くかどうか、残弾数を確認する。

ラタリが額の上にかけていたシューティンググラスをかけると、鼻の上まで上げていたシエマグを一旦喉元まで下げた。

「ルイズ、俺も、俺以外の12人もお前の使い魔だ。今から主を冒涇した奴らを《成敗》するんだから、お前がしゃんとしてないとしまらんぞ」

そう言つて指先でルイズのストロベリーブロンドの髪の流れを軽く整えてから2、3回肩を叩いて踵を返した。

「ま…負けたら承知しないんだからね！わかつた!？」

その声をかけられてかなり驚いたのか、振り向いた時、薄い色つきのシューティンググラスの下の目が大きくなっていた。

「…その調子！」

一度笑顔を向けて、向き直った時には俺達は自分でもわかる違う顔つきになっていた。

「地獄巡りをする度胸はあるか、糞ガキ共」
「お仕置きが必要だなあ、ガキンチョ」

side：プライス

「聞け！彼らは私達13人の主人である、ルイズ・フランソワーズを侮辱した！ここに私達、ラタリ・ヒューズとジョージ・フレイムは彼女の汚名を濯ぐ！」

人の輪の中央で相手より先にラタリが演説をぶった。輪がざわめき、視線が行き来する。先に鼻っ柱へ1発もらったので、相手は言葉をなくして互いに顔を見合わせているだけだ。

「おお、先手で宣伝と宣戦布告がましやがった。こりゃ後出しは絶対無理だな。先にレセプター（受容器。プライスは《ツボ》という意味で使用）は全部押さえられたようなモンだ」

「れせふたー」？

そう言っただけ俺を見上げてきたのはキュルケの隣で本を読んでいた青い髪の女の子だ。

「レセプター」は元々はアレルギー：特定の食べ物なんかで蕁麻疹じんましんを起こす人がいるだろう？食べ物で反応する人の体の中では、その食べ物に含まれている物質が“カギ”なんだ」

そこで俺は説明を分かり易くする為、イギリスのアパートの鍵を出して見せながら続けた。

「つまりは、“カギとカギ穴”の関係さ。只、このカギは普通の力ギじゃない。体には“害のある物質”だと認識されているカギだ。だから体が反応して、蕁麻疹が出たり、酷い場合は数分で気道が充血して呼吸困難になったりするんだ。呼吸困難になったら、本気で喉元掻き毟るから気道確保したり色々やってやらないと窒息死しちゃう。それだけじゃなくて、第2段階も恐ろしいんだが、一番簡単な予防法は原因を特定して、それを避けることだな」

と説明してからはたと気がついて相手に謝った。

「いい。為になる話をありがとう。あなたは水メイジ？」

「…俺達”メイジ”じゃないぞ。C・Mコンバット・メテリックの訓練は積んだが、S A S
なら誰でもしてる」

「えすえーえす“？”

「…今説明したら簡単に1ページ潰しちまうから、後でな」

「?…約束」

「ああ、約束だ。うんざりするほど聞かせてやる」

「立ち会い人は…ミス・ツエルプストー」

グラスの下の鋭い目が人の輪をギョロリと見回して、最初にキュルケに目を留めた。

「ミス・タバサ。私は立ち会い人としてこの2人を推薦する。公平な判断が出来る事を期待している」

「期待されてるなら、それに応えてあげないとね？」

無言で頷くタバサ。

「杖を落とすか、降参を宣言したら終了って事でいいかしら？」

「異議なし」「同じく」

「始め！」

そう宣言した直後、相手が魔法を放ってきた。

「エア・カッター！」

不可視の風の刃が迫るが、ラタリが土を巻き上げた即席の煙幕で軌道を見切る。

「ファイヤー・ボール！」

風の刃に被せて炎が迫ったがこれも避ける。

攻撃が止んだ隙に2人は走って間隔を詰めるが、俺達なら全速力で5歩の距離を3歩で詰めた。

「アース・ウォール！」

間一髪で1人が目の前に壁を作り上げる。

ぶつかる前に離脱すると魔法が飛んでくる。

上体を逸らしたり跳ねたりして魔法をかわしていたが、炎を避けた直後に風が2人を直撃した。衝撃に奥歯を噛み締めてどうにか踏みとどまるが、炎を内包した風が迫っていた。

黒こげの死体 それもつい数分前まで言葉を交わしていた仲間の死体だ を回収する事を考えた、次の瞬間いきなり2人は俺達の動体視力でも追いつかない速度で攻撃をかわして、そのまま相手に突っ込んだ。

最初より格段に速い！まるでスタート直後にトップスピードに達したままコースを走っているような速度だ。

それからは一瞬だった。片方が1人の腹にタックルして吹っ飛ばし、もう片方は速度に追いつけず、別方向に突き出されたままの腕を掴んで縦方向に回転投げ。

やっと反応し始めた1人を両側から掴んでもう1人へ突き飛ばし、地面に転がした。

「終了」

「へ？何で？」

「まだやれる！邪魔するな！」

タバサの終了宣言にキュルケや他の生徒達は呆気にとられ、相手は怒った。

「杖。全部取られてる」

タバサが理由を言った直後、2人は4本の杖をへし折った。そりゃもう、いとも容易く。

side:ルイズ

「ラタリ！ジヨージ！すごいわ！」

「良くやった！」

「すげえなおい！」

「いよつしゃー！勝ったー！」

「俺達を潰す気かー！！！」

11人とわたしに飛びつかれてもみくちやにされているラットとジヨージが遂に吠えた。

「ルイズ」

ウィルにちよいちよいと手招きされて、歩いていくと後ろを向かされて、いきなり左肩に乗せられた。

「キャア！いいいきなり」

脇からラタリが暗い色の膝掛けをかけてくれると、誰かの声が「はい、そこで笑って！」と言っていた。

一際大きい笑い声上がり、つられてわたしも笑うと一瞬、眩しい光が瞬いた。

あれ？と思うが、周りのみんなは気がついていないみたい。

「ルイズー、今度ケーキと紅茶の美味しいお店行こうぜ」

「え！どこ?!」

「はい、3、2、1、ファイヤー！」

「合図違うぞおい!?!」

「アハハハ！」

また一瞬、眩しい光が瞬いたみたいだけど、合図に笑っていたわたしにはよく見えなかった。

ふと見下ろした光景の中でラタリの顔に赤い色がついているので、辿っていくと眉の上がパツクリ割れていてそこから出血していた。

「キャー!?ラタリ、血、血出てる!」

「キットかガーゼ出せ!」

「We had a men down! I repeat! We had a men down!」

「メデイーックー!!」

「おい落ち着け」

「お前は落ち着きすぎだー!」

異口同音に叫ばれて顔を顰めながら、顔の半分位が血に染まったラタリが傷口を押さえながら答えた。

「顔面の出血って大量に見えるけどそうでもないぞ」

「お前じゃなくてルイズが大変なんだよ!」

冷静に見えてちよつとズレた答えに11人が集中砲火して、ローチが顔色の悪くなったわたしを少し離れたベンチに運んでくれた。

ベンチに座って少し経ってから「気分はどう?」と聞かれ、「ちよつと胸がムカムカするけど、それだけ」と答えた。

ちよつと困ったように眉が下がって透明度の高い緑色の瞳に心配そうな色が浮かんでいたのが少し良くなった。

頭に被っていたもの 考えてみたらほとんど全員が被っていた を外すと少し短めで癖のない真っ直ぐな焦げ茶色の髪が現れた。

「…大丈夫かしら」

わたしの漠然とした問いかけに、目の前で片膝をついたローチが少し下から目を合わせながら答えた。

「大丈夫だよ。ラタリの怪我は大した事ない。でも、いきなり血を見てびつくりしたでしょ?」

確かにそうだった。いきなり血を見て、最初に考えた事は「死んでしまつかもしれない」だった。

「びつくりするのは普通だよ。僕達はその感覚がちよつと…麻痺してるんだ。慣れすぎてる」

そう言う隣に腰掛け、膝の上に置いた手を見ているような、見ていないような目で見ながら話を続けた。

「傷口から血が出て、どこをどうしたら出血が止まるから処置が出来る。反対に、どこに力を加えれば簡単に骨を折る事が出来るのもわかる。それこそ、ルイズちゃんがどこではどうという風に振る舞うべきか、自然にわかるように、僕達は」

わたしは話の途中で頭に血が上って思わずローチの頬を平手打ちした。

乾いた音の後でわたしの手はじんじん痛み始めたが、ローチはわたしを見た。

「ローチ！いいえ、ゲイリー・サンダーソン！あなたはわたしの何？答えなさい！」

「…どうしたの、唐突に」

わたしの言葉を聞くと、困惑して眉をひそめた。

「いいから答えなさい！」

「…使い魔兼護衛？」

「じゃあ、使い魔の仕事の説明はしたわよね？」

「『主の目となり、耳となる』、『主の望む物を持つてくる』、『主を守る』…でしょ？1回聞いただけで覚えたよ」

やれやれと肩を竦めるとローチは話し続けた。

「ルイズちゃん、僕達は『兵士』だよ。『戦争』で『人殺し』をしてるんだ」

「今はわたしの『使い魔』でしょ！あなた達がどんな兵士でも、わたしが召喚した『使い魔』なのよ！…初めて成功した、魔法なのにやっと、召喚、できたのに…」

今まで散々「ゼロ」だと言われ続けてきたけど、初めて成功した時は本当に嬉しかった。

幻獣じゃなかった事に最初はガツカリしたけど、何日か経つうちに、「この人達で良かった」と思った。

でもわたしと彼らの間にある、あまりに深くて広い、どうやっても埋められそうにない亀裂にショックを受けて頭の中がグルグル回って、鼻の奥がツンとしてきた。

嫌だ、このままだと絶対に泣く。

目をぎゅっと閉じていると、不意に暖かい何かに包まれた。びっくりして目を開けると、目の前には微妙な濃淡がついた砂色の上着が

あつた。

「……」

何も言わないで髪の毛を撫でてくれて、背中を軽く叩かれる。

「…仕方ない使い魔ね。主人を泣かせるなんて」

どうにか強がりを書いてみたが絶対鼻声だったと思う。

(…した?)

(……な)

(…か)

目を覚ますと、部屋のベットに横になっていた。すぐそばには濡れたタオルが転がっている。

「…?」

寝起きのよく回らない頭で、タオルを拾い上げて目蓋に載せると冷たさが気持ち良くて、口元が思わず緩む。

「起こしちゃった?」

「ひゃあう!」

突然聞こえたローチの声に飛び上がって目蓋からタオルを外した。

見回すと、ローチは窓の側、ランプの灯りがギリギリ届かない位置に置いてある椅子に座っていた。

「べべ別にじじ自分で起きたわよ!」

「声震えてバレバレだよ?」

クスクス笑われて顔に血が上っているのがわかる。でも笑い方はちい姉さまみたいな、優しい感じ。

「…最近寝つきが悪かったみたいだね。女の子には寝不足は良くないよ」

言われてドキツとした。確かに最近はちょっと寝不足だった。…何で気づかれたんだろう?

「べべ別にかか関係」

「関係はあるよ。ルイズちゃんが体調崩したら僕達は心配する。そりゃ犬とか猫だったらしなないかもしれないけど、僕達は人だよ。何か悩んでいるなら、話してみて。今言えないなら、いつか」

そう言われて、手持ち無沙汰に枕を抱えた。

…ずるい。

「へ？何が？」

いきなり聞き返されたので慌てた。

「ななな何よ！わたし何も言っていないわよ！」

「いや、今『ずるい』って」

「言っていないってば！…もう、馬鹿ー！」

「ブヘッ！」

図星をつかれて恥ずかしさのあまりに、持っていた枕を投げつけると布団に潜り込んだ。

「はー、びっくりしたなー、もー。…てかルイズちゃん、制服着たまま寝るの？」

「…！」

そう言われて、気がついた。顔から火が出そうなくらい恥ずかしくて、思わず実力行使してしまった。

「…出てってよー！」

「ギヤーー！」

爆発と一緒にローチを部屋の外に叩き出すと、真っ赤になっている顔をどうやって冷ましたものかと頭を悩ませた。

Day7 変化は唐突に

side：ラタリ

「おはよう、ルイズ」

「…おはよう」

俺の挨拶に何故か口をへの字に曲げてルイズが返す。

顔を濡らしたタオルで拭い、着替えを箆笥から出そうとすると止められた。

「…やらなくていいわよ」

その言葉を聞いた時、俺は耳を疑った。あまりにびっくりしたので、口調が素に戻っていたが気にしていられない。

「マジかよ。何考えてるんだ？」

「いいから出て！」

背中をグイグイ押されて部屋の外に出されてしまった。せめて抗議しようと思っ振り向いたものの、鼻先でドアが閉められてしまった。

「やあラタリ、おはようってそれは待つてくギャツ！」

俺が寮の入口まで戻ると、ギーシュがチェスでコテンパンに負けきれながら声をかけてきた。対戦相手はマイクだ。

「…訳わかんねえ。何でっチェックメイトたっチェックメイトていきなり『自分でやる』って言い出したんだか。あと1回で終わるか？」

ため息をついて盤を覗く。ギーシュのキングは完全に包囲され、クイーンは見えている目の前で倒された。

「…口調がチンピラになってるぞ。どうした？」
盤を見つめたままマイクが呟いた。

「ああ？…ほつとけ。こつちが素だ。いつものは多少お上品に…ギ
ーシュ、お前へったくそだな。プライスやゴーストはともかく、口
ーチにも勝てるかどうか怪しいぜ」

俺が顔を顰めながら言つと盤から目を外してギーシュが睨んできた。「ああもう！言つなら君が対戦したまえ！」

「やなこつた。そもそも、お前は どうしてビショップ相手にポーンで立ち向かおうとか考えるんかね？」

「根がアホなんだろ。ほい、チエックメイト」

「ギヤーー！！」

容赦ないマイクの一指しでギーシュは負けた。

「今ので5回目。ランニング増量。なに、たった3周だ」

「むちやくちやだー！」

「何してるの？」

「おお、ルイズおはよう。ギーシュとチエスしてた。じゃあなギーシュ、腕磨いておけよ」

ルイズ、マイクと寮の外に出るとジョージとプライスが談笑していた。対戦車兵タンカーのジョージは身長178cm、がっしりした骨格と厚みのある筋肉の持ち主だ。

「…それで支援チームのゴルフが突入したら、もう現場は大混戦に拍車がかかっちゃまって。」

司令部はちんぷんかんぷんな指示…おはよるルイズ。…大丈夫か？」

「おはよう、ルイズ。どうした？気分が悪いのか？」

ジョージとプライスが揃って心配する声をかけた。

「…別に。何でもないわ」

「………」

いつもと違うつつけんどんな答えに俺達4人は顔を見合わせた。

食堂の入口までついていき、厨房まで行く道で額をつきあわせた。

「どうしたんだ？」

「よくわからん。今朝、俺が起こした時からあんな調子だ。着替え出そうとしたら『やらなくていい』とさ」

「やれやれ。気まぐれだねえ」

「気まぐれで済めばいいがな」

マイクが両方の眉を上げておどけて言うと言いつとプライスが厨房のドアを開けながらげんざりした声で答えた。

「おはようございます。…どうかなさったんですか？」

厨房に入っただけでそばで仕事をしていたシエスタがちょっと心配そうに挨拶してきた。

「シエスタおはよう。…まあ、ちょっとな。マルトー、おはよう」
少し言葉を濁しながら、厨房の竈の間でコックに指示をしているマルトーに挨拶をする。

「おうプライス、おはようさん！ちっと待ってくれ！」

「焦るな。待つのは慣れてるさ」

そう言うのと隅にあるテーブルに向かった。テーブルの上には持ち回り表が広げてあり、ジョニーとデイニスが調整をしていた。

「おはようございます、先輩。何かツイてない事でも？」

「おはようございます、プライス。どうかしましたか？眉間に皺寄ってますよ」

「デイン、スープ、お前達まで言うのか。…朝から気まぐれな主人に頭を痛めるところだよ。」

ああ、そういえばコルベールのフィールドワークについて行くのは決まったか？

「はい、俺とローチとウィルが行きます」

ジョニーがそう言うのと持ち回り表を見て、頷いた。

「フム。気をつけるよ。ヤバくなったらケツ捲れ」

「そうならない事を願いますよ」

side:プライス

「ルイズ、ちょっといいか？」

朝食が終わった後で、そう前置きしてからコルベールのフィールドワークに数人をつける事を話した。

ルイズは最初驚いていたが、コルベールのフィールドワークについては知っていたらしい。

ローチの「色々見て回って見分けんぶんを広げたい」という訴えがとどめだったようで、「いい？絶対にミスタ・コルベールには迷惑かけない事！」と釘を差しながら許可してくれた。

「コルベールせんフギャツ！」

ローチがコルベールの小屋に足を踏み入れて2歩で転んで尻餅をついた。

…ああ、こいつはいつもだったな。

「ローチ君、大丈夫かい？」

ギョツとした顔で慌ててすっ飛んできたコルベールが手を差し出す。

「ありがとうございます。いつもこうなんですよ、僕」

手を借りて立ち上がると苦笑しながら頬を人差し指で掻いた。

「何もない所で転んだり、パラシュートが木に引っかかって宙吊りになったりな。俺が助けに行かなかつたらコード切つて脱出！と思つたら下の雪にずっぽりはまつてただろ？」

「そうそう…って何バラしてるんですか！大尉だつて犬に追い回されてるじゃないですか！」

「…よくそれでSASに入れたな。ソープ、お前未だに犬に追つかけ回されるのか」

「何で俺だけいつつも犬に追い回されるんだー！ちくしょー！」

ソープがうがー！と吠えながら髪の毛をかきむしる脇で、コルベールはついていけずにフリーズしていた。

「…で、一緒に来て頂けるのはローチ君、マクタヴィッシュ君、ウィルさんですね。」

「よろしく願います」

「挨拶もいいが、日程立てないか？」

ソープが近くのテーブルに地図を広げて、目的地や日程、往復の道

筋の計画を立てていく。

目的地は4km先の森林周辺。日程は調整日1日を含めて4日となり余裕だ。

「ほおー、かなり詳しい地図ですな。これをどこから？」

「上空の偵察機から送られてくる。…言っておくが紙が降ってくる訳じゃないぞ。記録した地形の画像を通信してくる。それを紙に写すんだ。…道はこつちでいいのか？少し手前から北西に行った方が少し余分に時間はかかるが安全だろう。最悪、この近くの村まで逃げればある程度は態勢を整えられる。どうする？」

「では、そうしましょう。いやあ、心強いですな。1人だと襲われた時が大変で」

アハハハ、と屈託なく笑っているが3人が内心考えた事は「こいつ大丈夫か？」だった。

side: “ソープ”・マクタヴィッシュ

「出発予定時刻は…1130だ。解散」

そう言つて部屋へ戻り、支度をしていると開けっ放しのドアがノックされた。顔を向けるとラタリが大きいバスケットを片手に下げている。

「昼飯を作ってきた。少しだが甘い物も入れてある。それと旅費だ。稼いだ方がいいが、俺だけだと使い切れん」

中身が入って重そうな革財布がバスケットの上に置かれた。

「それと、プライスから伝言。『こつちは心配ないからデビット連れて行け』とさ。伝えたからな」

そう言つと、廊下を歩きながら肩越しに手をひらつかせて去っていった。

予定時刻の10分前には全員が合流した。

「お待たせしました。…人数、増えてますよね？」

「プライス大尉から『こつちは心配ないから護衛に行け』と出されまして。よろしくお願いします」

「そういう事でしたか。よろしくお願いします。馬車は向こうに用意してあります」

「行きましょう、と促されついて行くと

「…『荷車』？」

マイクがM4を担ぎ直しながら呟いた。

「やーだなあ！これ『馬車』ですよー！ねー大尉？」

ローチは何が面白いのか、ケラケラ笑いながら俺を振り仰いだ。

「何故俺に振る」

「だって大尉ですもん」

論点をずらすようにしたものの、返ってきた更にズレた答えに危うく滑るところだった。俺に出来たのはため息をついて、ローチの頭を左右に揺さぶるくらいだった。

「…そこで胸を張るなあー！」

「ニヤー！揺れる揺れるー！大尉やーめーてー！」

「あの…大丈夫なんですか？」

「いつもの事だと思いますよ。コルベルさん、そこ退かないと怪我しますよ。只でさえ、俺達のつ、荷物、重たい、ですから。よし、積み終わったー。大尉！ローチ！いつまでじゃれてるんですか？もう出ちやいますよー！」

デビットに急かされて、俺達は慌てて馬車に飛び乗った。

「何か予定に変更はないか？」

「そうですね…このまま何もなければ、途中で町に寄って…地図でいうところですね。そこで必要な物を調達して行きます」

「それともう1個。追いつきが出たらどうする？」

「追い剥ぎ？アハハハ！こんな辺鄙な場所には出ませんよ」

「コルベールの答えに俺達4人はゲンナリして顔を見合わせた。

「そういう時に限って出て来るんだよなあ……」

「フラグ立てちゃったよ。やだねえ」

訊きなれない言葉に好奇心を掻き立てられたのか、御者台にいるコルベールが振り向いた。

「“ふらぐ”って何ですか？」

「気にすんな。てか前見てくれ前！」

この間までいた世界から一変して、ものすごくゆるーい話をしながら出発してから3時間ほど経った。

「コルベール、そろそろ飯にしよう。現在位置の確認もしないとな」
馬車を道の脇に寄せてバスケットを出す。

蓋を開けて入れ子式の中身を取り出していくと、ぎっしりとクラブサンドや普通のサンド、色とりどりの野菜、肉類、果物も入っていた。

更に驚いた事に、中に水筒も入っていた。中身はごく普通の紅茶だったが、ファンタジーの世界でピクニック…常識からどんどんズレてきてる気がする。

「すげー」

マイクが口笛を吹く脇でコルベールも目を丸くしていた。

「ほう、素晴らしい。マルチ料理長に後でお礼を言わなくては」

「いや、これ全部ラタリの手作り」

「あいつは相変わらず器用だな」

……

マイクとデビットの一言に空気が凍った。

「……えー!?」「」

「……うるせー!」「」

俺とローチ、コルベールの絶叫に、耳を塞いだマイクとデビットが言い返す。

「すごい！ラタリって何でも出来るんですね!」「」

「大体の事は1人でやってるな。ん?…あいつ、他に何出来た?」

「料理、裁縫、掃除は出来る。育児もそこそこイケるだろうとジョージは踏んでるな。付き合いも良し。格闘と射撃もOK」

指を折りながら列挙されていく内容に口が開いたまま塞がらない。

「…子供でもいるのか?」

「それ本人に言うなよ。向こうで言った奴が7/8殺しにあつて、しこたまケツを蹴り上げられてた。

20人はいたな、そんな命知らず」

「正確には58人な。俺達が組織に入る前に38人。協力者で数えたらもつといるだろう」

「…欠点といえば、まあ、あるにはあるが」

そう口にしたマイクが珍しく言い渋っている。

「何かあるのか?」

俺が促すと、マイクは5秒ほど視線を彷徨わせて、長々とため息を吐いた。

「はつきり言つて、Nチームの俺達もあいつから打ち明けられた後、全員ひでえ二日酔いになるまでしこたま酒を煽ったんだ。そうでもしなかつたら…」

そう言つと、顔を伏せて緩く左右に振つた。

胃の中身が突然石にでもなつたように重苦しい雰囲気になつたが、

ローチが鼻を嚙つて少し震える声を発した。

「…ほら!あつたかくて美味しいうちに食べましょうよ!」

この面子の中で最年少のローチが、その一言を言う為にどれだけの勇気を振り絞つたか想像するに難くない。

俺は、せめて笑えているように願いながら笑顔を向けて、焦げ茶色の少し短い髪の毛を少々乱暴に引っ掻き回した。

ローチが慌てている姿を見て、デビットが笑つて飲んでいた紅茶を噴き、寸前でマイクがバスケットを回避させた。

「ん?まだあるのか?」

重さに首を捻つたマイクが中を漁り、一緒に覗き込んだローチが最

近1番の幸せそうな顔で中からビクトリア・ケーキとスコーンを出した。

きちんと皿とフォーク、スプーンに加えてケーキサーバー、スコーンに至ってはクロテッド・クリームとジャムが添えられている。

「訂正、あいつ天才だ。もしくは天才つつー皮被った悪魔」

2人のうちどつちが言ったか俺は知らないふりをして、幸せそうな顔でケーキを頬張るローチを眺めていた。

side:プライス

午後の授業中の付き添いにはジョージを出し、俺とラタリはロングビルの手伝いで学院長室の書類や本の整理をしていた。

「ヘックシヨイ！」

ラタリは今日何回目かの盛大なクシャミをして鼻をかんだ。

「大丈夫か？」

「こりゃ風邪じゃねえな。寒気はしないし、熱感もない、脈も体温も正常」

「じゃあ何でだ？」

「知ってる奴いるなら教えて欲しいよ」

「噂話という事は？あ、ラタリさん。右足に気をつけて下さい」

「ああ？」

ロングビルに注意されて俺とラタリが同時に見ると、二十日鼠がそこにいた。

「これ、学院長のだろ？返すぞ。籠に入れとけ。じゃないと潰されちまう」

そう言いながら机の上に置いて、親指で存外優しく頭を撫でてやつてから仕事に戻った。

1時間後

「助かりました。私だけだと手が足りなくて。…それに尻触られたり下着覗かれたりしなくて済みました」

「おいおい、何してんだ…」

俺が頭を抱える脇でラタリが時計を見て、「いい事を思いついた」と笑いながら俺とロングビルの肩に手をおいた。

5分後

庭の一角のテーブルの上に、イギリス人としては馴染み深いアフタヌーンティーの用意がされた。

「…すごい」

手際の良さかアフタヌーンティーの内容なのか、ロングビルはきよとんとしている。

「お嬢さん」

俺が少し身を乗り出して話しかけると思いつきり肩が跳ね上がった。若干顔が赤いが無視する。

「ん？どうした？」

優しく笑いながら先を促すと何回か口を開閉して視線を彷徨わせて俺から外す。顔の赤みはさつきより強くなっている。

「じらすのが好きなのか？」

左眉を上げながら、鎌をかけると目をつり上げて俺を見据えた。

「んな訳ないでしょ！」

「ああ、やつとこつちを見たな」

笑いかけると、今度こそロングビルは顔を真っ赤にしてテーブルに突っ伏した。

「ロングビル…いや、マチルダ」

そう呼びかけると、唯一見える耳と頂が深紅に染まり、両手で耳を塞いだ。

籠城戦の構えを見て、俺は一旦攻撃の手を休めて紅茶に手を伸ばした。

「攻撃する時は激しく、引き際は素早く」が戦術の基本だ。カップの縁からチラッと見るとまだロングビル マチルダ は突っ伏したままだ。

「…で、『状況』はどうだ？」

さっきまでのからかいを含んだ声から一転、突き刺すような真剣さで話を促す。

「…本当に勘弁しておくれよ…心臓が悪い。あまり旗色は良くないよ。数の差があり過ぎる。籠城戦でどうかしのいでいるみたいだけど、時間の問題だよ。だけど、どうしてそんな事を調べて来いなんて言うんだい？」

マチルダの最もな問いかけに、俺は手元に視線を落とした。

3日前、王都に出かけて帰ってきたラタリは苛立ちを隠しもせず、荷物も背負ったまま組み立てたM700で野鳥相手に早撃ちをしていた。

低い声でずっとぶつくさ言っていたが、俺が声をかけるとギロリと睨んできた。

「どうした？えらく殺気立っているな」

「…貴族連中は低脳だ。どいつもこいつもてめえの都合で動きやがるからイライラする」

カートリッジを排夾して安全装置をかける。滑らかな動作で分解を終えると、近くの倒木に腰を下ろした。

「…アルビオンがいよいよ潰れるらしい。籠城戦だが血祭りは時間の問題だ。裏づけはとれてないが、昔、皇太子とトリステインの王女が恋仲だったという話もある。近々その王女はゲルマニアに軍事同盟締結の為嫁ぐとさ」

難儀そうな話に俺も眉間に皺が寄る。

絶対ルイズは子犬のようにキャンキャン吠えまくるだろう。

「ん？さっき、誰が何だった？」

「アルビオンのウェールズ皇太子とトリステインのアンリエッタ王女が昔恋仲だったって噂。離れて5、6年だろうな。こいつが皇太子。肖像画だけだな」

「名前までそっくりか。そのうち女王様でも即位するかな？」

軽口を叩きながら荷物の脇に置かれた筒から丸めた紙を広げると、金髪に青い瞳の美青年が描かれていた。絵から伝わってくる雰囲気は温和だ。

実物がいるなら会うのが一番良いが、戦場のど真ん中にいるのではどうしようもない。

絵を戻して、どうしたものかと考えていると、ラタリが落ち着いた声で話しかけてきた。

「プライス、本人じゃないが話を聞ける奴を知っている。あんたの号令次第だ」

「話を聞ける奴がいるなら行こう」

俺の答えに頷くと、装備を整える為に部屋へ戻った。

15分後

合流したラタリと、デビットに出してもらったサイドカー付きのバイクでひたすら道に行く。

「…プライス、あんたは腹立たないか？貴族のやり口に」

変わり映えのしない田舎の風景を眺めていると、エンジン音に負けないギリギリの音量で話しかけられた。

「俺は、はつきり言って腹立ってる。今日、王都で情報屋と接触した帰りだ。脇道で貴族と取り巻きにいたぶられていた親子がいた。俺が咄嗟に貴族の真似して脅さなかったら殺された。それに話を聞けば、真つ当な貴族はごく一部だ。後はどこもかしこも腐ってやる」

そう打ち明けられてやっと、俺はこいつが頭から湯気を立てて帰ってきた理由に至った。

こいつは怒っている。

それも生半可ではない、激烈な怒りだ。

「落ち着け。怒りは一番簡単な原動力だ。だが同時に、自分の目も曇らせる。強い感情は両刃の剣、薬も量が過ぎれば毒だ」
なるべく平坦な声で言外に、冷静になれ、と宥める。

「プライスよお、おめえ、全然驚かねえな。心が震えねえと俺も力出せないんだけど」

銃弾が底をついた時用に持ってきたデルフが鐳の辺りを鳴らして喋るが、話す内容に違和感を感じた。

「どついう事だ？」

「だからよお、おめえさんが言ったのとは逆に、オレは心の震えがねえとタダの喋る剣なんだよ」

「喋る剣かそりや結構だな勝手に喋ってる全くどいつもこいつも……」
「せっかく持ち直しかかったのに、このお節介野郎、いや、このお節介剣め。今度火炎放射器で炙ってみつちり根性焼き直してやる」

「そりややめてー!!」

王都の城壁の少し手前の林の中にバイクを停めた。門の目の前に横付けなんて馬鹿な真似はしない。

着てきた闇に紛れる紺色の服に加え、ラタリはフード付きのポンチヨも2つ持って来ていた。ポンチヨを知らない奴らからすればマントに見えるので、面倒な事になりかかったら羽織ればいい。

「見張りはどうする？」

俺の双眼鏡越しの視線の先には門番が2人、篝火の側にいる。

「あんなの無視。あそこから入る訳がない」

「…おい、どついう意味だ？」

「言葉通りさ。正門は通らない。この時間帯だと門番がやたら絡んでくるから面倒くさいんだ」

だが正門以外に門があるのかと見回すが、全く見当たらない。

見逃したか、ともう1回見直してみるが同じだ。振り向いて文句を

言おうとしたが、ラタリが俺に背中を向けて屈んでいる。

「おい、一体」

「プライス、何してるんだ。早く背中に掴まれ」

「は？」

「聞こえてるか？『早く』『背中に』『掴まってくれ』。…頼む！
そう急かされて質問を飲み込む この習慣のせいで、質問するタイ
ミングを逃す事がある と背中に覆い被さった。見た目は俺達より
も細い癖に力のあるラタリに軽々と 俺としてはかなり傷つく。自
分より細い奴に軽々と上がられるとは 背負われると、「帽子は押
さえておいた方がいい」と言われ、右手で押さえる。

「喋ると舌噛むぞ」と言われて、3歩目を踏み出した次の瞬間、体
に下方向への強烈なGがかかり、思わず呻いた時には

俺は浮遊感と共に、嫌に高い視線 しかも妙な事にどんどん高くな
っていく でかなりの速度で近づく城壁を見て、高速で眼下を通過
していくのを見送った。城壁の内側の街の灯りが急速に近づく
と 周囲より少し高い屋根にちらつと予想した衝撃より軽く着地した。

「プライス、大丈夫か？」

現代と違って灯りに乏しいこちらの世界だが、それでも目の前のラ
タリが「しまった」という顔で、俺の顔を覗き込んでいるのはしっ
かりと見えた。

「プライス、しっかりしろ！親父さん！」

「…誰が親父だ」

さっきまでの衝撃がようやく薄れてきて、掠れてはいるが声が出せ
るようになった。

俺が声を出せた事に安心したのか、ラタリは長々とため息をついた。

10分後、まだ心臓が完全には落ち着かなかったが、屋上から下り
て石畳を歩く。

しばらく歩いていて、どこかの角を曲がると目の前で口喧嘩が繰り広げられていた。

「何だ貴様ら！」

「すいません、ちっと落とし物したみたいで取りに……。お嬢さん、何かあつたんで？」

マントを肩にかけた男が路地から出てきた俺達を誰何すると、俺が右太腿のガバメントに手を伸ばすより早く、ラタリが口を挟んだ。警戒されにくいように、いつもより優しい声で相手の女性に状況を聞く。

ラタリが会話を引き受けている間に俺は路地から抜け出した。男と争っているのは、尻までの長い黒髪と親しみのある顔立ちの女性だ。「聞いてよ！こいつ、あたしの事をスリだつて言うのよ！」

「嘘を言うな！俺にわざとぶつかつて、その隙に財布を取つたらう！」

絶対放つておいたら面倒くさい事になる。

俺の20年以上の兵士の勘もそう告げていた。

「ちなみに財布にはどれくらい入っていたんですか？」

俺が男に質問する脇で、ラタリは少し距離を取つて女性を宥めている。

「80エキュード。財布は腰につけておいたんだ」

「なるほど、なかなかの大金ですな。……少し確認する事があるので待つていてください」

俺がなるべく穏やかな口調で告げると、男は最初の頃より落ち着いた様子で頷いた。

女性と話しているラタリを人差し指で招くと女性に二言ほど言つて俺の隣に来る。

「今度からは親父さんが女性を担当してくれ。……何かわかつたか？」

「盗まれたのは80エキュード。財布は腰につけていたそうだ。そっちは？」

「彼女はこの近くの『妖精亭』の店員だ。近くの店で果物と肉を買

って帰る途中だと言っている。状況的に掏るのは無理だ」

「どういう事だ？」

「山盛りのリンゴを右手、左手に2kgのリュック持った？」

誘導された視線の先には、路面に置かれた丈夫そうな籠に山と盛られたリンゴと、その上に置かれた薄茶色の紙に包まれた塊がある。

女性に断つてからどちらの荷物も持ちあげる。結果、持っていられるが財布を掏るのは

「無理だ絶対無理」

男の方も実地で確かめると、証言に大きな穴があった。

男は「ぶつかって、注意を促したが彼女は無視した」と言い、女性は「マントなんか、最初は羽織ってなかった!」と叫んだ。

俺がどうやって騒動を鎮圧するか考えていると、ラタリがつい、と閉じていた目を開いた。

「……!!」

見た瞬間、寒気が背筋を伝う。

現れたのは1回だけ至近距離で見た事のある「イカレた」眼だった。

「お前、どこの家だ？」

「な、何だき」質問に答える。テメエはどこの家だ？」

ギロリ、という擬音が最適な睨みで男はひいつ、と情けない悲鳴を上げるとどこかの家名を告げるが「偽物だ」と一蹴された。

男が言葉に詰まる。周囲を見回し

「どけえ!」

言う俺に突進してきたが、「知るかよ」と呟いて右足の斜め後ろに左足、両手を軽く握って拳を作ると両腕を上げて、ファイティンポーズをとる。

男の向こう側ではラタリが同情と嘲りを4:6で混ぜ合わせた視線を向けていた。その左脇から女性が腕を掴んで何か言っている。

グローブの下で左手の甲に刻まれたルーンが輝いているのが分かる。

何せ、兵士は常に2つ3つは平行して思考するように訓練されている。

射撃しながら、残弾数、相手の数、仲間の状態、無線からの指示、戦場の变化。そんなもんを20年近くやっていたら1つの事に完全に集中する事が難しい。

男のやけくその拳。腰も入っていないへろへろなのに、女性は両目を覆う。

「本物は…こうだ！」

狙い澄ました左ストレートが男の頬に吸い込まれた。

すぐさま右をガラガラお腹にぶち込むと、続けて左フックでこめかみを打つ。

右と左のコンビネーション、ジャブにフック、ストレート、ヘビーブロー等を打ち込む。

攻撃は十分に重く、回避は素早く、流れるように。

ガンダールブが刻まれる前ですら、パブで絡んできたチンピラを20秒以内でのした事のある拳。それに「武器」と認識したら最後、何でもかんでも武器にしちまう反則ルーンが加わっている。

英国製無敵拳闘士ジョン・プライス！、とか誰かが叫んだ気がする。そんな事をちらつと考えながら、俺は右で鼻をぶん殴り、トドメに左のアップパーで顎を力チ上げた。

意識が完璧に飛んでいる男の脈をとり、生きている事を確認して立ち上がった。

何故か終了を告げるゴングが響き、俺の右手が高く掲げられた。

「男を見下ろすと俺はそう呟いて踵を返した。」

「おお、痛そう。親父さん、何か若返った？」

そう言われて、頬に添えられた手で緩く左右に向かされる。

「んな訳ないだろ。俺のどこを見てそんな寝ぼけた事抜かすんだ」

「動きが実齡を置いてけぼりにしてる」

「たかが大会3位だ。中央の」

「中央で3位?!あの動きで?...イギリス人はバケモノか!」
言われて腹が立ったので頭をぶん殴った。

「痛い!ちったあ加減しろ!」

口の中で唸りながらラタリは俺が殴った場所をさする。その目には、さっきまでのイカれた色は全くなかった。

その事に安心して息を吐くと、ラタリが「げ」とカエルを踏み潰したような声を出した。

「親父さん、こんなところでチンピラ相手にしてる場合じゃなかった!急がないと!」

「何!急げ!」

俺達が3歩目を踏み出したところで「待つて!」と呼び止められた。急いでいる時特有の険のある顔で睨みつけられ、一瞬、声の主は迫りに怯んだ。

「あ、ありがとう!ねえ、ちょっとお店寄ってかない?ご馳走するよ!」

「「すまん今は急いでて無理だ。別の機会によろしく」」
異口同音で同じセリフを完璧に同じタイミングで言い切り、ダッシュしてその場を離れた。

「全く...只でさえ作者はグダグダペースだっというのに」「?」

2分経たないうちに、俺はラタリに背負われて街道沿いの屋根の上を移動していた。

「で、どこに向かってるんだ?」

「『ロンドンまで女王様を見に』」

あるイギリス童謡の一節が呟かれ、呟いた人物、内容、状況に眉間に盛大に皺が寄った。

「可愛くねえ糞生意気な猫が何抜かす。第一、お前は『pussy

cat』なんて柄じゃねえだろ」

「はいはい。この先少しとばすからな。しつかり掴まっておけよ」
俺がその言葉通り、帽子を押さえて掴まると

最初よりかなりきつい下方向への急激なGに目を瞑り、浮遊感に目を開いた。

王宮を取り囲む高い城壁を高高度で飛び越えて結構長い滞空時間の後、王宮の屋根に着地した。

「…こりやすごい」

眼下には現代と比べれば見劣りはするが、街の灯りが煌めいていた。「確かにこりや絶景だ。往復交通費+諸経費を払ってくれる、体重軽いカップル相手に稼げるかな」

「いやいや無理だろ。お前のあの機動じゃブラックアウトするのが関の山だ。それに下手したら不敬罪でコレだろ」

手刀で首筋を軽く叩くと納得した様子で肩を竦めた。本当に残念そうに見えない限り、冗談だったらしい。

「で？誰に会いに行くんだ？」

「マザリーニ枢機卿。『鳥の骨』とか陰口叩かれてるけど、実際は相当な辣腕だ。気苦労のせいか実齡より老けちまつてる事と、ロマリアの人だつていう事を除けば…ここだ。上から2段目」
ラペリングの準備をすると、ゆっくりと降りる。

（まだ仕事してるよ。ご苦労様。プライス、悪いけどこれ使って）
ラタリが足首にロープを引っ掛け逆さにぶら下がったまま、ギリギリ聞こえる音量で状況が報告される。ついでに渡されたのは、シェマグとニット帽だ。

（何でたつて…）

（特徴を隠す為だ。あんたはその髭隠して帽子とフード被ればごまかしが利く。俺はゴーグルかけて髪の毛隠せばいい）

そこまで言うと、口元が開かれたバラクラバと色の濃いシユーティングゴーグルを身につけ、フード付きポンチョを被った。

準備が出来たか確認しあい、ゆっくりと窓に近づく。かなり薄い両

刃のナイフで錠前を外すと、慎重に室内に滑り込んで窓を閉めた。机で書き物をしている男が、一旦ペンを置いて背中を伸ばした。ため息をついたところで、ラタリが背後から口を封じて少し弓なりにそらしながら、自分の肩に押しつけた。

俺は万一に備えてドアの脇に移動していた。

枢機卿は両手でがむしゃらに腕を引き剥がそうとするが、力の差は歴然だ。そうこうするうちにラタリが耳元で囁いた。

「落ち着け。俺達は殺しに来た訳じゃない。話がしたいだけ。頼む、あんたが騒いだら後々面倒なんだ。わかるか？右手で1回で『わかった』、2回は『わからない』」

右手が1回、腕に触れた。

「手を離すから、大声を出さないでくれよ」

そう言つて、口元を塞いでいた手を離す。

解放された枢機卿は椅子に崩れるように座り、呼吸を落ち着かせながらラタリと俺に交互に視線を走らせた。

「...どのような用件で？」

「まずは謝罪を。手荒な事してすまなかった」

はつきり言つて、その時の枢機卿の顔は見物だった。

1本とられた、というより、予想外の行動に口を開けて固まっていた。

ラタリがなかなか回復しない枢機卿にスラングを呟いて肩をすくめた。

「まずは、この国の事を。どこからでもいい。必要ない時は言う」

「では内政から」

いきなりハードルを高く持ってきたもんだ。

ラタリはメモを取りながら、気になる点に突っ込み、枢機卿が答える。

そんな流れの中で彼が懸念を口に出したのは、目の前の妙な2人組に対抗する為かもしれない。

「実は、最近レコン・キスタを名乗る者達の活動が活発化している

んです。それに伴って」

「『お誘い』が来てるって？で、目星はつけたか？」

煮え切らない枢機卿の言葉に、俺がたまらず口を挟む。

「決まっていますか？何故その事を知っているのですか？」

「世の中、早く正確な情報を掴んだ者が勝つだろう？」

Who dares winsならぬWho leads wins、かと心の中で呟いた。

「選出にはいくつもの条件があるが、絶対に必要なのが柔軟な思考、そこそ高い地位が。」

…ラングレーやMIEの連中ならもつと上手く説明出来るんだろうが、俺から言えるのはそれ位だ。

柔軟な思考の意味は、時に汚い手も使うし、情報を流している事を気取られないように立ち回る必要が常に求められる」

「そして引き込む相手の地位が高ければ高いほど、損害も大きいという訳ですか」

後半を引き継いだ枢機卿の顔は実齡より遙かに老け込んで見えた。

蝋燭の灯りが揺らめいたせいもあるが、この男は国の為に自分の血や肉、果てには命まで削り与えているように見えた。

「ホーク、計画変更だ。俺はこいつを助けない」

打ち合わせで決めておいたコードネーム ホークはラタリ、ウルフが俺だ を呼び、俺の考えを伝えた。

「了解。ウルフ、指示を」

「援護だ。内容は臨機応変に考える」

「やれやれ、パラシュートもなしにHALOやらされる気分だ」

目の前で交わされる奇妙な会話に、目を白黒させている枢機卿に向き直るとスパイに使えるような人物の話を聞き、翌日呼び出して俺達も交えた臨時試験を行う事を約束し、来た時同様、窓から出た。

宮殿から帰る道中、俺はかつてのいくつもの作戦のどれよりも、今

回の作戦は難航する予感を感じていた。

翌日行われた選抜試験で残ったのはただ1人。

「グリフォン隊隊長、ワルド子爵」

灰色の髪に長い口髭、羽根つき帽子を被った男だ。

「地位はいいが、まだ若いな」

「ですが、私は風のスクウエアです。諜報活動には最適かと」

「根拠は？」

「『偏在』があります」

「何だそれ？」

「ウルフ、百聞は一見に如かずだ。実際見てみたい。模擬戦でもやるか？」

ワルドも頷いたので、練兵場に移動して模擬戦を行う事にした。

「立会人がいた方が良くんじゃないか？」

何の為に、とは言わなかったがワルドも同意見だったようで、枢機卿の方を向いたが彼の方が上手で、立会人がやって来たが

「…何でつたつて普通に王女が出てくるんだよ。これじゃ暗殺し放題だぜ」

「こんなホイホイ出てくるなんて、この国大丈夫か？」

俺達が頭を抱えていると、ワルドの決意表明を聞き終わった王女が俺達を見て首を傾げた。

「枢機卿、こちらの方達は？」

「この方達は東方からいらっしやっただ「ホークだ。こっちはウルフ。それとこの仮面は見逃してしてくれ。俺達は親しい間柄以外には顔をさらけ出すのは禁忌なんだ」

枢機卿の話途中で遮り口の上手いラタリが話す。

飲み込めずにきょとんとしている王女からラタリとワルドは離れ、

中央で対峙した。

ちなみに、俺達の装備は、M4、ベネリ（ラタリはストライカー）、サイドアームにガバメント、投げナイフ5本に薄い両刃のナイフ2本。

そして俺は野戦服…の色違い。ラタリは向こうで「仕事」をする時に着ていた服。

「では、模擬戦を始めます！双方、存分に力を発揮してください！」
王女の脇に立った枢機卿が右手を挙げた。

ワルドはレイピアを抜き、ラタリはM4を構える。

「…始め！」

その言葉を聞いた瞬間、先に突っ込んで来たのはワルドだった。

レイピアで素早い突きを繰り返すが、ラタリは素早く避ける。まるで風に揺られる柳のようだ。

そして一瞬の隙を突いて、M4が銃弾を叩き出した。

ワルドはギリギリで回避出来たが、髪の毛が2、3本持っていかけた事で目付きが変わった。

「…少々甘く見ていたらしいな。ならこれでどうだ！ユビキタス・デル・ウインデー！」

唱えると同時にワルドが5人に分裂した。

王女と枢機卿も本物を初めて見たのか驚いている。

ワルドは更に、「エア・ニードル」を唱えた。

5本のレイピアが青白い光に包まれる。1人が地面を剣先で撫でると石畳が少し削れた。

「エア・ハンマー！」

「ウインド・ブレイク！」

両端の2人が同時に呪文を唱える。空気の塊と針が飛んでくる中で普通は闇雲に避ける所を敢えて同じ場所に踏み止まるとスレイプニルを発動した足で石畳を踏みつける。爆発音と共に欠片が少し舞い上がり

もう片方の足でより多くの欠片を舞い上がらせると、いつ取り出したのか、ロングメイスのフルスイングを叩き付ける。

まるでクレイモア地雷だ。何回も世話になったが、本物と違つところは中身が鋼鉄製の小さなボールベアリングではなく、固い石という事だ。それでも遥かに硬い金属で目一杯叩かれれば細かい破片が飛び散る。

「Fragmentation grenade《破碎手榴弾》かよ」

建物内部でやられたら最悪だ。思わず顔を顰めた。

ラタリはスイングしてすぐに走り込み

1体にラリアットをかますかと思つたら地面を蹴つて自分の体を回転させて、足で杖を構えていた腕を挟み更に回転を加えて地面に叩きつけた。

すかさず背中へ腕を捻り上げて決めながら、4人のワルドに軽い口調で降伏を促す。

渋る1人の目の前の石畳を銃弾で砕き、薄く硝煙の煙を吐くM4を組み敷いたワルドの心臓にポイントする。

正確に言えば、大動脈だ。撃ち抜けば、瞬く間に胸腔内が自分の血で満たされ、苦痛にのたうち回りながら窒息死するのは目に見える。

ラタリの腕前でずれるなんて事はないが、不用意に動いたら気管支が脊髄、肺の一部をぶつたぎる可能性もある。

「子爵、今ホークが引き金を引けば、あんたの心臓や全身に血を送っている血管がぶつたぎられて、肺の周囲があつという間に血の海だ。死ぬまでの苦痛は相当だぞ」

俺から言うと、4人のワルドは顔を見合わせて、同時に素早く突撃してきたが、ラタリはより早くM4からストライカーに切り替えて連続で撃った。

射程は短いが威力の高い散弾の密集した弾幕。

そこに突っ込んでしまったワルド達は、顔や体などあらゆる所に散

弾が食い込み、痛みに足が止まった所へとどめとばかりにM4でダブル・タップ。

それで4つの死体が完成するはずだった。

ダブル・タップで生命活動が強制停止した直後、4人のワルドの姿がその場で消えた。

「……へ?」「……」

王女、枢機卿、ラタリ、そして俺の間の抜けた声がしてワルドの潰れた声が聞こえた。

「…さっきのが『風の偏在』だ。それに、いつまで下敷きにされていればいいんだ?」

ワルドとの模擬戦の後、銃の性能を見せる為に土メイジの作った大量の的を単発や連射で撃ち抜いて見せた。

「いやはや、東方の技術は素晴らしい!」

枢機卿が興奮して少し血色が良くなった顔で、俺達の銃(勿論、弾は抜いて撃針を抜き、更に安全装置までかけた)を触る。

「これがあの『銃』だとは信じられませんわ」

王女は呆然としていたがやっとその一言を絞り出した。

(そりゃ『火縄銃』や『フロントロック銃』で『最新式』なんだから、そう簡単に頭が追いつく訳はないな)

内心そう思うが、態度には欠片も出さずに挨拶して帰ろうとした。

枢機卿が「賢者殿達を門まで送らないでどうします!私に行きます

!」と笑顔で断固言い張り、護衛にワルドを引きずって 本心に襟首をがっしり掴んで ついてきた。

「おいおい、王女さまは」

「大丈夫です。侍従長がいますから!」

俺が振り向いて全部言い切る前にもものすごく嬉しそうに満面の笑顔でキッパリと言い切った。

「……へ?」「……」

俺とラタリ、ワールドが同時に聞き返すとさっきと同じく、キツパリ
言い切った。

「大丈夫ですとも！今の私には賢者殿達と話をする事が、姫殿下を
送るよりもずっとずっと重要です！それと、私の事はマザリーニと
呼んでください」

「……こりゃ相当変な方向にブツ飛んだな」

「ah - , s h i t .」

「……」

俺が結構きつい頭痛に頭を抱えている脇でラタリはげんなりした顔
で腹をさすり、ワールドは硬直している。

「さあ、賢者殿！門までお送りさせていただきますい！」

笑顔でそう言っただけで先に歩き出したマザリーニの後ろをノロノロつい
ていきながら、ようやく復活したワールドに聞いてみた。

「……元からあなののか？」

「……さあ？……あの、枢機卿？そちらは遠回りではないでしょうか？」
上司の突然の変わりぶりに恐る恐る声をかけるワールド。

「……はい？」

「何でもありません私の勘違いです申し訳ございません」

満面の笑顔で振り向いただけだったが、身長も肩幅も筋肉もあるワ
ールドが青白くなって冷や汗をかきながら謝った。

ラタリと視線が合ったので、俺は目をくるりと回し、ラタリは口元
に本当に微かな笑みを浮かべて首を振った。

案内された先はマザリーニの執務室だった。

部屋の外で、ワールドに「サイレント」をかけるように命じて入った
ので俺達も続く。

部屋のソファークッションにマザリーニと俺は腰かけ、ラタリはどこか
ら不意打ちされても素早く対応できる位置に立つ。

いないのかと勘違いする程の気配の薄さ。

そんな事をちらりと考えていると、マザリーニが紅茶で唇を湿らせ

てから口を開いた。

「ウルフ殿、ホーク殿。私はあなた達が少なくとも東方の人間とは考えにくい。そう…東方よりもっと遠い場所からだと考えています」いきなり切り込んだ事には驚いたが、予想していた事なのでそんなに取り乱す事もなく、答える。

「フム…Yesでもあり、Noでもあると言っておこう。俺達は流れの傭兵団だ。元いた場所は需要が枯渇、やむなく旅をする事になった。今は学院にいるから連絡はそちらへ頼む」

「……わかりました」

マザリーニがしっかりと頷き、右手を差し出した。

そして俺はノーメックスの手袋を外して握手した。政治家にはかなり珍しい、しっかりと握手だ。

正門を飛び越え、街の屋根の上を移動するラタリに背負われ、学院まで帰ると幸いにもルイズに抜け出した事は気づかれていなかった。

Back to Day 7

side：“ソープ”・マクタヴィツシュ

馬車の御者席に腰を下ろして手綱を握る俺は、暇つぶしにコルベールに元いた世界の話をしていた。

「ほおー、あなたは“たすくふおーす”の隊長だったんですか」

「前はな。SAS、グリーンベレー、デルタフォースを初め、ありとあらゆる特殊部隊から凄腕の奴らが集められていた。おまけに三癖も四癖もある連中だな、俺も苦労させられたよ」

話しているうちに思い出してきて、ため息をつきながら苦笑する俺を見てコルベールは笑った。

「ハハハ、それは大変ですね」

「おいおいコルベール、笑い事じゃないんだぞ。ロー……ゲイリーだつて一員だつたんだ。ま、例外だけだな」

「“げいりー”？」

馬車の荷台から外を眺めていた、ローチ、本名、ゲイリー・サンダーソンが振り向いて小首を傾げた。

「大尉、どうしました？」

たつぷり10秒は固まっているコルベールを放っておいて、何も無い事を伝えた。

「……名前が一致しないんですが？」

「まあ、コードネームと本名が一緒の奴はそうそういないんだ。俺はミドルネームが“ソープ”だから、昔は何かあると『ソープ!』って呼ばれてたよ。昔って言うてもたつた5年前だ。今じゃ、プライスしかない」

自分で知らないうちに弱音を吐きかけている事に気がついて、誤魔化す為に地図を手を取った。

「コルベール。そろそろ第1ポイントに到達するみたいだ。荷物取ってきた方がいいぞ」

「わかりました……マクタヴィツシュさん」

呼ばれて振り向くと、どこかこみ上げる苦い物をこらえているような色の目と、視線が合った。

そこで察知出来たのは、本当に偶然だった。

御者席から荷台に飛び下りた直後、俺がさっきまで座っていた場所を炎の塊が通り過ぎた。

「！」

「待ち伏せだ！」

荷台に伏せている俺達の上の幌が魔法によって切り裂かれ、焼かれる最中、馬の断末魔の鳴き声も聞こえた。

「畜生！何だつてんだ！」

荷台越しに射撃しながらデビットが叫び、マイクも叫んだ。

「俺が知るかよ！」

「デビット、スモークをありったけ出せ！」

「了解！」

一旦M4を置くのと煙幕手榴弾のピンを引き抜き、放り投げていく。3個目からはコルベールが見よう見真似で手伝い始め、辺りにはかなり濃い煙幕が立ちこめた。

「Move! Move! Move!」

全員を急ぎ立ててその場を全速力で離れ、ある程度離れたところでデビットが右手を光らせて召喚したのは

「……」

「……」

「……」

「……」

「「よりによってエイブラムスかよ！」」

俺とマイクがツツコんだ。

「あの…何ですか、これ？」

コルベールの問いかけに俺達は滑った。

「ありやりや。…えと、これは僕達の世界で主流のM1エイブラムス戦車。動く砲台って言えば…って大尉、どうしたんですか？顔色悪いですよ？」

「すまん…嫌な事思い出した」

ギリースーツを着た2人組がヘッドショット連発しながら軽やかな足取りでどこかへ去っていく姿が脳裏に浮かんだ。

「………ウン時間もプリピヤチの話聞かされたせいかな？」

「バランスブレイクだけど…死にたくないから使おう」

「了解。マクタヴィッツシユ大尉は車長をお願いします。あとは…これでどうにかなるでしょう」

マイクが左手をひらひらさせて最初に乗り込み、ローチ、デビットと続き、最後に俺とコルベールが乗り込み、ヘッドセットとEOT

Vボディーアーマーを着けた。

操縦席ではぼ仰向け状態になっているのはデビット、砲手はローチ、装填手はマイク。

ガスタービンエンジンが始動し、キャタピラが力強く動き始めた。車外カメラから送られてくるホワイト・ホット画像を食い入るように見つめて索敵、ついでにコルベルにも手伝ってもらうと目を輝かせて喜んでいた。

統制がとれている目や手は多ければ多いほど有利だ。

「マクタヴィツシュさん、前方100mの林の中に10人隠れています！」

「この距離で外す方が難しいですよ。ま、相手の出か」
バチン！

マイクが喋っている途中で、車体のどこかに魔法が当たった音がした。

「やったな！英国軍人舐めとんのかゴルア！？ローチ、撃て！」
完全に目の色が変わったマイクの指示にローチは「…………え」と固まっている。

「先制攻撃されたしな。発砲を許可する」
俺がそう言っている間にも、バチン、バコン、ボンと車体に魔法が当たる音がする。

「…音から察するに、主に火と風属性のようですね。土属性なら、地面を持ち上げるかして、バランスを崩した所を狙えます。水なら泥沼を作るでしょう」

車体を叩く音に耳を澄ませていたコルベルが相手の属性に予想をつける。

「…………ローチ、威嚇射撃だ。頭上をギリギリ越すか足元ギリギリに着弾させて、『丁重に』お帰り頂こう」

デビットが少し考えてから「丁重に」を強調しながら発言した。

「どっちもギリギリだな」

「本当はブチ当てると言いたい所を譲歩した」

「それは言わない方がかつこよかったな」

マイクとデビットがヘッドセットを外して言い合っている脇で、車外放送に切り替えた無線機のマイクを握る。

話す前に、プライス直伝の鉄拳制裁で2人を黙らせてからスイッチを入れた。

《こちらはTF141副指揮官、マクタヴィッシュだ。貴殿らの攻撃の理由を明らかにされたし。

理由が不当であると判断した場合は、こちらも相応の攻撃を行う》
「…流石にこれだけ言えば何か言ってくるだろう」

スイッチを切つて息を吐くと、鉄拳から復活したマイクとデビットが振り返つて俺を見た。

コルベールも心配そうな顔で口を開く。

「何も言つてこなかったらどうします？」

その問いかけに、マイクとデビットがニヤリと笑つと、「撃つしかないでしょ！」とピタリ息を合わせて答えた。

8秒後、「バコン」と魔法が車体を叩いた。

「やれやれ、一言くらい言つてくれないだろうがよ！仕方ない、撃て！」

俺の号令で照準を合わせておいた主砲、120mm滑腔砲が火を噴いた。

因みに砲弾は通常弾だ。劣化ウランとか後々で問題が出てきそうな物騒すぎる物を使う訳にはいかない。

狙い通り、地面へ着弾。突然地面に大穴を開けたので相手はかなり飛び上がった。

「おー、ビビつとるビビつとる」

「ザマアwww」

「…頼むから大人しくしてくれ」

どちらへ向けたとも言えない言葉を呟き、カメラの画像を睨む。

「…マクタヴィッシュさん！大型のファイヤーボールです！」

コルベールが叫び、直撃すると思いきや

「フレアアウト！」

デビットのかけ声と共に右斜め前方にフレアがばらまかれた。熱誘導だったらしいファイヤーボールは戦車よりも目の前を横切ったフレアに食いつき、爆発した。

「Yes！」

成果にガッツポーズをするデビット。

「仕方ない。…威嚇射撃中止。これより攻撃する」

そう言つて、俺がローチと場所を代わり照準を合わせると、一瞬祈りに似た何かを考え、次の瞬間にはきれいさっぱり吹っ飛ばした。

「Fire！」

ヘッドセット越しでも一時的に聴覚が麻痺するような発射音と強烈な反動があるが、ブレイキの効いたエイブラムスはほんの少し後ろに下がっただけで、ほぼ全てを受け止めた。

「うう、耳が…」

「先生、大丈夫ですか？」

「何だつて？」

「『先生、大丈夫ですか』って聞いているんです！」

「『何真面目に漫才やってんだよ！』」

「ピーチクパーチクうるせえええ！」

収拾がつかなくなる前に俺が声を張り上げた。

ホワイト・ホット画像では生存者は確認できず、ハッチから頭を出して目視でも周囲を確認した。

「…Clear！」

俺がそう言つて車体を叩いて、周囲を警戒しているとコルベール、ローチ、デビット、最後にマイクが出てきた。

「いやはや…何とも凄い物ですね。まだ耳がよく聞こえません」
「やっぱりどこかズレているコルベールに俺達は安心した。」

襲撃者達がいた林へ進む時、俺達ははつきり言って躊躇した。

「コルベールにはきついんじゃないか？」

「フーム…」

俺が何の気なしにタクティカルベストに手を突っ込むと指先に乾いた感触が触れた。

引っ張り出して見ると、ごく普通の紙を4つ折りにしてある。

開くと、中にはこう書いてあった。

「ソープ、これから書いてある事はラタリが収集してきた情報を基に書いている。」

コルベールについて、お前は違和感を感じた事はないか？俺はある。ラタリの情報を聞くまでは、違和感の正体がわからなかったが、今は確信がある。

コルベールは、元軍人だ。

それも俺達に似た特殊部隊の、恐らく隊長クラス。

滅多にないと思うが、フィールドワーク中に襲われたりした後、様子がおかしかったり、なりそうなら、うまく丸め込んで引き返せ。

《プライス》

「どこまでが本気なんですか」

思わず手紙に突っ込むと、両脇からガードがてら覗き込んでいた2人も頷いた。

「さて、どうするかな…」

俺が悩みながら視線を向けた先では、ローチとコルベールが馬車の残骸を見ながら喋っていた。

「コルベール」

俺が呼びかけると振り向いた。目に異様な光や揺れは見られない事に少しは安堵したが、まだまだ安心は出来ない。

(?...何故、冷や汗が出てくる)

まさか…

「慣れてるってか？」

マイクの一言にコルベールは目を見開き、僅かに後退りした。

「！？何故」

「『イーグルアイ』はお見通しなんだよ」

「……………は？“イーぐるあい”？何ですか？…もしか新しいマジックアイテムですか？」

たっぷり20秒は固まり、次に知識欲が顔を出している姿はいつもの姿だった。

どうやら『こつち』に引きずり込む前に戻れたらしい。もしくは自分で気づいて戻ったのか。

「後で話す。で、どうなんだ？無理なら「いえ、大丈夫です。行かせて下さい」

しつかりした受け答えに、ひとまず落ち着いた事を確信した。

例え一時の小康状態だったとしても、喜ばしい状態だ。

「わざと試したのか？」林に近づきながらマイクに尋ねる。あの言葉がああタイミングで出たのはそうとしか考えられない。

「ええ、すみません。でもそうしなきゃ確かめられなかったでしょう？」

曖昧に頷くと後ろに続くローチとコルベールを肩越しにちらっと見やり、前進の合図を出した。

頭上を木々の生い茂る枝葉に、足元は雑草や下生えに覆われた林は昼間でも不気味に静かだ。

M4につけたサプレッサーとHBS（ハートビートセンサー。心臓の鼓動をセンサーが捉え、手元のディスプレイに表示する）には何の反応もない。

しかし、しばらく足を進めるうちに不意にローチが立ち止まり、最後尾のマイクがうつかりぶつかり、揃って前へつんのめった。

「おいおい、どうした？」

倒れた2人を引き起こすと、ローチが口を開いた。

「大尉、この先に何か動物がいます。僕の右手も反応してます」

「ほう？種族とか分かるか？」

「いえ、そこまでは…すみません」

そう謝るローチの肩をマイクが叩いた。

「いや、お手柄だぜ、おチビ」

途端に頬を膨らませたローチが睨むが、蛙の面に水状態で流される。

「…おい、どうして『人間じゃない』って分かるんだ？」

「僕の右手のルーンは、プライス大尉の『解析』では『動物を自由に操れる』そうです。実際試してみたら、鼠からドラゴンまで出来ましたよ」

「ああ、だから学院の鳥が編隊飛行してた訳か。何かおかしいと思っただよ」

「よし、それなら援護を頼む。一気に畳みかけるぞ」

「スタンバイ…3、2、1！Go！Go！Go！」

俺の声を合図にローチとコルベールが飛び出す。

「捕まえた！」

ローチの声に続き、戦闘機並みの轟音が辺りを揺るがせた。

「何だよこれ！？」

「大尉、ちょっと待ってて下さい！…頼むから大人しくしてくれ！」

ローチが右手を翳しながら絶叫し、轟音が止んだ。

「耳がおかしくなっちゃまうところだったぜ」

「…マクタヴィッシュユさん！見て下さい！」

コルベールの声に急いで行き、目の前に広がったのは

かなり大きい穴 直径100mはあるだろう の中に4頭のドラゴ

ンがうづくまっっている光景だった。

「どうした、って……………」

「……………」

全員が硬直しながら穴の縁から見下ろしていたが、一番早く復活したのはローチだった。

「…大尉！早く助けないと！」

「だがどうすればいい？」

《……………それには及ばぬ》

突然、低い男の声が空気を震わせた。

M4やミニミを構える俺達と杖を構えるコルベールが自然と背中合わせに円陣を組んだ。

「誰だ！ゆっくり出て来い！」

《お主らの目の前におるだろう？》

「へ？」

5人で顔を見合わせて、恐る恐る穴の縁から覗くと、穴の中にいるドラゴンは全部こつちを向いていた。

そして、俺達は情けない事に悲鳴を上げた。

「…ウワーー！！！」

「フニャー！！！」

ドラゴン達は自力で穴から出ると、襲撃されるまでいた道の近くにある草原に降り立った。

地面に座って前脚も折り、俺達との距離を縮めると問いかけた。

《お主達は何者だ？》

1時間以上はかかったが、この世界に来た経緯や召喚された事から、先ほどの突然の襲撃まで話した。

話し続けて乾ききった喉を水筒の水で潤し終わると、待っていたよ

うに1頭 コルベールから伝説級の存在の“韻竜”だと教えてもらった が口を開いた。

《先ほどの攻撃から我らを助けてくれたのはお主達だったのか。助けてくれた事に感謝する》

「襲われた事に何か心当たりはありますか？」

ローチの問いかけに、竜達は首を横に振った。

《全くない。本当に突然だった》

そこへ、襲撃者達の死体を見分してきたデビットとコルベールが戻ってきた。

「おかえりなさい！どうでした？何かありましたか？」

ローチが声をかけるが表情は明るくない。

「いや、何にも。ま、あってもあんなになつてたらわからんけどな。何となくわかつていたのでそんなに落ち込みはしなかった。」

「ですが、全員の財布を調べたら1人1000エキューも持っていないんです」

次のコルベールの発言に俺達の目が懸念を帯びて見交わされたが、

「1000?...んー、ポンド換算で幾ら？」とローチのズレた発言に、俺を含めて3人がズツこけた。

「あー、もう！ドル換算も出来ないつてのにポンドなんて無理だろ！？」

「あ、そっか」

「あ、そっか」じゃねえよ！全く...」

《ハハハハ、仲が良いなお主達は》

ローチ、デビット、マイクの掛け合いに竜達は楽しそうに笑っていたが、俺は財布に1000エキューも持っていた襲撃者達の事を考えていた。

一体、誰が、何の目的で？

あんな大金を出して、韻竜を襲わせるだけ？

(学院にこのまま帰ってプライスに相談しよう)

無線で連絡を取り、学院に帰る事を伝えたが馬車は襲撃された時に

ポロポロになってしまったので、デビットがハンヴィーを出した。乗る前にローチが振り向いて竜達に心底心配そうに声をかける。

「これからどうするの？同じ場所にいるのは危ないよ」

《それはそうだが…》

「どこかにアテはない？」

《全然》

「…許可は取らなきゃならないだろうが、学院に来ないか？」

《学院？お主達は…『メイジ』なのか？》

俺の一言にそう返してきた竜達の声は震えていた。

無理もない。さっきまでメイジに襲われていた上に、俺達が襲撃者以上の攻撃力を示し、殲滅したんだ。ビビらない方がどうかしてる。

「え？僕達がメイジ？アハハハ！全然違うってばー！もー、やだー！」

ローチはケラケラと笑っているが、嫌味ではなく、純粹におかしかったんだろう。

だが、その笑い声は不快ではなかった。

「本当に俺達はメイジじゃないさ。普通は杖握って呪文唱えれば何か発動するよな？」

「え？ええ、まあ、そうですね。でも杖とは『契約』しないとけないですし、属性の事もありますし…」

《……いや、もう良い。お主達がメイジではない事はよく分かった》

「何で？」

ローチのきよとんとした顔を見て、竜が説明を始めた。

《普通、メイジは貴族だからな。傭兵になれば多少は違うが、態度や仕草に現れるものだ》

「そんなもん？」

《そんなもんだ》

一向に進まない話にも、俺はイラつきながらも質問した。

「とりあえず、本題に入らせてくれ。来るのか、来ないのか？」

《フォーム……お主達が助けてくれたのだ。我らはずいてゆーぞ。世話になるぞ》

「いやったー！よろしくね！僕は」

「ローチ！自己紹介は後でいい！さっさと乗れ、置いていくぞ！」
わざとそう言つと、本気と受け取ったローチが慌てて走ってきて飛び乗った。

side: プライス

俺はソープから無線を受けて、オスマンに許可を申請する為学院長室へ向かった。

ノックしてドアを開けると、こちらへ背中を向けていたオスマンが振り向いた。

「オスマン、話がある。ミス・ロングビルはそのままです」
そう前置きしてから話し始めた。

「ふむ…韻竜とはちと厄介じゃな。彼らは“生きる伝説”とも言われておる」

「人の言葉を話すつて事と姿を変える魔法の事は聞いている。他には？」

「いや、相当な希少種という事を除けば、それで全部じゃ」

「そいつらを学院の近くに住まわせるつもりだ。少なくとも防犯にはなるぞ。何せドラゴンだからな」

「…まあ、いいじゃろ。許可証を出す」

「ありがとう。それと、ロングビルを怒らせたくなかったらこいつを引っ込めろ」

俺が床からネズミの首筋を摘んで左手で突き出すと、ロングビルが短い悲鳴を上げて右腕へしっかりしがみついた。

「ワシの数少ない楽しみを奪うのかね、プライスや」

指先のネズミはしきりに暴れるので床に下ろしてやった。

「少なくとも脳みそぶちまけるよかマシだと思っただが。それに秘書に逃げられるぞ」

「かーっ！それ位でカツカしなさんな！」

右側から何か恐ろしい気配が立ち上りつつあったが、ロングビルの両肩を掴むとその場で180°ターンさせて学院長室から連れ出した。

ロングビルの左肩をしっかり抱き寄せたまま、しばらく無言で歩き続けた。

「プライス？一体どうしたんだい？」

呼びかけに振り向きながら、そっと肩から手を離し1歩後ろへ下が

る。
「大変だな。何なら秘書辞めて俺達のところに来るか？休みは不定休、時間外労働が盛りだくさん。おまけに死ぬ確率はここより遥かに高いし、戦争神経症はまず間違いない。最悪にも程がある職場だ」
提示される条件に目を白黒させているロングビルの肩を軽く叩いて、真面目な顔を一变させて笑顔を見せる。

「……冗談だよ。学院にいればある程度は安全だ。それに、戦争なんて最悪だ」

悲鳴、怒鳴り声、銃声、爆発音。

物言わぬ死体からじわじわと広がる、紅い命の証。

火薬と人と血の焦げる匂い。

日々すり減っていくまともな神経。

顔見知りの兵士が、紙のように白い顔で棺に横たわる。
慟哭する遺族。

「……イス……プライス！しっかりして！プライス！」

ロングビルが血相を変えて俺の胸倉を掴んで揺さぶりながら叫んでいた。

こめかみと心臓が恐ろしい速度で脈打ち、喉は何かの塊が押し込ま

れたように声が出ない代わりに、喘息持ちのように喉鳴りがしている。

気がつくとも脇の下や掌、額に夥しい量の汗をかいていて、自覚した途端に足元がふらついた。

「いきなり何事だい？」

「……………何でもない。ちよつと、気分が悪くなってきた。休めば良くなるぞ」

そう言つて何歩も歩かないうちによろけて膝をついた。喉元に酸っぱい胃液が込み上げてきている。

「ああもう、言わんこつちやない！こつちだよ！」

背中をさすられ、ようやく回復すると手を引かれてどこかへ連れていかれるようだ。

一番近くだった厨房の裏口を開けると、コック達やマルトーが振り向いて一瞬ざわめいた。

「プライス！一体……」

「どうした」と聞く前に、俺の隣にいるロングビルに気がついて口を閉じた。

「先輩！一体どうしたんですか？！」

厨房にいたデイニスが顔色を変えてすつ飛んできて、俺の肩を支えて隅のテーブルまで連れて行った。

長椅子に座ると、シエスタから陶器のコップに入った湯冷ましが差し出されて少しずつ飲む傍ら、デイニスがロングビルに状況を聞く為に外に連れ出した。

「プライス、一体何があつた？ひでえ顔色だぜ」

「……ちよつと、ろくでもない事思い出しちまつた。落ち着いてれば良くなるぞ」

些細なきっかけで顔を出す、神経と心を蝕む戦争病。じわじわと時間をかけて害し、決して『完治』はしない。

ただ、身を潜めるだけだ。

「只今戻りました」

しばらくしてからデイニスがメモ帳片手に帰ってきた。

「おう、おかえり！何か分かったか？」

「それが、よくわからないんですよ。ミス・ロングビルは話をしていただけだつて言ってますし」

「それは本当だ。…マルトー、心配かけたな。もう大丈夫だ。シエスタ、ありがとう」

裏口から出ると少し歩いた場所で声をかける。

「ラタリ」

静かに現れたラタリは、俺の顔を見るといくらか緊張を解いた。

「プライス、酷い顔色だ。そんな顔色だと誰かが『キャーオバケ』つてひっくり返るぞ。誰か気絶させる前に少し横になって来てくれ」
内容と仏頂面のギャップに思わず笑ったが、やっぱり酷いらしい。
忠告通り、少し横になる事にした。

side:ゲイリー・“ローチ”・サンダーソン

「何か久々に帰ってきた気がする」

ハンヴィーから降りて、周囲を警戒しながらそう言うと、右隣のマイクも苦笑いしていた。

「俺もそんな感じがする。でも、こっちに来てまだ1週間しか経ってないんだよな」

2人揃ってため息をついていると、ついてきた竜達がゆっくり着地した。

「ここで落ち着けるといいんだけど」

《いや、何とかなるだろう。学院長とお主達の隊長にも礼を言わなくてはな》

「コルベール、すまなかった。せつかくのフィールドワークが散々

な事になって」

学院までの道を歩きながら、大尉がコルベール先生に謝っていた。

「とんでもない！貴重な体験をさせて頂きましたよ」

先生はニコニコしていたけど、やっぱり申し訳ない気持ちがある。

正門をくぐり、学院長に報告した後でルイズに「ただいま」と挨拶したが、鳩が豆鉄砲食らった顔をして僕達を見ていた。

「？ミスタ・コルベールのフィールドワークと一緒に行ったんじゃないの？」

「行ったのは行ったんだけどね……」

説明中……

「という訳」

「…そう、だったの」

相当ショックだったみたいで、ルイズちゃんの顔色は悪くなっている。

「ルイズ、部屋で少し休んだ方がいい。先生には話しておくから」

「うん……」

普通なら絶対、頬を膨らませて抵抗するのに大人しく頷いたので、逆に僕達が驚いた。

気を許してくれているのか、抵抗も出来ないほどショックだったのか。

「…ゲイリー」

「ん？どうしたの？」

小さく細い声だったけど呼ばれたので、目線を合わせる。

「……」

何故か抱きつかれた。

「ルイズちゃん？どうしたの？」

理由がわからなくて、でも、そつとストロベリーブロンドの髪の毛を撫でる。

「強くなりたい」

不意に聞こえたそんな言葉。ほんの少し首を回して見るけど、髪の毛

毛に隠されて表情はわからない。

「私、強くなりたい。強くなって、みんなを守りたい」

「…ルイズちゃん」

僕はどう言えばいいんだろう？

ありがとう？

大丈夫だよ？

僕達が強くなるから？

無理しないで？

でも、僕は何も言わなかった。

ただ黙って、ルイズちゃんの気が済むまで髪の毛を撫でていた。

閑話〜甘い物話〜

夕食後、食堂から出てきたルイズちゃんを厨房へ案内する。

コック達やマルトーさんに挨拶しながら脇をすり抜けて隅のテーブルに座ってもらって、すぐに温かい紅茶を差し出す。

状況が飲み込めてないルイズちゃん、隣には甘い香りを嗅ぎつけたキュルケちゃんとタバサちゃんに、何故かロングビルさんもいる。

1人分離れて、コルベール先生とプライス大尉、マクタヴィツシュ大尉。僕はマクタヴィツシュ大尉の隣に座る。

そして、焼きたてブラウニーのアイスクリーム添えがサーブされると女性陣は目を輝かせた。

見た目も完璧で、温かいブラウニーに冷たいアイスの組み合わせはハルケギニアにはないらしい。

ルイズちゃん達のみならず、僕達12人と厨房のコック達まで唸ら

Day7 変化は唐突に (後書き)

あとがき

読者の皆様、「ルイズと現代の兵士達を会わせてみました」を読んで頂いて、ありがとうございます。

今回、7日目がかなり長くなってしまい、とても読みにくかったと思います。申し訳ありません。

原因は

- ・アルビオンや色々な戦いへの布石
- ・プライス達の精神面に考慮(戦闘ばかりだとシエル・ショックやらPTSDになるので)
- ・キャラ崩壊
- ・著者が登録している某サイトで提供して頂いた話や絵など色々あります。

要は詰め込みすぎたって事です。

それに加えて、この章はしつこい程に加筆修正を繰り返しています。加筆修正に関しては、これからも続くと思います。

筆下手ではありますが、これからも頑張っていきます！

どうか優しく見守っていてください！

感想や指摘は随時受け付けております。

でも批評は勘弁して下さい！

最後に、某サイトで知り合いました絵師様へ。

数々のお話や絵の提供、ありがとうございます！

あなたの描かれるホンワカする絵やお話が無かったら、この小説も

味気ない物だったと思います！

この場を借りて、厚くお礼申し上げます！そして、これからもよろしく願います！

Day8 行幸 (The Emperor's Visit) (前書き)

今回の章は、思いつきりお偉いさんをコケ、というかボロクソにする発言を連発してます。

読者の方々の中には、とんでもなく不愉快に思われると思いますが、ご容赦下さい。

Day8 行幸 (The Emperor's Visit)

side: サイモン・“ゴースト”・ライリー

その日はいつもとちよつと違った。

俺とマクスウエル 階級は大尉だが、俺と同じ年だそうで階級抜きで呼んでくれと言われた がルイズの付き添いで、授業に耳を傾けている。

正直、俺の髑髏模様のバラクラバは注目を浴びているが、プライス、マクタヴィツシュからは何も言われていないので着けたままだ。

「私が“疾風”のギトーだ。今日は諸君らに、風が何故、“最強”と呼ばれるかを伝授しよう」

(面倒くさい前口上だな。やるならちやっちやとやれっつーの!)
きつい事を言うマクスウエルのツツコミに、俺は笑いを堪える為に少し下を向いて、歯を食いしばった。

「ミス・ツエルプストー。君は《火》が得意だったな? 私にぶつけてきたまえ」

キュルケが思わずカチンとくる挑発に乗って、目つきが鋭くなったが

「ミスタ・ギトー! 授業中ですが失礼しますよ!」

コルベールの登場にコケた。

「あー、もう…一体何事ですか、ミスタ?」

「学院長から通達です。本日、アンリエッタ姫殿下がゲルマニア訪問の途中で学院へ行幸なさるそうです。よって、本日の授業は全て中止となりました」

「うわ、当日準備して本番つてのが一番面倒くさいのに」

「せめて1週間前とかに予告してよー。準備とか準備とか準備とか大変なんだから」

俺達がゲンナリして呟くとルイズが、「準備しかないじゃない」と突っ込んだ。

「何言ってるの。準備が一番大変なんだよ。次が片付け、3番がシラけきつた座を盛り上げる事。俺なんかその無茶ぶりを何回させられたか…」

マクスウェルが何か嫌な事を思い出したのか、静かに深いため息をついた。

「…わかりました。なるべく早く片付けます」

コルベールが退出した後、ギトーは風の最強呪文「遍在」を実際に見せてくれ、授業はそれで終わった。

数時間後

画面越しに見える、学院への道を進んでくる馬車2台と、幻獣に跨り黒マントを翻す男達。

馬車の片方は金、銀、白金を使った一角獣と杖のレリーフに、牽くのも一角獣。

「こりやまた、随分派手だな」

「目立つ事による暗殺の危険性を度外視してるな。俺達の常識はこちの非常識か？」

UAVからの映像に俺達は辛辣だった。

そして王女の馬車が到着して、降りた美女が笑顔でにこやかに手を振っている。

一応、俺とマクスウェルがルイズの脇にいるが、マクスウェルはキユルケに絡まれかかり、俺はタバサにビビられている。

そしてルイズは、何故か頬を染めてうっとりした眼差しを誰かに向けている。ルイズの頭越しにマクスウェルと目が合うと、視線を辿る。

いたのは羽根付き帽子を被り、グリフォンに跨った男だ。腕に自信

があるような面構えで、確かに美男だ。だが、俺の悪戯心が火を噴いた。

「ああ、自信が服着て杖持つて頭に羽根付けて歩いてるあいつね」俺の一言にマクスウエルのみならず、無線の向こうが爆笑に包まれた。

「お前……！ブハハハハ！」

「クソ……俺、あいつの羽根、見ただけで……ブクククク」

「死ぬ。マジで腹痛え」

校舎の裏で俺達10人が思い思いの体勢で笑い死にしている脇で、プライス、マクタヴィツシュ、ラタリが腕組みして立っている。

よく見れば、プライスは両肘をしっかりと掴んで真一文字に結んだ口元をヒクヒク震わせ、マクタヴィツシュは少し俯けた顔を真っ赤にして全身を震わせ

ラタリはかなり引きつった怖い笑顔のまま、こめかみに太い筋を浮かべている。

普通に見たら、爆撃から600m内の危険地帯にいるような危険極まりないメンツだが、全員共通で笑い転げているので怖くない。

「……あ……しつかし何年ぶりだろ、こんなに腹の底から笑ったの」目尻に浮かんだ涙を白い細い指で拭いながら、ラタリが笑顔で言う。

そして、ルイズは昼間に行幸を見てからずーっとボーッとしている。そして、ルイズは昼間に行幸を見てからずーっとボーッとしている。

部屋でもフラフラして、書き物机の前の椅子にかけたと思っただらべツトに腰かけ、来客用の椅子に腰かけ……

「ルイズ、いい加減に落ち着けよ」

頭を抱えたマクスウエルがそう言ったが、ちよっとするとまたウロウロ。

ドアがノックされたのは、そんな時だった。

マクタヴィツシュがM4を構えながらドアに近づき

《ラタリだ。開けてくれ》

「フエンリル」

《テュール》

ドアを開けた向こうにいたのは、ラタリとプライスともう1人。

灰色の髪に青白い顔の老人がいた。

ルイズの部屋ではなく、俺達が使っている部屋へ入ると、流石にしぶれを切らしたマクタヴィツシュが問いかけた。

「ラタリ、プライス。そちらの方は？」

「マザリーニ枢機卿だ。この国の頭脳と心臓と言っても過言じゃない」

「…そんな凄い人が、どうしてここに？」

ゲイリーの質問も最もだ。そんな奴がどうしてここにいいのか。そしてどうして、ラタリとプライスが知り合いなのか。

「ラタリ殿とプライス殿は機密性の高い、ある作戦の立案者です」

「簡単に言えばスパイを潜り込ませて、こっちの情報と引き換えに、向こうの情報を得る。その選抜を担当した」

「それで、何がわかったんですか？」

マクタヴィツシュが問いかけて、枢機卿が答える。

「レコン・キスタは共和制を語り、現在はアルビオンで王党派と戦っています。レコン・キスタの総大将、オリヴァー・クロムウエルは自らを《虚無の使い手》と公言しています」

「《虚無》ねえ…実際に見た奴はいないんだろ？、その口ぶりだと」

俺が突っ込んで聞くと、枢機卿は肩を竦めた。

「ええ、何ともお恥ずかしい限りですが。何分、途絶えてからかなり経つ伝説の属性なので資料もなくて」

「仕方ない。ないなら、現地で集めるだけだ」

そう言つて閉じていた瞼を開いたプライス大尉の目は完全に冷徹で老練な兵士の目だった。

「…そうだ！忘れる所でした。これを」

枢機卿が取り出したのは、猛々しく翼を広げた鷲が彫り込まれた銀色のメダルと羊皮紙だ。

さながら、メダルは部隊章、羊皮紙は何かの許可証か。

「私の権限を使って、新設隊にあなた方を任命します」

プライスが本職の騎士の如く優雅に頭を垂れた。

唐突にルイズの部屋への入り口に近いラタリの顔が険しくなつて、目の前にいるにも関わらず感知出来る存在が希薄になってきた。

「プライス、お客さんが2人。手前のはヒール履いている。奥の方は下手くそだが忍び足」

「聞いたな。構えろ」

プライスの指示にドアの両脇にへばりついてタイミングを待つ。

「ヒール、カウント5で到着」

「先輩、ルイズはどうします？FF（フレンドリーファイア。友軍による誤射）なんてなつたら最悪ですよ」

一瞬口ごもった時

ドアがノックされた。

初めに長く2つ、次に短く3つ。

ハッと我に帰つたルイズがドアへ駆け寄ろうとしたが、俺達の方が早かった。

ドアを開けて、目の前の黒ローブの腕を掴んで、引きずり込んで、椅子に叩きつけるように座らせて

周囲から11の銃口をつきつける。

ここまで

「何秒だ？」「5秒です」

「ハア…全員CQBメニュー追加だ！」

プライスにそう言われて、声には出さなかつたけど顔を顰めた。

「プライス、何してるの！離しなさい！」

「だから叩くな引つ搔くな暴れるな！」

ルイズが拘束から逃げ出そうとむちゃくちゃに暴れ、叩かれているラタリが悲鳴を上げている。

「ルイズ！」

目の前の黒ローブが立ち上がるうとして

「誰が立っていいと言った！座ってる！」

デイニスが怒鳴り、椅子に押さえつけた。

「デイニス！その人を離しなさい！命令よ！」

「やなこつた。そんなに言うなら、こいつが誰なのか証明しろ。出来なきゃ」

そこで言葉を区切るとデイニスは親指で首を搔き切る動作をした。

「姫様よ！」「あゝあ？」

マクタヴィツシュがフードを取ると

「姫殿下！」

ラタリの背後の枢機卿が悲鳴に近い声を上げた。

「人騒がせにも程がある！アンリエッタ、お前には王族の常識というのが欠けている！ルイズとマザリーニがいなかったら、蜂の巣になっただけでも文句は言えなかったんだぞ！」

非常に珍しい事にプライスが怒っている。

確かに、夜にこっそり訪ねて来るなんて、俺達の世界だったら

（ありや死んでたな）

「今更だけど、僕達、王女様になんて事したんだろ……」

部屋の隅で、見えて可哀想な程に青ざめているゲイリーの肩を抱いて見ていると、少しは収まったらしい。

「マザリーニ、王宮に帰ったらギツチギチに扱いてやれ。確か…相応おつかないメイジがいるって話を聞いた事がある。何回かけてでも口説き落として、この頭の中がお花畑な王女の脳みそに礼儀作法をしっかり刻ませろ」

瞳孔がカツ開いていても冷静な声で言っているので、内容と合わせて余計に怖い。

「……」

部屋全体に重苦しい沈黙が下りたが、いつの間にか手元に温かい紅茶の入ったマグと茶請けのクッキーの乗った皿が滑り込んでいた。配ったラタリはドス黒い雰囲気を漂わせているが、ともかく一息ついた。

人騒がせな王女は幼少期の遊び相手だったらしいルイズと思い出話をしていて、唐突にため息をついた。

「ルイズ、私はあなたが羨ましいわ。自由って素敵ね」

「フン、馬鹿馬鹿しい。“成り上がり”のゲルマニアと軍事同盟を締結する為に結婚するのが、そんなに嫌か？俺達の世界の歴史の中にもそんな話はごまんとある」

プライスの一言 横っ面をひっぱたくなんてモンじゃない。もらったら骨折に内臓まで持っていかれて、血反吐を吐いて七転八倒するような威力だ に王女は失神しかけ、ルイズは顔色を深紅に変えた。「プライス！あんた、なんて事を言うの！」

「俺はあくまで事実を言ったただけだ。王族だからって耳に優しく甘い言葉ばかりだったらこの国は持たん。それに、解雇したければ構わんぞ。再就職先から『早く来てくれ』ってせつつかれてる位だしな」

「……！！」

無言で地団駄を踏むルイズを無視して、ラタリが肉食獣を連想させる笑顔を浮かべ、いつもより低い声で問いかけた。

「このタイミングでその話を出すって事は、『ある危険物』を回収して来いって事なんだから？」

「『危険物？』」

ルイズと枢機卿が訝しむ声を出して王女を見る。

「…その通りです。私は昔」

「『軽率にもウエルズ皇太子に恋文をしたためました』って？」
プライスが劇のセリフでも言うようにサラッと内容に意味は
違えど3人は飛び上がった。

「姫殿下、何という事を！」

「姫様、ラタリとプライスの言った事は本当なのですか?!」

「…本当です。それが露見したら、私は重婚の罪に問われ、同盟は
破棄されるでしょう! そうなったらおしまいですわ!」

「ケツ、アホじゃねえか。自分のやる事為す事で、国の運命まで変
わる! そんな事は考えなかったのか! 甘ったれた事抜かすんじゃない
ぞ!」

デイニスが険しい顔でテーブルを拳で叩いた。

部屋の気温が、氷点下ウン度までいきなり下がった感じた。同じ部
屋にいても一刻でも早く、逃げたくて堪らない。

居心地悪そうに身じろぎしたゲイリーが、タクティカルベストの中
からメモ用紙と鉛筆を出し、何か書き記した。

メモの内容に、俺は頭痛が更に酷くなった気がした(というか、実
際に酷くなっている)。

手渡して回されたメモに殺気でギラついた5組の瞳が、ドアへ向け
られた。

メモを渡す脇からそつと壁際に下がる俺達。

3人は急上昇と急下降を繰り返す室内の気温に加え、突然目をギラ
つかせた5人を不思議そうに見上げ

ドアの開閉音に続いて悲鳴が上がり、ドアの外にいた人は引きずり
込まれ、それぞれの頭に銃口がポイントされた。

「キュルケ! タバサ! ギーシュ! こんな時間に何してるの? てかギ
ーシュは何でここにいるの?」

「この…クソ馬鹿野郎共! テメエらも王女も、全員ブツ殺されても

仕方なかったんだぞ！分かってんのか！？」

かなり息を荒げて、肩で呼吸しているマクタヴィツシユの腕を「落ち着け」というようにプライスが軽く叩いた。

2歩ほど下がって深呼吸を繰り返すマクタヴィツシユと入れ替わりに、ラタリがドスの利いた声とガバメントで「優しく」話を聞き出した。

「どうする？半分は聞かれたみたいだが」

「…全員口軽そうだな」

俺の発言に、キュルケとギーシュは目を剥いて、2方向から同時にサラウンドで騒がれたが、要は「そんな事ない！」だろう。

「正直、気は進まん」

「俺もです。泣き事垂れるのが関の山でしょうな」

「俺もそう思います」

「よし、留守番してなさい。でも情報バラしたら」

そう言いながら微笑んだラタリの手には

「…デッケエマチェットだな。扱い辛くないか？」

いつの間にか、大分デカイマチェットが収まっていた。

「10年は使ってるぞ。そんじよそこのナイフより頼りになる」

確かに頑丈さはナイフの比じゃないだろうが、とにかくおっかない。

「いや、どー見ても10人位は余裕で殺してそうだよな、それ」

俺の冗談8割の一言に、はたと考え込みながら「…それ以上かも」と物騒な事を呟くラタリ。

「ラタリ、こいつらには留守番も無理だろう」

そう言うと、「…連れて行こう。地獄の3丁目まで、その先にも」
プライスが悪魔の笑顔で締めくくった。

Day9 行軍、あるいは死出の旅路につく (前書き)

長らくお待たせしました！
いよいよアルビオン編です！

Day9 行軍、あるいは死出の旅路につく

side：“スープ”・マクタヴィツシュ

2日後の早朝。

厩舎前に集合した俺達13人と、ルイズ、ギーシュ、キュルケ、タバサの4人。

更に変装したロングビル 偽名はマーシヤ も生徒の護衛として加わり、総勢18人。

4人小隊、2つは5人だとしても4つは隊が作れるので、いざとなったらそうしよう。

「ルイズ、例の物はちゃんと持ったか？」

プライスの最終確認に、手紙を入れた首から下げる筒と指輪を見せるルイズ。

昨日は散々大騒ぎして、結局元凶の手紙を「王女」の為ではなく、散々神経をすり減らしている「枢機卿」の為にアルビオンまで行く事になった。

王女からその旨の手紙 最後の文がどうも気になるが と身分証代わりの指輪を受け取って、あの晩は解散となった。

「全員、立ったままで構わん。急いで食べる。これを逃したら晩まで空きつ腹抱える羽目になるからな」

ラタリがそう言いながら全員にサンドイッチとマグに入った熱くて甘い紅茶を押しつけていく。

慌ただしい朝食を終えて、竜達につけた金具等の最終確認をしている最中にギーシュが「使い魔を連れて行きたい」と言い出した。

現れたのは

「モグラだな」

「モグラですね」

モグラに頬をすり寄せるギーシユ。…元々センスはおかしいと思っ
ていたが、やっぱりおかしかった。

しかし、モグラが鼻を動かして近づいてきたがゲイリーの「《お座
り》」で止まった。

「おい、どう見てもこりゃ《伏せ》だろうが」

「んー、その子にはそれで《お座り》みたいです。それに、宝石に
目がないみたいですよ」

「宝石」と聞いて、16人の視線がルイズに突き刺さった。

「ふええ?! どうしろって言うのよ?」

「ルイズ、指輪を貸してくれ。何かの役に立つだろう」

食うのか何なのか知らないが、モグラの鼻先に近づけるとしきりに
匂いを嗅ぐ。

で、指輪を拭きながら聞くと匂いを覚えれば追跡出来るそうだ。

「「やっぱり犬じゃねえか」」

俺とプライスが同時に突っ込んだ。

「…プライス、面倒事が来た」

ラタリが渋い顔でキツイ一言を言い、俺達は朝霧越しに「面倒事」
を睨んだ。

霧の向こうから現れたのは、昨日サイモンがこっぴどくこき下ろし
た貴族だった。

「動くな。両手を上げる」

その背後から、ラタリがSPASを構えて静かに声をかけた。

マクスウェルが手早く身体検査をしてから問いかける。

「で、魔法衛士隊グリフォン隊々長のワルド子爵が、何で、こんな
時間に、ここにいるんだ?」

「姫殿下は君達だけで行く事にやはり不安らしい。そこで僕に白羽
の矢が立ったんだ」

「自分で頭にブツ刺したのか? ああ、かっこよくて、さぞ目立つ事
だろうよ。とつとつ、帰って、糞して、寝ろ。これ以上人数増えた

ら埒があかねえのによ。何を考えてんだ、あんの馬鹿娘」
ワルドの鼻っ柱を叩き折るところか、粉碎する言い方で叩きのめしたが、強引についてきて出発した。

途中で攻撃される事もなく、俺達はラ・ロシエールで宿をとった。この街の建物は全て岩盤から削りだしたらしい。言われてみれば、地層の境目が2続いていたりしている。

5頭の竜とグリフォンで乗りつけた俺達に、宿の主人は可哀相な位縮こまっていたが、ラタリが気前よく金に色をつけて払ったのでおあいこになった。

俺達は普通の宿で良かったんだが、ルイズ達が「貴族用じゃないなんて考えられない！」と猛反発した。結局、プライスとのコイントスに10連続で負けて、諦めてもらった。

「フン、俺に勝とうなんてウン十年早いんだよ」
その言葉に勝負を挑んだワルドは、2時間後には有り金を全て巻き上げられていた。

シヨックで黄昏るワルドの肩を叩いて離れながら、もう片方の手で巻き上げた金を懐へ戻す辺りは賞賛する。

…後で驚く顔が見物だ。
全員で顔を見合わせて、ニヤリと笑った。

夕飯を食べ終わった後、俺達は装備品の調整や道の確認をして過ごし、早めに就寝した。

「ここまででは普通だった筈なのに、何で襲撃されるんだ？」
「知るか！とつとと叩き返してこい！」

プライスにそう言われ、俺はピンを抜いて隠れているテーブル越しに手榴弾を放り投げた。

床を転がっていき、入り口付近を吹っ飛ばすと壁や床に赤黒い模様がペイントされた。

俺やプライス、他のみんなの隠れているテーブルから少し離れた階段上からは発砲と排夾音が繰り返されている。

的確な狙撃で頭を撃ち抜かれて瞬時に絶命する傭兵達。

最初に弓矢を打ち込んできた辺りはまあまあだが、俺達は弓矢に比べたら圧倒的な制圧力を誇る現代兵器を持っている。

「情報漏洩にしちゃあ、精度が低すぎるよな」

13人の制圧射撃で瞬間に殲滅した傭兵達の懐を漁る。

「ソープ、金貨だ。よっぽど俺達を殺したい奴らがいるらしいな」

ちよっと目を向こうに向けると、わざと膝を吹っ飛ばした傭兵をラタリが締め上げて吐かせている。

「子爵、こいつらは物盗りのつもりだったみたいです」

「そうか、では捨て置いて急ごう」

グリフォンに跨ったワルドを見ながら、俺達は囁き声で情報交換する。

（本当はどうなんだ？）

（白い仮面をつけたメイジに多額の金で雇われたんだとさ。目標は俺達だった。多分、分断するのが目的だったんだろぅが…）

「棧橋」に向かっている筈だが、どういう訳だか山の方に近づいている。

「ルイズ！道間違えてないか？」

「こつちで合ってるわよ！もうすぐだから！」

「はあ?!」

その言葉通りにすぐ見えてきたのは

「……何であんなバカでかい木が『棧橋』なんだよ!?」
確かにでかい!

そしてその木の内部をくり抜いたのが、『棧橋』という訳だ。

棧橋の内部の階段を駆け上がる。

先頭にラタリ、次にワルドと続き、ルイズ達は途中から《フライ》
でついてきた。

「大丈夫か?」

ラタリが振り向いてそう言った、その頭上から白い仮面を着けたメイジが襲いかかった。

「ラタリ!」

俺達の叫びか他の何かか知らないが、とりあえず振り向き
SPASを構え、5発は早撃ちした。

自由落下中だったので避けられず全身に散弾を食らったメイジ。
だが姿が消えた。

「一体:」

「あれは偏在だ。本物は別の場所か」

「チツ、根性なしめ:急ごう。この先だ」

ワルドが解説し、ラタリは続けて先を走った。

昇降口から出ると、俺達の世界では博物館行きの代物の木造船が
あった。

まるで木の実のようにぶら下がり、両側に羽がついている。

「誰だテメエら?出航は明日だ。出直しな」

船員が俺達に手を振ったが、帽子を被った男が飛んできて制止した。

「待て待てお前達!:ヒューズ様、お待ちしております!」

「人数は18人だ。風石は積んだか？」

「ええ、しつかりと！よし、出航だ！準備しろ！」

もやいが解かれ、帆を張り、綱が解かれた。

フネは一瞬沈んだが、帆が追い風を受けたように膨らみ、空中を滑るように動いた。

「すごい！浮いてる！」

ゲイリーが好奇心に目を輝かせて、眼下を離れていく街並みを見ていた。

「子爵様、グリフォンはどうなさるので？」

マイクがワルドに尋ねると、ワルドは指笛を吹いて地上から甲板へと呼び寄せた。

「なるほど。かなりの腕前のようにですね」

わかりやすい煽てだが、気をよくしたワルドが口を開こうとして

《グオオオオ…ン！》

「…馬鹿野郎！耳を潰す気か！」

竜達の一斉咆哮に耳を塞ぐ羽目になった。

船室に入ると、俺とルイズ達学生、ワルド以外の全員がテーブルに屈み込んで小声で何か議論していた。

「しかし、手紙を開封して文面を確認って…そんな事やっていいのかい？」

「バレなきやいいんだ。それに、文面を知らなかったら交渉も出来ないしな」

「ですよー。SASとTFなめんな（^ ^#）ピキピキ」

「とりあえず、マーシャ、やってくれ」

俺達の話とG○サインに肩を竦めたが、マーシャは詩的な響きのあ
る呪文を長々と唱え、杖を振った。

輝く粉が手紙へ振りかかり、封蝋が外れる。

手紙を持ったプライスは眉間に盛大に皺を寄せる。

「とりあえず、読んでみないとな。マーシャ、頼む。あんなアホの文章は読んでられん」

「アホって…随分過激な事言うね。じゃあ、読むよ」

マーシャがそう言って読み始めたが、20秒で後悔した。

重要な情報だけ抜き出して読み上げさせ、交渉材料として頭にしまい込む脇で本物そっくりの封蝋をして、密談は終わった。

「仕掛けはした。あとはかかるのを待つだけです、そう単純にはいかんでしよう」

俺が煙草をふかす脇で、葉巻を吸うプライス、煙草を吸うサイモン、大量に流れてくる煙に顔を顰めないラタリが、同時に口を開いてタイミングもピッタリ合わせて毒を吐く。

「…何でこう、どいつもこいつもゴチゴチに固い、石頭の馬鹿ばっかりなんだか。たまには単純な奴がいたっていいのにな」「」

「さつき以上に口が悪くなって来てるー！」

顔を顰める俺を6つの瞳が見つめ、口元が揃ってにやりと笑った。

Day10 仕掛けと獲物とそれぞれの思惑

side:ゲイリー・“ローチ”・サンダーソン

甲板で雲と青空を眺めていたら、突然見張り台からラタリさんが飛び降りてきた。

どうやっているんだか知らないけど、結構な高さから着地しても板を踏み抜いたりしないで、かなり素早く動く。

「敵襲！敵襲！1時方向から帆船！」

その声に出て来た船長が、双眼鏡を見て顔色を悪くしながら呟いた。

「…空賊だ！」

「威嚇でも撃つたら迎撃するぞ！デビット！M2とMk19出せ！」

ローチは竜でルイズ達を連れて行け！」

「了解です！ルイズちゃん、みんな、子爵様も急いで！」

頷いてルイズちゃんの手を引いて甲板を走る。

僕が右手で能力のカモフラージュに指笛を吹くと、竜達が素早く近寄ってきた。

「待つて！プライス達がまだよ！」

「大尉達は大丈夫だし、その大尉からの命令なんだ！よし、Go！手綱で合図すると右に旋回してからフネから離れる。」

「戻つて！戻りなさい！命令よ！」

「ルイズちゃん、今の状況を考えてくれ！それに文句なら後で聞く

！…っ！避ける！左旋回！」

大砲の弾がすぐ間近を唸りを上げて通り過ぎて行った。

「…弾がマジで丸いんだ」

うっつきり呟いたが、幸い、マスクの内側で消えて誰の耳にも届いていなかった。

かなり高速でフネから離れて10分後（腕時計で確認した）、無線

チャンネルからスロートマイク越しにプライス大尉から通信が入った。
声だけとはいっても、思わず背中がピンとしたのに気づいたルイズちゃん達からの視線を浴びていたけど、内容を聞いて僕は固まってしまった。

「大尉大尉いー！！捕まえちゃったって本当ですか?!」

フネに戻ると、ルイズちゃん達を下ろしてからマクタヴィツシユ大尉に詰め寄った。

「おう、おかえり。竜の乗り心地はどうだった？」

「いやー、凄い速い上に…っ！話を逸らさないでください!」

「マジだ。ゴーストとプライスの連携プレーでな。いやー、お前にも見せたかったよ！凄かったぜ!」

かなりサラツと言われたけどはつきり言って、魔法が万能なこの世界の人達じゃあ…

「そりゃ勝ち目0どころか、-100%ですよ…!」

「お疲れさん。ルイズからの文句は俺が聞いておく。お前は休め」
プライス大尉に紅茶を押しつけられながらそう言われて、僕は頷くしかなかった。

その後はタバサちゃんとキュルケちゃんと話したり、シルフィードを触らせてもらった。

…右手のせいでベタバタに擦り寄ってきて死ぬかと思った。タバサちゃんが杖で頭を叩いて離してくれたけど、ちよっと可哀想だったので頭を撫でてあげて、タバサちゃんには謝った。

結局、状況が状況だけにワルド子爵にとりなしてもらったみたいだ。10分くらいで、甲板の最後尾で葉巻をふかしていたので、近づい

た。

「プライス大尉、中尉と組んでみてどうでした？」

「おお、ゲイリーか。…ありや相当な数の修羅場をくぐってきた奴だな。俺の昔の第3副官くらいには使えるな」

「じゃあ、俺なんかいつまでも無理そうですね？」

途中から大尉が加わってきたので、僕は慌ててしまった。

「ソープ。そんな事はないぞ。お前も5年の間はかなり成長したみたいだしな。今ならギャズ……に3歩遅れてる」

誉められていたけど、最後の言葉で大尉がズツこけた。

「あらら。手厳しい」

「で、何か用があったんだらう？」

side:プライス

捕縛した空賊達は、向こうが乗ってきたフネの船倉に入ってもらっている。

ガタイの良さはソープ並みのウィルを従え、俺は1人を別室へ引っ張り出した。

頭に被せておいたズタ袋を取ると、ボサボサの黒髪、片目を隠す眼帯、無精髭を生やした男が俺を睨みつけた。

「ウィル、何点だ？ちなみに俺は30点」

「甘いんですね。25」

「もっと言っつてやる。赤点」

ラタリのつけたドギツイ点数に俺達は吹き出した。

「その見苦しい面の皮をひん剥いてやる」

いつの間にかラタリの右手に握られたナイフがランプの灯りを反射し、男が息を飲んで

ラタリの左手が男の髪を鷲掴みにして引っ張った。下から現れたの

は金髪。

髭と眼帯も手荒に耄り取られた後には

「プリンス・オブ・ウェールズ」が呆然として座っていた。

「義憤とは言え、このような行為は感心しませんな。一步間違えば、死んでいたんですよ」

「危険な事は勿論知っていたよ。だが私は、アルビオンのウェールズ・テューダーだ。敵に背中を見せて引き下げる訳にはいかない」

「……わかりました」

たっぷりため息をついてやりながら一旦引き下げる。

だが、退却する訳ではない。

より強力な火力で制圧する為に、増援と合流するだけだ。

覚悟しろ。決して楽にはし

てやらん。

Day11 現代の戦争の片鱗、そして異世界の…… (前書き)

今回は、現代兵器を大量に使用しています。

何回も言いますが、嫌いな方は

回れー右！そのまま、お帰りください！

Day 11 現代の戦争の片鱗、そして異世界の…

side:ワルド

「さて、ここまで来ておいてなんだが、子爵、ルイズ達を連れて帰つてくれ」

目が笑っていない笑顔と握り拳の親指で外を指す護衛の1人のマクスウエル。

昨日魔力がスツカラカンになるまで散々手伝われたのに、いきなり何事だ？

「何故？」

「邪・魔」

いつそ清々しいまでの笑顔で無情にバツサリと言い切った。

魔法衛士隊の隊長の私に向かって「邪魔」だと…?!

怒りと屈辱に体が震えて頭に血が上り、口を開こうとして

「…言つとくがな、生半可な覚悟で残ろうなんてすんじゃねえぞ」

右斜め後ろからプライスの声がかけられたが、その時の私は内臓を鷲掴みされたように息が出来なくなつた。

肩を掴まれて振り向かされ、血に飢えてぎらついた猛禽類のように燃え盛る青い瞳と真つ向から向き合った。

「魔法衛士隊なんて俺達から見たら、F・N・G（Fuck・new guy、糞つ垂れの新人）」みたいなもんだ。それに、俺達はある人達から見たら「汚い」戦争を何年も生き延びて来た。血と肉と骨が飛び散って、内臓がはみ出し、どんな奴も痛みを泣き叫ぶ、そんな戦争だ」

「…嫌だ！」

「ああ？」

「…私は、魔法衛士隊グリフォン隊々長だ！引き下がる訳には」

「あー、つくづく面倒くさい奴らだ。プライス、だから言っただろ

？こいつもフネに放り込んで来れば良かったんだよ」

さらに右後ろからラタリの声があったが、内容の過激さに私は目を剥いた。

「んな！？」

「ラタリさん、ちょっと言いすぎじゃ……」

内容の過激さにオロオロしているゲイリー。

「風のスクウエアだろうがペンタゴンだろうが、俺達の世界の戦争には役立たん。だから帰って、報告して、糞して、寝ちまえ」

……つくづく下品な言い草だが、私の貴族としての誇りや「任務」、果たさなければいけない「夢」。全てが私を後押しした。

「いや、私に出来る事があるなら、手伝いたい。手伝わせてくれ」

「……じゃあ、弾運びよろしく。あ、文句言うなよ。弾運びも重要なんだ。弾が切れたら俺達も大変なんだよ」

「そうそう！円滑な兵站が出来れば俺達も楽だし、勝率も上がる！

頼りにしてますよ、子爵！」

ニコニコ微笑んでそう言うヘンリー。

確かに兵站は戦争の重要な要素だ。彼らの言う事も最もだ。

「わかった。『ユビキタス・デル・ウインデ』」

『偏在』の呪文を唱える。単純な理論だ、人が多ければ『手足』も増える。

「あ、そうだ。これ使ってください。一々大声張り上げなくても連絡がとれます。あとは、怪我しない事にこした事はないんですが念のために」

デビットから渡されたのは、縦に細長い箱と線で繋がった妙な物と、

…これは、胴着ベストか？しかし素材が見た事のない物な上に形も奇妙で

「……重すぎる！」

「腕力も体力もなさすぎます！もういつペン新兵からやり直し！」

「しかし似合わんな」

「ええ、破滅的に」

私とデビット、ニヤニヤ笑っているプライスとマクタヴィツシュ以

外の数人が笑い転げている。

「もう、うる…それ、何？というか、何で、ワールド様がそんな物を着てるの？」

笑い声に部屋を覗いたルイズが可愛らしく首を傾げている。

「いや、子爵様が手伝ってくださるから、怪我しないように念のために着て頂いているんだが…ブハハハハ！こつち向かんで下さい！」

「…ブフツ！色以前の問題だ！本当に、子爵、鍛え：アハハハハ！孤立無援か？だが大騒ぎの中でも表情を変えないラタリに、一縷の望みをかけて問いかける。

「…そんなに似合わないかい？」

「ええ、致命的に」

「……………」

無情にも彼も笑顔で切り捨てた。

「いつまで馬鹿騒ぎしてる気だ？準備にかかれ！」
プライスに怒鳴られて慌てて持ち場へ走る。

side：“ソープ”・マクタヴィツシュ

笑ったり準備で大騒ぎをしているうちに正午になった。

レコン・キスタの将官だろう、そこそこ立派な服を着た男が馬に跨って現れ、前口上を述べ始めたが、13人の中で一番気の短いラタリが正門に設置したスピーカーへ無線を繋ぎ

【…やっかましい！ゴタゴタと長ったらしい口上述べるしかない、この間抜け共！それ以上グダグダ抜かしたら、テメエのドタマが今以上によく回るように風穴開けてやらあ！】

原文よりソフトな表現に変えています

地声とスピーカーのWで最大音量攻撃に、レコン・キスタ側の兵士達は腰を抜き、軍馬も落ち着きをなくし、竜騎士も何人が落ちかけた。

「……今のつて、挑発ですか？」

「……多分な。ラタリ、あんまり刺激」

《何ですか？》

「……いや、何でもない」

（おっかない！）

ちらつと時計を見ると、第一波攻撃の開始時間だ。

《親父さん、こちら「デバスター」のジョージ。爆撃を開始します！》

《親父さん、こちらヘンリー。AC-130もスタンバイ。撃ち方始め！》

鋼鉄の翼と力強いエンジンで大空を舞い、圧倒的な火力で殲滅へ導く、死の使者が現れた。

アメリカ軍のB-52爆撃機とAC-130Uガンシップだ。

ACには世話になった事があるが、頼りになる反面、あまりの恐ろしさに当時まだ軍曹だった俺は縮み上がったものだ。

「何だあれは？」

ワルドの問いに、プライスは「『殲天使』達だ」と返した。

空を力強く舞う、巨大な鋼鉄の鳥。

開いた腹から降るのは、炸裂すれば堅牢な建物もあっという間に瓦礫に作り替え、大地に深い穴を穿つ爆弾の雨。

ハルケギニアに、異世界からの無慈悲な殺戮の嵐が吹き荒れる。

爆撃が始まると地面が激しく揺れ、衝撃波と爆発音が頭の中身をシイクする。

「な、何事だ!？」

「爆撃中です。子爵様、しゃがんでいた方が」

ワールドが耳を塞ぎながら言っている脇で俺も耳を塞ぎながら忠告し

ドオオ…ン

《Tango down(目標、沈黙)》

俺達も撃ち始めた。

《Fire in the hall!(爆発するぞ!)》

プライスの声と共に100mほど離れた場所が爆発し、何人か宙に舞ったのが見えた。

その頃になつてやつと、向こうが大砲を撃ち始めたが、俺達の籠もる城にかすりもしないで手前の地面に落ちてばかりだ。

《Hey, hey, hey!大砲もへボ揃いかよ。:target neutralized.(目標、無力化)まるで鴨撃ちだぜ》

《確かに。建物に当てられもしないなんて、俺達だつたら首根っこ掴まれて再教育だぜ。M79行くぜ!Fire!》

ラタリとレオの無線の次に、プライスが俺に聞いてきた。

《ソープ、子爵はどうした?一応生きててもらわにやならん》

プライスにそう言われて振り向くと

《あー…耳押さえてのたうってます》

《やっぱりな。仕方ない、蹴り出せ。死なれると色々面倒だ》

「了解。子爵、失礼しますよ!」

ファイヤーマンズキャリーで肩の上へ担ぎ上げると左手で足と腕をまとめて掴み、右手にM4を持って隠し港へ走る。

子爵は肩の辺りでギャンギャン言っていたが「全っ然聞こえませんか!」と言っちゃった。

隠し港に停めてあるフネにワールドを放り込み、援護に戻ろうとした俺の左腕が誰かに引かれた。

振り向くと

「タバサ?どうしたんだ」

「ルイズがいない」

「何だつて?! プライス、問題発生! ルイズがいない!」

俺が無線へそう怒鳴った瞬間、全員が息を呑んだような気がした。

「ルイズ!」

そう言つてすごい勢いで走ってきたワルドは、今までに見た事が無いほど、顔色が悪い。

「彼女は僕の婚約者だ! 長年疎遠になつていたが、それでも!」

《…チツ。とんでもなくクセえセリフだぜ。早く行け、キザ野郎》

《…仕方ない。行つて、見つけて、連れ戻して来い》

ラタリとプライスが盛大な舌打ちをした後、銃声混じりだがそう言った。

ワルドは2人の言葉にしつかり頷くと、城内へ駆け戻った。

「さて、俺も行かなきゃな。無事に会おう」

そう言つてタバサの青い髪を2、3回撫でて、俺も城内へ戻った。

《デビット、こちら「デバスター」のジョージ! 爆弾は全部落とした! どうすればいい?》

通信に窓の外を見る。

B - 52が悠然と飛行しているが、一体どうする?

《ジョージ! そのまま外へ出る! ローチが回収する!》

《パラなしダイブなんてマジかよ!?! ああクソ! ローチ! 回収してくじつたら化けて出てやるからな! おら、行くぜええ!》

「ジョージ!」

思わずゾツとして叫んだ。いくら何でも無茶だ!

《…キャッチしました! 大丈夫ですか?》

《…クソ、マジで寿命が縮んだぜ。ありがとよ、ローチ》

ゲイリーの少し高い声と、いつもより低いジョージの声が聞こえた事に思わず安堵のため息が出た。

そしてB - 52は空中で消えた。

能力の確認も兼ねていたらしいが、あれはビビった。

《ヘンリー、ガンシップの方はどうだ？》

《燃料はまだいけます。弾薬は？》

《25mmがきれかかってるが、40はまだあるし、105なんか1発も撃つてませんよ。奴らの貧相なケツを地獄へ送る事は可能です》

装填手のマイクがそう答えると、プライスは城付近に火力を集中させるように指示をした。

side:プライス

左旋回を続けるAC-130から榴弾が降り注ぐ防御ライン。

正確な爆撃を、幸運か不運かくぐり抜けた敵兵の頭へ銃弾を叩き込む。

「ワルド！ルイズはまだ見つからないのか！？」

《…すまない！まだだ！》

ラタリが無線越しに鼻を鳴らし、《犬がいりや良かったな》と言いながらまた1発撃った。

「犬はやめる。一体何人が恐ろしい思いを味わったか…特にプリピヤチとか、ザカエフの息子とっ捕まえに行く時に散々味わった」

《…親父さんの話を聞いてるだけなのに既に冷や汗グツシヨリな人》

ガチガチガチガチ……

無線のスイッチを「はい」の回数だけ鳴らされるが、11人からほぼ同時にやられれば

「うるせえ！！」

俺の無線と肉声の全力絶叫に、何人が耳を押さえてのたうちまわったか？…んな事、知らん！

side：ワルド

「ルイズ！ルイズ、返事をしてくれ！」
長い回廊を走りながら声を上げる。
ちらつと後ろを見ると、聴覚を強化した「偏在」は首を横に振った。
どうやら、ここにはいないらしい。

一歩踏み出すことに強くなる不安を、私は頭を振って追い出した。
階段を駆け上がり、上の階に足を踏み入れる。

目につく部屋のドアを端から開けていき、小柄な婚約者の姿を探す。

「ルイズ！」

《ワルド、まだ見つからないのか！？》

無線越しにプライスに怒鳴られる。彼らもまだ見つからない事に苛立っているのだろう。

「…すまない！まだだ！」

《フン、犬を使った方が早くないか？》

確かに犬を使えば搜索はぐっと簡単になるが、婚約者が襲われないとも限らない。

突然、誰かが呟いた後で無線が妙な音を立て始めた。何かを鳴らしているようだ…。

耳をこらした、次の瞬間

《う　　る　　せ　　え！》

「うわぁー！」

耳元で大音量で叫ばれ、思わず悲鳴を上げてしまった。

side：ゲイリー・“ローチ”・サンダーソン

僕はプライス大尉から、ルイズちゃんの搜索に加わるように言われて、一緒に乗っているジョージと竜の背中から赤外線ゴーグルをつけて窓際を飛んでいる。

「この階にはいない！次だ！」

僕達の乗っているのはアルフ、4頭の中で一番年上だ。

すぐ右を掠めるように飛んで、先行して囿になってくれているのはクロウ。

《ローチ！5時から竜騎士！数、1！》

大尉からの無線に振り向くと、赤っぽい鱗の竜がぐんぐん距離を詰めてきた。50、40、30、20…

「あ、それ以上近づくと」

突然竜が上下反転して、乗り手を振り落とした。そして僕達の乗るアルフに少し遅れる感じに並んで飛ぶ。

《やれやれ、通算10騎だ》

「……やなもん見ちった」

「タハハ！大尉、僕もジョージもピンピンしてます」

《だろうな。さっき落とされたけど浮いてた竜騎士を、もう1回地面へご案内したところだ》

（さっきの騎手、ありやかなりの高速でこっち来てたぜ。それを頭狙って1発って…おっかねえ）

「……了解。戻ります」

やっぱり、プライス大尉は怖かった。

side:ワルド

「…プライス、こちらワルド」

《どうした？見つかったか？》

離れていても会話出来るこのマジックアイテム “ムセン” という

そっだ を挟んで、私は途方に暮れた。

《わかった。子爵、フネに戻れ。後は引き受ける》

ムセン越しに聞こえる、冷静なプライスの声。

「…ああ」

何も出来ない。

彼ら在必死に戦っているのに、私は…。

無力感に内心、ため息をつく。

《ワールド、勘違いするなよ。焦っても仕方ない。それに俺達やあんなと行き違いになっていたら、慰めてやってくれ。怖かっただろうしな》

「…そうだな。わかった。ありがとう、プライス」

《フン、気にするな。さっさと行きやがれ色男。それとも尻を蹴ってやろうか？》

「ハハハ、それは遠慮させてもらうよ！」

彼らと話していると、まるで自分の隊の隊員達と話しているような感覚になる。

任務の時には非常に辛辣で辛い事も言う。

だが、任務を離れば酒を飲み交わし、くだらない冗談に笑い、悲報に泣き、色恋の相談や喧嘩もした。

長い廊下を駆け、階段を飛び降りる私の顔には知らず知らずのうちに笑顔が浮かんでいた。

「…プライス！」

《ん？》

「…君には、帰ったら一杯奢るよ！」

《…期待しないでおこつ》

ムセンから聞こえる声が、落ち込んでいるように聞こえたので首を傾げる。

「そこは期待するんじゃないか、普通？」

そう問いかけると、深いため息が聞こえ

《…頼むから死亡フラグは止めてくれ》

とよくわからない言葉を言われた。

side：ラタリ

ひたすら撃つ。

撃って、撃って、撃つ。

場所は構わない。

こいつらが前に進めなくすればいい。

それに、俺達がいた元々の世界で「最強の威力」を誇るアンチ・マテリアル・ライフルの1つ、バーレット社のM82ライフル。

・50Calの破壊力の前に、瞬く間に築かれる屍の山に血の川。
生半可な防壁を築けばそれごとメイジをぶち抜き、散る破片すら凶器に作り替える。

既に城内に侵入された場合の数々のブービートラップ 例えば、ドアを開けたら既にピンの抜いてある手榴弾が落ちてきて頭の高さで爆発したり、跳ね上げ地雷だったりと、古今東西のありとあらゆる兵器の大盤振る舞い の設置は終了している。

それにこれを上回る、更なる仕掛けも施してあるので、今や、この城そのものが巨大な爆弾だ。

《よし、もう十分だろう。撤収開始》

《了解》

あちこちから聞こえる無線。

《……ラタリ、頼むぞ》

「了解。脱出手段はいくつか準備した。気にするな」

そして、俺の仕事は

この城に仕掛けた、最大で最後の仕掛けの起爆役。

side:ワルド

私と入れ違いに戻ってきたルイズに最初は大きい雷を落とした。

でも、心配する気持ちは良く分かる。だから、ちゃんと目線を合わせて「おかえり」と言ったところで、上で戦っていたプライス達が次々に隠し港へ降りてきた。

既に指示通り、ほとんどフネは離陸寸前の状態で、タラップの端から飛び降りている。

プライスが最後の綱も外すとフネは隠し港を離れ始めた。

「やれ」

プライスの指示に頷いたマックスが手元の何かを押した。

ズズン！と、何かが爆発したような音が聞こえると、つい先ほどまで通っていた通路の入口が塞がれたらしい。そこで風が遮断されたのを感じる。

ふとプライス達を見回し、違和感にもう一度見回した。

プライス

デイニス

マックス

マクタヴィツシュ

ゴースト

ローチ

マイク

レオ

ウィル

ヘンリー

デビット

ジョージ

ゆっくりと、しかし確実にフネは城を離れていく。

そしてある程度離れた時にそれは起きた。

城が一瞬眩い閃光を発した直後、爆発音と大量の煙と共に突然崩壊を始めた。

「何だあれは?!」

「最後の仕掛けさ」

そう答えたデイニスの声は沈んでいる。

頭の隅でゆっくりと何かを組み立てられ始めたが、ムセンから

《おいおい、誰も迎えに来てくれないのか?》

「ラタリ!心配かけやがって!」

デイニスが真つ先に反応して、ムセンで色々喋っている。

私が口笛を吹くと、騎獣であり、隊の象徴でもあるグリフォンが素早く飛んで来て頭をすり寄せてきた。

side:ラタリ

仲間達が撤収を始める。

弾が飛んでこなくなれば、そこで押さえられていた波が盛り返す。何せ相手は数だけは腐るほどにいるから、人海戦術だ。

今までは頭数が足りなかった代わりに、戦略で持たせていたが……苦しくなってきた。

さっさとM82を放り出し、傍らに設置されたMk19に手をかける。

チャージングハンドルを引いて1発目を送り込み、撃ち始めた。

威力は広範囲に及んで高いので頼りになる。銃身がオーバーヒートしたり、弾切れにならないように気を配りながら撃っていく。

眼下の兵士の波は、ある部分では躊躇し、別の部分は突き進もうとして動いている。

どちらも榴弾で叩き潰しながら、俺は脱出しながら仕掛けを発動する機会を伺っていたが反吐が出そうだ。

今まで散々、暗殺を繰り返し繰り返し……数えるのも馬鹿らしくなる程の数をしてきたっていうのに。

そうこうしているうちに、Mk19ですら追いつかなくなってきた。仕方ない、潮時だ。

Mk19にC4をセット、廊下へ出ると

竜騎士が突然、目の前の窓の向こうからブレスと魔法を一緒くたにブチ込んできた！

咄嗟に目の前へ飛び込み、窓の下の壁に身を寄せる。

ものすごい熱波に、かいていた冷や汗まで蒸発したような気がする。ブレスが止んだので素早く立ち上がって、M4で竜騎士の頭と胸を撃つ。

狙いもクソもない射撃だが、騎士は頭蓋骨の中身と血を巻き散らしながら落下していった。

とりあえず、竜騎士は退散させた。

あとは一刻も早く、ここからトンスラするだけだ。

元々、長時間の長距離走は慣れている。

何せ主要都市部のみならず、辺境まで行かなくてはいけない事も多々あった。

しかも都市部は起伏が激しいビルの屋上を駆け抜けたり、走っている車を狙って飛び降りたり。

交通手段がないか、封鎖されている場合も結局、最後には自分の足が頼りだ。

デニス達に言われたが、そんな俺のやり方は「最凶にイカレてる」だの「スタントマン」とか、色々だけと言いたい事は

「人間じゃねえ！」らしい。失礼な。

最短距離をスレイプニル付与のほぼ最高速、ノンストップで駆け抜

け、城内に雪崩れ込んだレコン・キスタ兵を足蹴にして壁を走る。

……
とりあえず、状況を確認しよう。

右腰と脇腹に火傷。竜のブレスが掠っただけで火傷の？度、？度寄りつてところだ。

ただどいつまでもへたり込んでられない！

長い回廊や階段も人間的にはとんでもない速度で突っ切り、城の敷地内ギリギリで一旦足を止めた。
頭のとっぺんまで突き抜けるような痛さに止まった事を後悔したけど、ちゃんと目的の物は手に入れた。

「おい貴様、止まれ！何者だ！」

軽装鎧を着て、手にショートソードや槍を持った男達6人にきつい声をかけられた。

ゆっくり体を反転させ、向き直ると

俺は、背中から青い空へ身を投げ出した。

重力に引かれているとわかっていても、この瞬間の浮遊感はたまらない。

「あばよ、糞野郎共！地獄の悪魔によろしくな！」

驚いた顔で崖から見下ろすレコン・キスタ兵達を挑発しながら、手元のスイッチを押した。

一瞬の閃光

そして、アルビオン王族と共に歴史を刻んできたニューカッスル城

は今、巨大な瓦礫になり始めた。

爆音や地響きと共に柱が次々に折れ、城がゆっくりと崩壊していくのを見ながら、俺はパラシュートを開いた。

右腰と脇腹の火傷が痛くて仕方ないが、とりあえず脱出出来ただけいいとしよう。

そう思いながら無線のスイッチを押して、声を出した。

「おいおい、誰も迎えに来てくれないのか？」

《ラタリ！》

最初に応えてくれたのはデイニス。

《怪我は？》

「竜のブレスが掠った。でもそれだけだ」

《何い！？またやりやがったのか！お前ときたら…》

放っておくと説教が1時間は続きそうだったが、

《私が迎えに行こう。どこだ？》

ワルドに邪魔されて止まった。

幕間 Part 2 (前書き)

今回は、映画DVD等によくあるNGシーン特集風です！

幕間Part 2

NGシーン集

Take 1

【ギターの授業シーン】

《Ready……action!》

OKシーン

ギ「私が“疾風”のギターだ。今日は諸君らに、風が何故、“最強”と呼ばれるかを伝授しよう」
マックス（面倒くさい前口上だな。やるならちゃっちゃとやれっつーの!）

NGシーン

ギ「私が“疾風”のギターだ。今日は諸君らに、風が何故、“最強”と呼ばれるかを伝授しよう」

マックス「ちゃっちゃとやれ!ボケじじいか temeエ!」

《カット!》

マックス「え?…(台本見せられて)あ!『面倒くさい前口上だな。やるならちゃっちゃとやれっつーの!』!ギターさん、コルベール先生もすみません!」

NGシーン集

Take 2

【ギター授業シーン】

《Ready……action!》

OKシーン

きつい事を言うマクスウエルのツッコミ。
ゴーストは少し下を向いて、笑いをこらえる。

NGシーン

きつい事を言うマクスウエルのツッコミ。

ゴーストは笑いを堪える為に少し下を向いて、歯を食いしばった。
……が吹き出した。

ゴッブハア！」

《カート！》

ゴッハハハハハ！」

マックス「大丈夫か？」

ゴッすいません。大丈夫…ウブハッ！ウハハハ！」

【笑いのツボに入ったようです】

NGシーン集

Take 3

【コルベールが姫殿下の行啓を告げるシーン】

《Ready……action！》

OKシーン

コ「学院長から通達です。本日、アンリエッタ姫殿下がゲルマニア訪問の途中で学院へ行啓なさるそうです。よって、本日の授業は全て中止となりました」

サ「うわ、当日準備して本番つてのが一番面倒くさいのに」

マックス「せめて1週間前とかに予告してよ！。準備とか準備とか準備とか大変なんだから」

ル「準備しかないじゃない」

マックス「何言ってるの。準備が一番大変なんだよ。次が片付け、

3番がシラけきつた座を盛り上げる事。俺なんかその無茶ぶりを何回させられたか…」

NGシーン集

Take 3

【コルベールが行啓を告げるシーン】

《Ready……action!》

NGシーン

コ「学院長から通達です。本日、アンリエッタ姫殿下がゲルマニア訪問の途中で学院へ行幸なさるそうです。よって、本日の授業は全て中止となりました」

サ「うわー、ぶつつけ本番かよ」

マックス「せめて1週間前とかに予告しようぜー。こっちは準備とか色々大変なんだからさー」

ル「（ちよつと不思議そうな顔しながら）準備しかないじゃない」

マックス「何言ってるの。準備が一番大変なんだよ。次がシラけきつた座を盛り上げる事。3番が片づけ」

《カート!》

マックス「俺どこから間違えた!？」

サ「いや…多分俺」

マックス「お前かよ!」

NGシーン集

Take 4

【アルビオン最期の宴会シーン】

《Ready……action!》

NGシーン

ルイズが半泣きで会場を抜け出し、後を追ってゲイリーも抜け出した。

ラ「プライス、そろそろだ」

プライスは獰猛な笑顔を浮かべる。

目の前の宴会場では、瞬く間に貴族達がバタバタ倒れ……ませんでした。

《カート！》

ラ「あれ？何で？」

プ「おいおい、大丈夫か？」

NGシーン集

Take 5

【アルビオン最期の宴シーン】

《Ready……action！》

NGシーン

ルイズが半泣きで会場を抜け出し、後を追ってゲイリーも抜け出した。

ラ「プライス、そろそろだ」

ラタリから耳打ちされたプライス、獰猛な笑顔を浮かべる。

目の前の宴会場では、瞬く間に貴族達がバタバタ倒れ込んだ。ウェールズが一番最後まで粘ったが、結局同じように

、ゴン！／

《カーツト!》

プ「ウエールズ!」

ソ「氷と濡れタオル!急げ!」

ウエールズ「すみません!テーブル掴んだんですけど、滑っちゃって」

NGシーン集

Take 6

【アルビオン最期の宴】

《Ready……action!》

NGシーン

ルイズが半泣きで会場を抜け出し、後を追ってゲイリーも抜け出した。

ラ「プライス、そろそろだ」

ラタリから耳打ちされたプライス、獰猛な笑顔を浮かべる。

目の前の宴会場では、瞬く間に貴族達がバタバタ倒れ込んだ。ウエールズが一番最後まで粘ったが、結局同じように倒れる。

全員が高野。玉座のジェームズ1世も座ったまま軽く野をかいている。

ラ「やれやれ、効かなかったのかってヒヤヒヤしたぜ」

マックス「ラタリ、お前相当な博打打ちだよな」

プ「おい、くつちゃべってないで、とつと運び出すぞ」

プライスが言いながら2人を脇に抱え

プ「グッ!?!」

腰を押さえてうずくまるプライス。

《カーツト!》

ソ「プライス!?!」

プ「大丈夫だ……(と言いつつ、ゆっくり青くなっていく顔)」

NGシーン集

Take 7

【ワールドにボディアーマーを着せるシーン】

《Ready……action!》

OKシーン

デ「あ、そうだ。これ使ってください。一々大声張り上げなくても連絡がとれます。あとは、怪我しない事にこした事はないんですけど念のために」

デビットから渡されたのは、縦に細長い箱と線で繋がった妙な物と、これは、胴着^{ベスト}か?しかし素材が見た事のない物な上に形も奇妙でワ「……重すぎる!」

デ「腕力も体力もなさすぎます!もういっぺん新兵からやり直し!」
プ「しかし似合わない」

ソ「ええ、破滅的に」
私とデビット、ニヤニヤ笑っているプライスとマクタヴィツシュ以外の数人が笑い転げている。

笑い声に部屋を覗いたルイズが可愛らしく首を傾げている。

ウ「いや、子爵様が手伝ってくださいるから、怪我しないように念のために着て頂いているんだが……ブハハハハ!こっち向かんで下さい!」

マイ「…ブフツ!色以前の問題だ!本当に、子爵、鍛え…アハハハハ!」

孤立無援か?だが大騒ぎの中でも表情を変えないラタリに、一縷の

望みをかけて問いかける。

ワ「……そんなに似合わないかい？」

ラ「ええ、致命的に」

ワ「……………」

無情にも彼も笑顔で切り捨てた。

NGシーン集

Take7

【ワールドにボディーアーマーを着せるシーン】

《Ready……action!》

NGシーン

デ「あ、そうだ。これ使ってください。一々大声張り上げなくても連絡がとれます。あとは、怪我しない事にこした事はないんですが念のために」

デビットから渡されたのは、縦に細長い箱と線で繋がった妙な物と……これは、胴着^{ベスト}か？しかし素材が見た事のない物な上に形も奇妙で

ワ「……重すぎる！」

デ「腕力も体力もなさすぎます！もういっぺん新兵からやり直し！」
プ「しかし似合わないな」

ソ「ええ、破滅的に」

私とデビット、ニヤニヤ笑っているプライスとマクタヴィッシュ以外の数人が笑い転げている。

ワ「ええい、重い……レビテーション！」

(ここで更に爆笑)

《カート！》

ワ「え？ええ？」

デ「子爵、ここは耐えてくださいよ。この直後にルイズが顔を出しますのでから」

ル「子爵様、大丈夫？」

ワ「ああ。大丈夫だよ、ミ・レディ」

プ「気障抜かしてる暇あったら体鍛えろ！モヤシみてえなルーキー

(新兵) だな！(襟首掴んで引きずり)

ワ「ギャー！助けてー！」

Day 11・5 穏やかな恐喝ほど、怖いものはない

side：ラタリ

最後の仕掛けを発動して生きて戻って来たものの、俺やプライス達、ワルドの顔には喜びの色よりも、不機嫌と苛立ちと疲労の色の方が濃かった。

「ふざけんなー！」とか「馬鹿女王ー！」とか、とりあえず色々ブチキレた俺達の絶叫は空に木霊：しなかった。

「よし、もういいぞ」

プライスがワルドの肩を叩くと、ワルドは頷いてレイピアをちよいと振った。

「いやー、スッキリした！」

「私もだよ。色々溜まっていたのを、こうして吐き出せるというのはいいな！実にいい！」

ハツハツハ！と肩を組んで笑いあってるが……お前らは体育会系だったのか。

そして一頻り（ひとしきり）笑いあった後、プライスが真面目な顔をした。

「子爵、おかげで助かった。ありがとう」

「いや、礼を言うのは私の方だ。君達の強さや頭脳に触れていなかったら、私はあのまま祖国や婚約者、自分の仲間まで裏切っていたんだ。本当に、ありがとう」

深く頭を下げたワルド。

「…ケツ。鳥肌立ってきた」

顔を背けて、ぶるつと体を震わせたプライスを見て、ワルドは首を傾げると

「そんなに寒いかい？」と見当違いの言葉を呟いた。

「……どうしてお前は、最後の詰めが甘いんだよ……！」

「はああ!？」

俺達11人の渾身のツッコミにワルドの叫びが加わった。言われたブライスは、船縁で頭を抱えている。

その隣には、ゲイリーがオロオロしながらついている。後ろでは

「お前アホだろ!絶対にアホだろ!？」

「何故アホと言われなきゃならないんだ!理由を言え、理由を!」

「普通あんな風にされても『寒い』とはとらねえよ!」

「君達はそうだろうが、私は!」

と低レベルな口喧嘩が繰り広げられていたが、

「テメエらうるせー!」とブライスの鉄拳制裁を両者共に腹に食らって、甲板に突っ伏している。

side: デイニス

「で、これからどこへ行くんです?」

俺が先輩にそう問いかけると、ライトブルーの瞳が僅かに細められた。

「このまま王宮に突っ込むと大騒ぎになるな。適当な平野に降りて、フネは隠すなりバラし……でもまあ、いいか」

「は?どう」このまま王宮に着陸!」何言ってるのこの人!?!誰か止めて!」

「悪い。無理だ」

先輩の話を途中から聞き返したワルドが泣きついてきて、バツサリ切り捨てたが、他の奴らも頷いている。

「いやいやいや!大変な事になるってわかってるのに、何でやるの?！」

オロオロするワルドを促して、先輩を見る。

「それだけ腹立ってるんだよ。見てみる、あんなに嬉しそうな先輩。ありゃ相当に怒ってるぜ」

「……………」
隅で静かにうなだれたワルドの肩を、慰めの意味を込めて軽く叩くと俺は船室に向かった。

side:ラタリ

「わかった。このまま王宮に着陸させるんだな…了解。ロメオ、アウト」

プライスからの無線を切ると、操舵手に行き先を伝えてブリッジを後にする。

(マザリーニにはプライス監修、モンモランシー作成の胃痛に効くポーションか。今まではあのアホ姫のせいで大変な日々を送っていた訳だし)

ため息をつきながら角を曲がったところ、俺はにこやかな笑顔を浮かべたマクスウエルに捕まった。

近くの倉庫に誘導されて「傷を見せる」と言われた。

「いつから？」

「パラシュートで降りてきた後だ。糞、酷いな…火傷か？」

「歩いてバレたのか。ドラゴンのブレスだ。…痛えっ！」

「悪い。歩き方の演技はまあまあだったぞ」

「そりゃどう…ギャツ！」

「…終わったぞ。抗生物質は飲んだか？」

「ああ、戻った直後にな。痛み止めは飲んでない」

side:マザリーニ

「はあ…」

間違いなく目を通しておかなくてはいけない書類を目の前にしているが、内容はさっぱり入ってこない。

「はあ…」

書類を捌いていた秘書兼護衛がやんわりとたしなめる。

どちらにもなかなか有能なので重宝している。

「枢機卿、溜め息をつくと幸せが逃げますよ」

「……わかってますが、心配で心配で……はあ」

様々な不安が頭をよぎる。この時ばかりは、自分の頭の回転の早さを恨みたい。

しかし、恨んでも回転が止まる訳でもない。

「はあ……」

まあ、元はといえば、姫殿下が不用意にしたためた手紙のせいなのだが、当の本人は自覚………してないだろう。

「殿下は全然反省してないでしょうね」

「本と……！？今、何と？」

私が考えていた事が秘書の口から出た事に驚いて、思わず聞き返した。

「枢機卿、考えながら喋ってましたよ。あまり人前ではなさらない方がいいですよ」

「……どこから喋ってました？」

恐る恐る聞いてみると、

「元は姫殿下の不用意な手紙のせい、と」

「全部ダダ漏れえー！」

秘書の答えに悲鳴を上げた。

「古傷をえぐるようですが、確かに姫殿下が問題なんですよ。見た目は美女でも、政治的駆け引きを難なくこなせなくてはいけないでしょう」

非常に行儀悪いが、今、私は机にうつ伏せになっている。

………疲れた。

今までも疲れる事の連続だったけれど、ここ最近で一番疲れている。ラタリの言う通り、休暇でも取って姫殿下に仕事を丸投げしてやる

うか。

「枢機卿！窓の外を見てください！」

「んあ？」

.....

しばらく揃って固まっていたが、同時に叫んだ。

「「「何じゃありゃあ！？」」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9401n/>

ルイズと現代の兵士達を会わせてみました

2011年4月11日21時17分発行